

天花寺北瀬古遺跡(第1次)
薬師寺北裏遺跡
発掘調査報告

—— 一志郡嬭野町天花寺・一志所在遺跡の調査 ——

1999. 7

三重県埋蔵文化財センター

序

三重県のほぼ中央部に位置します一志郡は、雲出川水系によって形成された肥沃な土壌に恵まれ、古来より高い文化を形成してきました。特に、この雲出川の支流・中村川の流域は、一志郡の中でも特に重要な文化を育んできた地域であります。

最近でも、近鉄中川駅周辺の再開発事業に伴う発掘調査によって、大規模な灌漑施設と考えられる遺構や、我が国最古の墨書が記されたと考えられる土器が発見され、全国的な話題になったことは記憶に新しいところです。そのほかにも、三重県内屈指の遺構・遺物が集中しており、全国的に見ても重要な地域といえるのではないのでしょうか。

さて、今回の報告書は、県道改良事業に伴って緊急発掘調査を実施しました天花寺北瀬古遺跡、薬師寺北裏遺跡の2遺跡の発掘調査報告を掲載しております。天花寺地区は、前方後方墳である筒野古墳や天花寺廃寺などが造られている場所であり、嬉野町内でも特に遺跡の集中する地域であります。また、平成7年度から当センターが継続している、天花寺丘陵内遺跡群の発掘調査でも、当地域の歴史を解明する上で大きな成果を上げており、その重要性が認識されています。今回の発掘調査でも数多くの発見があり、そのことが再認識されました。しかし、このような貴重な遺跡が記録保存という形でしか残せないことは、誠に残念というほかありません。今回得られた成果をどのように活用していくかが、わたくしどもの今後の重要な課題であると考えております。

調査にあたっては、地元のみなさまをはじめ、嬉野町教育委員会、県土木部道路建設課（現・県土整備部道路整備課）・津地方県民局久居土木事務所（現・津地方県民局久居建設部）などの関係機関から多大なご協力と暖かいご配慮を頂くことができました。文末とはなりましたが、みなさまの誠意あるご対応に心からのお礼を申し上げます。

1999年7月

三重県埋蔵文化財センター
所長 大井 興 生

例 言

- 1 本書は、三重県一志郡越野町天花寺宇北瀬古・西山地内に所在する天花寺北瀬古遺跡および同町一志地内に所在する薬師寺北裏遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 この発掘調査は、主要地方道松阪一志線緊急地方道路整備事業および同線地方特定道路整備事業に伴い実施した。調査にかかる費用は、県土木部（現・県土整備部）が全額負担した。
- 3 天花寺北瀬古遺跡は、同一事業により次年度以降に発掘調査が予定されている。そこで、書名を『天花寺北瀬古遺跡（第1次）・薬師寺北裏遺跡発掘調査報告』とする。
- 4 調査は平成9年度に実施した。調査体制は以下の通りである。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）

主幹兼調査第一課長 古水康夫（総括）

調査第一課主任兼第二係長 前川嘉宏（調整）

（天花寺北瀬古遺跡）

主 事 木野本和之、技 師 川畑由紀子、主 事 松葉和也、

技 師 大川勝宏

管理指導課研修員 津山琢麻（県立木本高等学校）

（薬師寺北裏遺跡）

主 事 川瀬 聡

土工担当 ㈱三重県農業開発公社

- 5 本報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び管理指導課が行った。遺構・遺物の写真は、各担当者が撮影した。執筆は木野本・川畑・川瀬が担当し、分担は目次及び文末に明記した。なお、全体の編集は木野本が行った。
- 6 調査にあたっては、越野町・一志町・久居市在住のみなさん、越野町役場、越野町教育委員会、県土木部道路建設課（現・県土整備部道路整備課）・津地方県民局久居士木事務所（現・津地方県民局久居建設部）から多大な協力を受けたことを明記する。
- 7 報告書作成にあたっては、原山幹氏（愛知県教育委員会）、和氣清章氏（越野町教育委員会）、伊勢野久好氏（一志町教育委員会）、奥義次氏（県立度公高等学校）、上村安夫氏（斎宮歴史博物館）のご教示を得た。
- 8 挿図の方位は、真北で示している。なお、磁針方位は西偏 6° 20'（平成3年）、真北方位は西偏 0° 18' である。
- 9 挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。なお、写真図版は縮尺不同である。
- 10 本報告書での用語は、以下の通り統一した。
つき……………「杯」「坏」があるが、「杯」を用いた。
わん……………「碗」「碗」「鉢」があるが、「碗」を用いた。
- 11 本報告書での遺構は、各遺跡ごとに通番となっている。また、番号の頭には、見た目の性格によって以下の略記号を付けた。
SD……………溝 SE……………井戸 SK……………土坑 SF……………土師器焼成坑
SR……………旧河道 SZ……………落ち込み、性格不明遺構 pit……………ピット、柱穴
- 12 スキャンニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I	前	言	(木野本)	1
	1	調査の契機		1
	2	調査の経過		1
	3	調査の方法		3
	4	天花寺北瀬古遺跡の名称について		3
II	位置と歴史的環境		(木野本)	4
	1	位置		4
	2	歴史的環境		6
III	天花寺北瀬古遺跡		(木野本・川 畑)	8
	1	調査区の地形と基本的層位		8
	2	遺構		8
	3	遺物		26
	4	調査のまとめと課題		70
IV	薬師寺北裏遺跡		(川 瀬)	95
	1	遺構		95
	2	遺物		96
	3	調査のまとめ		98

挿 図 目 次

《天花寺北瀬古遺跡》

第1図	調査地周辺主要遺跡	4	第23図	出土遺物実測図(7)	37
第2図	調査地周辺地形図	5	第24図	出土遺物実測図(8)	38
第3図	調査区位置図	6	第25図	出土遺物実測図(9)	39
第4図	B地区中央部土層断面図	8	第26図	出土遺物実測図(10)	40
第5図	A地区SR1土層断面図	9	第27図	出土遺物実測図(11)	41
第6図	旧河道SR1北端部	10	第28図	出土遺物実測図(12)	42
第7図	調査区平面図	11~12	第29図	出土遺物実測図(13)	43
第8図	焼成坑SF96・119実測図	15	第30図	出土遺物実測図(14)	44
第9図	焼成坑SF109他実測図	16	第31図	出土遺物実測図(15)	45
第10図	焼成坑SF129・130実測図	17	第32図	出土遺物実測図(16)	46
第11図	土坑SK33実測図	18	第33図	出土遺物実測図(17)	47
第12図	溝SD26実測図	19	第34図	出土遺物実測図(18)	48
第13図	溝SD50実測図	20	第35図	出土遺物実測図(19)	49
第14図	井戸SE99実測図	21	第36図	出土遺物実測図(20)	50
第15図	井戸SE128実測図	21	第37図	出土遺物実測図(21)	51
第16図	井戸SE108実測図	22	第38図	出土遺物実測図(22)	52
第17図	出土遺物実測図(1)	31	第39図	出土遺物実測図(23)	53
第18図	出土遺物実測図(2)	32		《薬師寺北裏遺跡》	
第19図	出土遺物実測図(3)	33	第40図	調査区位置図	95
第20図	出土遺物実測図(4)	34	第41図	調査区平面図	97
第21図	出土遺物実測図(5)	35	第42図	調査区土層図	97
第22図	出土遺物実測図(6)	36	第43図	出土遺物実測図	99

表 目 次

《天花寺北瀬古遺跡》		第12表	出土遺物観察表(8)……………	60	
第1表	遺構一覽表(1)……………	23	第13表	出土遺物観察表(9)……………	61
第2表	遺構一覽表(2)……………	24	第14表	出土遺物観察表(10)……………	62
第3表	遺構一覽表(3)……………	25	第15表	出土遺物観察表(11)……………	63
第4表	遺構一覽表(4)……………	26	第16表	出土遺物観察表(12)……………	64
第5表	出土遺物観察表(1)……………	53	第17表	出土遺物観察表(13)……………	65
第6表	出土遺物観察表(2)……………	54	第18表	出土遺物観察表(14)……………	66
第7表	出土遺物観察表(3)……………	55	第19表	出土遺物観察表(15)……………	67
第8表	出土遺物観察表(4)……………	56	第20表	出土遺物観察表(16)……………	68
第9表	出土遺物観察表(5)……………	57	第21表	出土遺物観察表(17)……………	69
第10表	出土遺物観察表(6)……………	58	《薬師寺北裏遺跡》		
第11表	出土遺物観察表(7)……………	59	第22表	出土遺物観察表……………	100

写真図版目次

《天花寺北瀬古遺跡》		
表紙	天花寺丘陵上から調査区を望む……………	75
図版1	調査前風景・表土除去作業・作業風景……………	76
図版2	B地区調査後全景・SR1……………	77
図版3	SR1下層遺物出土状況①・②……………	78
図版4	SR1下層遺物出土状況③・SR1上層遺物出土状況①……………	79
図版5	SR1上層遺物出土状況②・③……………	80
図版6	SF96・SF120……………	81
図版7	SF109・b27グリットpit1遺物出土状況……………	82
図版8	SD26・SD81遺物出土状況……………	83
図版9	SK33遺物出土状況・SE99……………	84
図版10	SE108・SE108断ち割り後……………	85
図版11	SE128・SE128井筒……………	86
図版12	出土遺物①……………	87
図版13	出土遺物②……………	88
図版14	出土遺物③……………	89
図版15	出土遺物④……………	90
図版16	出土遺物⑤……………	91
図版17	出土遺物⑥……………	92
図版18	出土遺物⑦……………	93
図版19	調査地周辺の航空写真……………	94
《薬師寺北裏遺跡》		
図版20	調査前風景・調査後全景ほか……………	101
図版21	出土遺物……………	102

I 前 言

1. 調査の契機

県道松阪一志線は、松阪市と一志郡東部を結ぶ道路で、松阪市西部に南北に連なる堀坂山塊の東麓を走る。この道は、国道23号線の慢性的な朝夕の交通渋滞を避け松阪・津方面に通勤する人々にとって利用頻度の極めて高いルートである。しかし、松阪市阿坂地内から嬉野町宮古地内にかけてのルートは、旧来の集落内を中心に部分的に対向が困難な狭隘部分が存在し、生活のためには自動車を欠くことの出来ない現代にあっては、極めて不便な状況下にあった。特に、狭隘な部分の多い嬉野町・地内から同町宮古地内には部分的に対向不可能な場所があり、道路拡幅による通行困難の解消は緊急の課題となっていた。そこで、宮古地内の道路を拡幅し、天花寺地内には新たな路線を設ける工事が行われることとなった。

三重県埋蔵文化財センターでは、公共事業着工の事前に県担当部に事業照会を実施し、その回答を受けている。この路線についても遺跡分布調査を実施し、埋蔵文化財の有無を確認した。当該事業予定地は、周知の薬師寺北裏遺跡、「北瀬古遺跡」の範囲に含まれており、当センターがあらためて事業予定地内の遺物散布状況を調査した結果、この2遺跡における試掘調査が必要であると判断されるに至った。この調査ののち、調査第一課第二係長（当時）杉谷政樹を担当として試掘調査を実施したところ、事業地内の発掘調査が必要であるという判断に至った。今回の調査地は、一志集落東端部（薬師寺北裏遺跡）の500㎡と天花寺丘陵と現道の間（天花寺北瀬古遺跡）の6,500㎡である。なお、天花寺北瀬古遺跡については、次年度以降にも調査が予定されている。

2. 調査の経過

a 調査経過概要

天花寺北瀬古遺跡の調査は、5月初めから重機による表土掘削を開始し、5月26日からは作業員を投入しての調査となった。まず、上層の中世遺構面の調査から開始したが、基盤上層が旧流路埋土である

ため遺構埋土と基盤層の見分けがつきにくく遺構検出に苦労した。上層の調査終了後には、下層流路のトレンチ調査を行った。下層は流路であったが、天候不順の影響もあり掘削に苦労し、ようやく3月初めに調査を終了することが出来た。最終的な調査面積は上層5,800㎡・下層700㎡の計6,500㎡であった。なお、調査経過については、「調査日誌抄」を参照されたい。

薬師寺北裏遺跡の調査は、10月6日から重機による表土掘削を開始し、10月7日からは作業員を投入しての調査となった。天候にも恵まれ調査は順調に進み、10月28日には調査を終了することができた。

調査を無事に終了することができたのも、ひとえに作業員のみなさんの努力の賜物である。ここに御芳名を記し、心からの御礼を申し上げたい。

【天花寺北瀬古遺跡】

関本栄一、藤川治司、長谷川照雄、船木文雄、山崎 衛、葛西政利、小坂幸生、田中實男、白井洋平、関山恭子、平手幸子、萩原幸子、長谷川ハルエ、長谷川つじ子、北川真由美、松浦ノブ子、松田きみ、中西アイ子、枝川英美子、辻アサ子、杉山すず子、川村佳代子、末廣孝子、宮田つや子、宮本せつ

（順不同）

【薬師寺北裏遺跡】

森川順代、中島キクエ、近藤翠、前川さとゑ、森川とみへ、近藤多津子、信藤貞子、小林嘉兵衛、阪井昭一、近藤喜一、沢井寛男、横山孝史、田中武夫、笠井安夫、山下秀範

（順不同）

b 調査日誌（抄）

【1997年】

- 5月9日 プレハブ設置場所の造成開始。
- 5月12日 重機掘削開始（～22日）。包含層より中世、奈良・古墳時代の遺物がまとも出土。調査区東側の三郷井（さんごうい）跡から、五輪塔が大量に出土。
- 5月13日 調査区東側にトレンチを入れる。弥生～奈良時代の遺物を多く含む下層流路確認。
- 5月17日 現場事務所完成。

- 5月19日 重機掘削再開。
- 5月23日 地区設定。(古水康夫、木野本和之、川畑由紀子、原田恵理子、川瀬聡)
- 5月26日 人力掘削開始。ビット・溝等検出。
- 5月28日 A地区重機掘削開始。全面が旧流路である。古墳時代初頭の高杯・壺等が出土。
- 6月2日 SD26から中世遺物まとめて出土。底には礎石あり。SK33から山茶碗・土師皿等が出土。
- 6月10日 前日までの降雨で調査区水没。カナダ・マッギル大学からの研修生ニッキー・チェンさん、本日より現場研修。
- 6月18日 台風接近にともない作業中止。
- 6月24日 SD46・47掘削。土師皿等の中世遺物出土する。排土の場外搬出開始。
- 6月26日 SZ39は素掘り井戸と確認。壁崩落の危険があり掘削中止。
- 6月27日 松葉和也現場に合流。
- 6月30日 SD29の実測ポイント設定。木野本、奈良国立文化財研究所へ長期研修に出発。
- 7月4日 19～21ライン検出開始。Be19グリット検出時に円面破片出土。
- 7月8日 SZ39の掘り形ラインを確認。断面に流路と考えられる砂礫層あり。
- 7月18日 16～18ラインの検出開始。SD78・80の下層でSD82を確認。湧水があり掘削に苦労。
- 7月22日 SD81の明黄橙色土から16世紀代の土師皿が大量に出土。遺構カード記入が追いつかず苦労する。
- 8月8日 久しぶりの晴。蒸し暑い1日。調査区北辺で東西方向の流路状の落ち込み確認。小型丸底壺、須恵器杯、埴輪片等が出土。
- 8月12日 15ラインに沿ってトレンチを入れる。下層流路粗砂層より土器がまとめて出土。
- 8月19日 SF96の掘削。時期は7～8世紀か。
- 8月27日 残暑厳しい1日。SF96には焼成面が2つあるらしい。SK108を10cmほど下げ石組みを確認。井戸であった。
- 9月1日 本日より大川勝宏が合流。SF96の掘削完了し、写真撮影と断面割りを行う。
- 9月9日 富山大・広岡氏にSF96の地磁気測定を
行っていた。
- 9月10日 B地区北端部にトレンチを入れる。上面に遺構は確認できず。粗砂層内に古墳前期の高杯等の遺物確認。
- 9月11日 B地区東側埋戻し予定部分の写真撮影。
- 9月16日 台風19号接近。作業中止。
- 9月19日 A地区の検出作業開始。
- 9月24日 A地区流路の掘り下げ開始。B地区30ライン以南の重機掘削開始(～25日)。
- 9月30日 A地区流路、写真撮影。
- 10月2日 木野本、奈文研修より帰る。A地区の調査完了。SE108完掘。
- 10月6日 B地区北端部にトレンチを入れる。砂礫層から6世紀代の遺物まとめて出土。
- 10月8日 B地区北端部に東西方向のトレンチを入れる。北東隅に肩を確認。
- 10月9日 旧流路下層より古墳時代の遺物まとめて出土。方向ははまだ確定できず。何条もの流路が錯綜する模様。大川、本日まで。
- 10月14日 現地説明会に備えて、既発掘区の清掃を開始(～17日)。
- 10月16日 現説のため記者発表(原田・川畑)。
- 10月18日 現地説明会開催(天花寺城跡・小谷赤坂遺跡と共催)。200名の参加を得る。
- 10月21日 旧流路埋土から須恵器横瓶、土師器長胴甕がほぼ完形で出土。
- 11月5日 B地区北端部の旧流路は、A地区の流路と繋がる。越野中考古クラブの生徒5名、教諭1名が見学。
- 11月10日 旧流路の掘削、古墳時代の底で一旦止める。津田琢麻、本日より合流。
- 11月11日 朝のラジオ体操始める。
- 11月14日 川畑、高茶屋病院の現場へ異動。
- 11月18日 B地区南部分(30ライン以南)の検出開始。攪乱状の落ち込みが多い。
- 11月19日 既調査区の遺構実測用のピン打ち作業開始(前川嘉宏・松葉・津田)。
- 11月27日 既調査区の遺構実測開始(前川・竹内英昭・津田)。
- 12月2日 週末の豪雨で、既調査区の壁崩落。南調査区は完全に水没。終日、復旧作業に追わ

れる。暗い感情に陥る。既調査区の遺構実測は続行（野原宏司・北条正則・津田）

- 12月5日 南調査区は、ほ場整備時の削平激しく、遺構の残り悪い。落ち込み部分は、埋戻し・攪乱が大半。
- 12月9日 攪乱土から須恵器窯の壁が出土。丘陵東麓に須恵器窯が存在した可能性あり。
- 12月11日 調査区南端でS E128を確認。底に丸太くり抜き井戸あり。
- 12月16日 上層遺構の掘削完了。
- 12月22日 1/20遺構図面完成。
- 12月24日 下層流路既掘部分の平板測量（前川・津田・木野本）

【1998年】

- 1月8日 下層流路トレンチ掘削開始（～20日）。
- 1月21日 井戸の遺構実測を開始する（～29日）。
- 2月3日 現地での調査は完了。
- 2月4日 出土遺物の整理・実測開始（～24日）。
- 2月25日 大雨のなか、現場から遺物の搬出。多数の応援を得る。
- 2月27日 現場から撤収。

c 文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官等宛に行っている。

【天花寺北瀬古遺跡】

- ・法第57条の3第1項（文化庁長官あて）
平成7年7月20日付道建第825号（県知事通知）
 - ・法第98条の2第1項（文化庁長官あて）
平成9年5月6日付教文第953号（県教育長通知）
 - ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（久居警察署長あて）
平成10年3月30日付教文第6-112号（県教育長通知）
- #### 【薬師寺北裏遺跡】
- ・法第98条の2第1項（文化庁長官あて）
平成9年10月31日付教文第1659号（県教育長通知）
 - ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（久居警察署長あて）
平成10年3月30日付教文第6-112号（県教育長通知）

3 調査の方法

a 小地区設定について

【天花寺北瀬古遺跡】

今回の調査では、調査区内を4m四方の拵目区切ることによって小地区を設定した。西からアルファベット、北から数字を付け、拵目の北西隅交点をその小地区の符号とした。なお、当遺跡の調査は次年度以降も継続するため、この小地区設定は国土座標軸に合わせて設定している。

【薬師寺北裏遺跡】

小地区は設定していない。しかし、調査区が道路によって3つに分断されるため、今回の調査区は、A区・B区・C区の3地区よりなる。

b 遺構図面について

【天花寺北瀬古遺跡】

調査区の平面図は、上層の中世遺構面を1/20および1/50で、流路を中心としたA地区とB地区北端部は1/100で作成している。また、溝・井戸などの遺構は、個別に1/10の実測図を作成しているものもある。

【薬師寺北裏遺跡】

調査区の平面図は、1/100で作成している。

4 天花寺北瀬古遺跡の名称について

前述の通り、周知の遺跡として「北瀬古遺跡」という名称で遺跡登録台帳等にも記述されており（県遺跡台帳番号405-93）、その範囲は嬉野町天花寺字北瀬古のほかには字西山まで広がる。しかし、県内に同名の遺跡が存在し、単純に遺跡名に字名を冠することによって混乱を招く恐れがあると考えられた。そこで、調査開始にあたり従来の遺跡名に大字名を加えた「天花寺北瀬古遺跡」と改称し以後はこの名称を使用することとした'。

<註>

1 「瀬古」のつく字名は各地に存在する。その結果、同じ名称がいくつか存在する場合がある。例えば、亀山市布気町は読み方は異なるものの、「北瀬古（きたせこ）」遺跡がある。この遺跡は1985年に発掘調査が実施され、次に挙げる報告書が刊行されている。

山田 猛『山城遺跡・北瀬古遺跡』（三重県埋蔵文化財センター 1994）

II 位置と歴史的環境

1. 位置

天花寺北瀬古遺跡(1)は、近鉄中川駅の西方約1kmの沖積地に立地する。遺跡の東側は標高12m前後の自然堤防上に立地する天花寺集落に、西側は天花寺丘陵の麓に接している。遺跡は、前述の自然堤防と丘陵の間の旧河道上に立地し、調査前の標高も11m

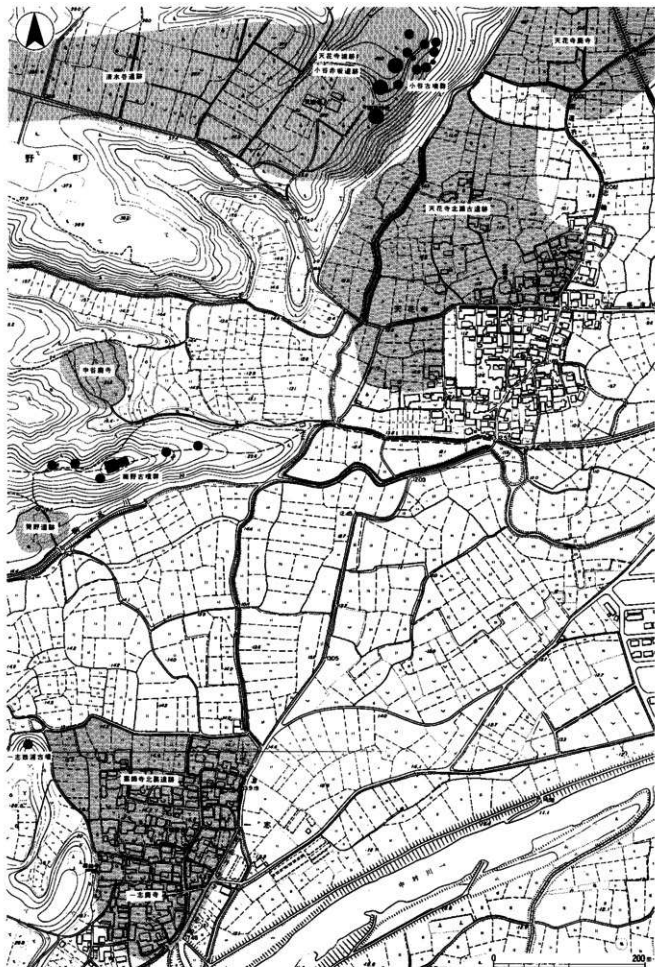
前後と周囲よりやや低い状況であった。この天花寺丘陵を挟んで北側には雲出川が、東側にはその支流中村川が流れ、両河川は遺跡の北東約1.5kmの地点で合流する。したがって、調査地は狭義には中村川下流域、広義には雲出川中流域に相当する。雲出川は一志郡のほぼ中央部を流れ、この川を渡れば旧伊



1. 天花寺北瀬古遺跡 2. 薬師寺北瀬遺跡 3. 小谷赤坂遺跡 4. 清水谷遺跡 5. 馬ノ瀬遺跡 6. 蛇亀橋遺跡 7. 焼野遺跡
8. 天保遺跡 9. 那一遺跡 10. 上野塚内遺跡 11. 鳥田遺跡 12. 井之上遺跡 13. 閉塚内遺跡 14. 弥五郎塚内遺跡 15. 養生田遺跡
16. 太白遺跡 17. 辻塚内瓦葺跡群 18. 八田遺跡 19. 壺之内遺跡 20. 御所塚内遺跡 21. 下之庄遺跡 22. 中尾塚内遺跡
23. 下之庄東方遺跡 24. 織野遺跡 25. 山神田遺跡 26. 田村西瀬古遺跡 27. 竜王野遺跡 28. 高くね遺跡 29. 荒野遺跡 30. 松葉遺跡
31. 天王塚内遺跡 32. 庵ノ門遺跡 33. 川北清水遺跡 34. 片部遺跡 35. 黒田遺跡 36. 野田遺跡 37. 貝塚遺跡 38. 五反田遺跡
39. 六反田遺跡 40. 針箱遺跡 41. 一色塚内遺跡 42. 里前遺跡 43. 堀田遺跡 44. 天花寺瓦葺跡 45. 平生遺跡 46. 片野遺跡
47. 鳥塚本遺跡 48. 赤坂遺跡
- a. 西山1号墳 b. 筒野1号墳 c. 嶺山古墳 d. 上野1号墳基 e. 向山古墳 f. 庵ノ門1号墳 g. 八丈塚寺 h. 天花寺廃寺
- i. 中谷廃寺 j. 一志廃寺 k. 織野廃寺 l. 上野廃寺
- A. 八太城 B. 小山城 C. 天花寺城 D. 須賀城および積善寺跡 E. 養生田城 F. 八田城 G. 森本城

■は前方後方墳・前方後円形墳基 □は古代寺院跡 ○は中世城館跡

第1図 調査地周辺主要遺跡 1:50,000(国土地理院1:25,000「大仰」より)



第2図 調査地周辺地形図 1 : 5,000 (總野町都市計画図 1 : 2,500より)

賀国を経て旧大和国に至る。この雲出川流域には、伊勢と畿内を結ぶ古道が存在していた¹⁾。古道は、遺跡の南方約1km、薬師寺北裏遺跡²⁾の所在する一志集落付近を通過していたと推定されており、周辺は古代における交通の要衝であった。

2. 歴史的環境

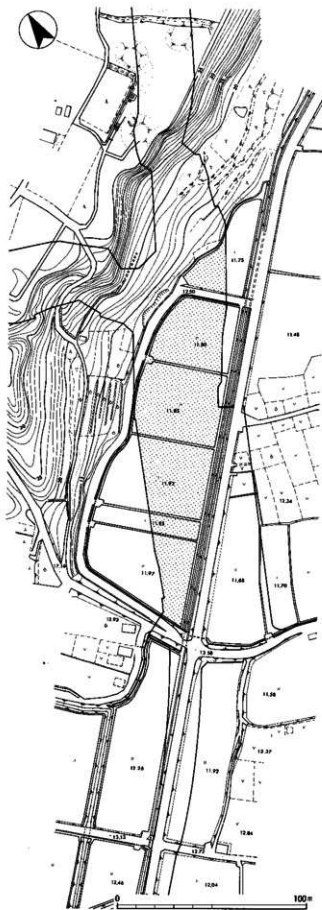
(1) 調査地周辺の歴史的環境の概略

雲出川中流域・中村川下流域の歴史的環境については、『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告書』³⁾等に詳しい記述があるので詳細はそれらを参照されたい。したがって、本章では、これまでの天花寺丘陵内遺跡群の調査で新たに判明した事実、その他の発掘調査によって新たに判明した調査地周辺の状況について若干述べることにする。

前述の2つの河川によって形成された台地・平野には、各時代にわたるさまざまな遺跡の展開がみられ、旧伊勢国のなかでも極めて重要な遺跡が多数存在する地域である。その中でも特筆されるのは、古墳時代前期に前方後墳が集中的に造られたこと、古代寺院が密集することである。調査地の南の丘陵上には、全長約45mの前方後墳である筒野1号墳(b)が所在する。また、調査地を含むわずか1.4kmの範囲に天華寺廃寺⁴⁾(h)・中谷廃寺⁵⁾(i)・一志廃寺(j)の三寺院が集中する。さらに、現一志集落には「郡一」という字名が残り、前述の中谷廃寺およびその周辺の遺跡も含め、古代一志郡衙の候補地として注目されるようになった。このように、調査地周辺は娘野町でも特に重要な遺跡が集中する地域であると言える。

(2) 天花寺丘陵内遺跡群の調査

泉道改良事業に伴う天花寺丘陵内遺跡群の調査は、平成7年度から当センターおよび娘野町教育委員会によって継続的に行われている。その結果、弥生・奈良時代の集落跡、古墳、中・近世墓、天花寺城に関連すると思われる溝、近世の礫石経埋納施設等の遺構が確認された。平成9年度実施の第4次調査では多数の中世墓が確認された。中世墓は、約600㎡の範囲で40基以上も確認されており、その成立については天花寺周辺の在地勢力との関係が注目される。また、同時に確認された近世の礫石経埋納施設も、近世における周辺の信仰を考える上で興味



第3図 調査地区位置図 1 : 2,000

深い発見である。さらに下層調査では、弥生時代後期の竪穴住居から船・鹿の線刻絵画が描かれた土器が出土した。この船については「構造船」である可能性が高く、当時の周辺の自然環境および水上交通を考える上で非常に興味深い¹⁾。なお、遺構は確認されていないものの出土品には縄文時代早期の遺物も含まれている。これらのことから、調査地周辺地域は時代を超えて人々の活動の場として重要な場所でありつづけたといえる。

(3) 三郷井について

三郷井は1655(承応4)年に開墾された、天花寺・宮古・平生の3大字(郷)の灌漑用水である。一志の南の中村川に井堰を設けて分水し、一志の東部を通過して天花寺の南で一旦駒返川と合流する。更に天花寺丘陵東麓を北流して宮古に入り、最後に平生で数派の井溝に分かれる²⁾。昭和50年代の圃場整備事業によって若干のルート変更はあったものの、現在も周辺の田畑を潤す重要な用水として機能し続けている。

(註)

- 1 千田総『横大路の歴史地理』・足利健亮『大和から伊勢神宮への古代の道』(ともに上田正昭編『探訪古代の道1』法蔵館1988)など。
- 2 伊勢野久好『天花寺山』(一志町・嬉野町遺跡調査会 1991)伊藤裕偉『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1996)
- 3 山田猛『天華寺庵寺』(『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1981)
- 4 『中谷庵寺』(『嬉野町の遺跡』皇學館大學考古学研究会 1989)
- 5 『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査概要』(三重県埋蔵文化財センター 1998)
- 6 『嬉野町史』(嬉野町 1981)
- 7 『片部遺跡現地説明会資料』・『貝蔵遺跡現地説明会資料』(ともに嬉野町教育委員会)
- 8 中川明・西村美幸『堀田遺跡第3次発掘調査概

(4) 低地の調査

近年の近鉄中川駅周辺再開発事業に伴い、これまでほとんど手が付けられていなかった低地での調査が盛んとなり、数々の興味深い成果をあげている。中川駅東側にある片部遺跡(34)・貝蔵遺跡(37)では大規模な水利施設が確認されている。また、両遺跡から出土した土器は墨書状のものが認められる興味深い遺物である³⁾。さらに、天花寺北瀬古遺跡の北約500mの堀田遺跡(43)でも古墳時代前期の水利施設が確認され、出土遺物のなかには伊勢地方では最古級の朝顔形埴輪が含まれている⁴⁾。これら確認された事実は、この地域に大規模な土木工事を可能にする技術を持った集団が存在した裏付けとなり、周辺に集中する前方後方墳群との関連が興味深い。

また、嬉野町に隣接する三雲町や津市南部でも、平成9年度実施の本調査によって貴重な成果が得られた⁵⁾。発掘成果を検討することによって、これまで不明な点の多かった低地部の歴史が解明されることが期待される。

(木野本和之)

報』(三重県埋蔵文化財センター 1996)

- 9 嬉野町および周辺の低地部の調査については、下記文献を参照されたい。
 - ・伊藤裕偉・川崎志乃『嶋波 第1次調査』(三重県埋蔵文化財センター 1998)
 - ・大川勝宏『小野江基目遺跡・小野江基目古墳群発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1999)
 - ・水谷豊『宮ノ腰遺跡発掘調査報告Ⅱ』(三重県埋蔵文化財センター 1999)
 - ・山本義浩『上ノ庄北出遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1998)
 - ・萩原義彦『田村西瀬古遺跡』(三重県埋蔵文化財センター 1999)
 - ・新名強『前田町屋遺跡-第2次調査-』(三重県埋蔵文化財センター 1999)

III. 天花寺北瀬古遺跡

1. 調査区の地形と基本的層位

調査区は、調査前の標高で約11mの沖積地に位置する。すぐ西には比高約25mの天花寺丘陵、東には天花寺集落の立地する自然堤防がある。調査区は既に圃場整備事業が完了している地域である。

調査で確認された遺構は、大きく古墳時代以前～奈良時代、平安時代～室町時代（以下、この時期を「中世」とする）、江戸時代（以下、この時期を「近世」とする）の3時期に区分される。奈良時代以前には旧河道、飛鳥時代には旧河道・土師器焼成坑、奈良時代には旧河道・溝などの遺構が確認できた。中世には、小規模な流路と掘立柱建物を中心とした集落が形成されていたものと考えられる。

調査区の基本的な層位は、第1層：灰褐色土（耕作土）、第2層：明黄褐色粘質土（床土）、部分的に異なるが第3層黄褐色系砂質土である。中世の遺構は第3層上面で検出できた。なお、調査区南部西寄りでは西側の天花寺丘陵の基盤層である黄褐色系粘質土の部分が確認できた。この部分は天花寺丘陵から南東に張り出す支尾根の末端部分に相当する。圃場整備事業以前の地形図からも、他の部分に比べこの部分が若干高くなっていたことが観察できる。また、検出された遺構が極端に少なく、土取りと思われる攪乱が多く確認された。このことから、調査区南部については、圃場整備事業段階の削平がかなり激しかったものと考えられる。さらに、下層では、流路によって形成された淡褐色系砂・砂礫・灰色系シルトなどの堆積が確認できる。この流路による堆積層は分厚く、下層確認のため入れたトレンチでは調査前の地表面下約4mで、青灰色系粘土の基盤層を確認した。このことから、下層旧河道は、当時かなりの水量をもっていたことが推測される。よって、中世の遺構面はそれ以前の流路によって形成された堆積土上にあり、同時に中世の遺構面はそれ以前の包含層でもある。（木野本和之）

2. 遺構

今回の調査で確認できた遺構は、前述のように大きくは古墳時代と中世に分かれ、その他に近世の



第4図 B地区中央部土層断面図 1:80

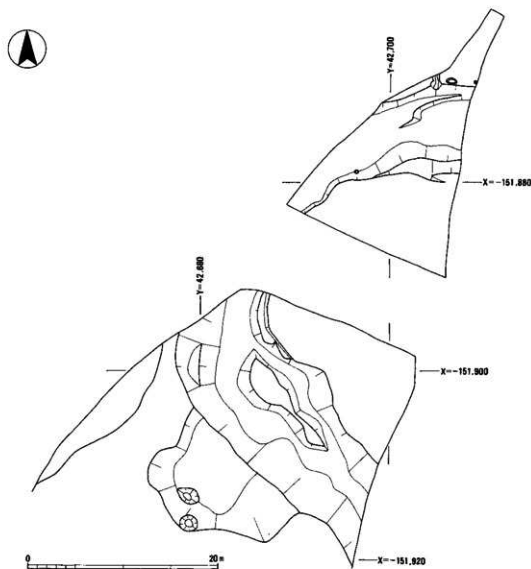
用水路も確認されている。ここでは主な遺構について記述する。

(1). 下層旧河道

旧河道は厳密に言えば遺構ではないが、本報告書では便宜上遺構として扱う。

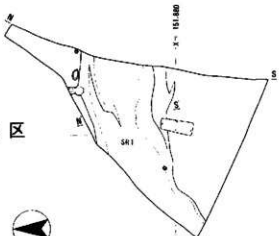
旧河道SR1 調査区のはば全面にわたって検出した旧河道で、その規模の違いはあるが縄文時代から中世後期まで存続したものである。河道は今回の調査区を縦断する形で北流し、天花寺丘陵とぶつかった後に流れを大きく東に変え、現・中村川の方方向に向かうものと推定される。今回の調査区は道路建設に伴うもので、南北に細長いため図らずもこの旧河道の流れた方向に沿った形で設定され、道路幅に相当する東西方向については制約されたものとなっ

ている。上層遺構の調査終了後、トレンチを入れて川幅の確認調査を行った。その結果、調査区南部以外で川岸に相当する安定した土層が確認されなかった。土層の観察では、旧河道は埋没しかけては新しい流路に切られている状態が観察でき、天花寺丘陵と現集落の立地する自然堤防の間を乱流していたものと思われるが、各時期の流路を明確に特定することは出来なかった。遺物出土状況から、旧河道は縄文時代晩期から古墳時代前期頃まで天花寺丘陵寄り流れ、古墳時代中・後期から中世後期にかけて次第に現集落寄りにその流路を変えていったものと考えられる。調査段階でSR55・SR100・SR115としていた旧河道についても、SR1のある時期の流れであると考えるのが妥当であろう。

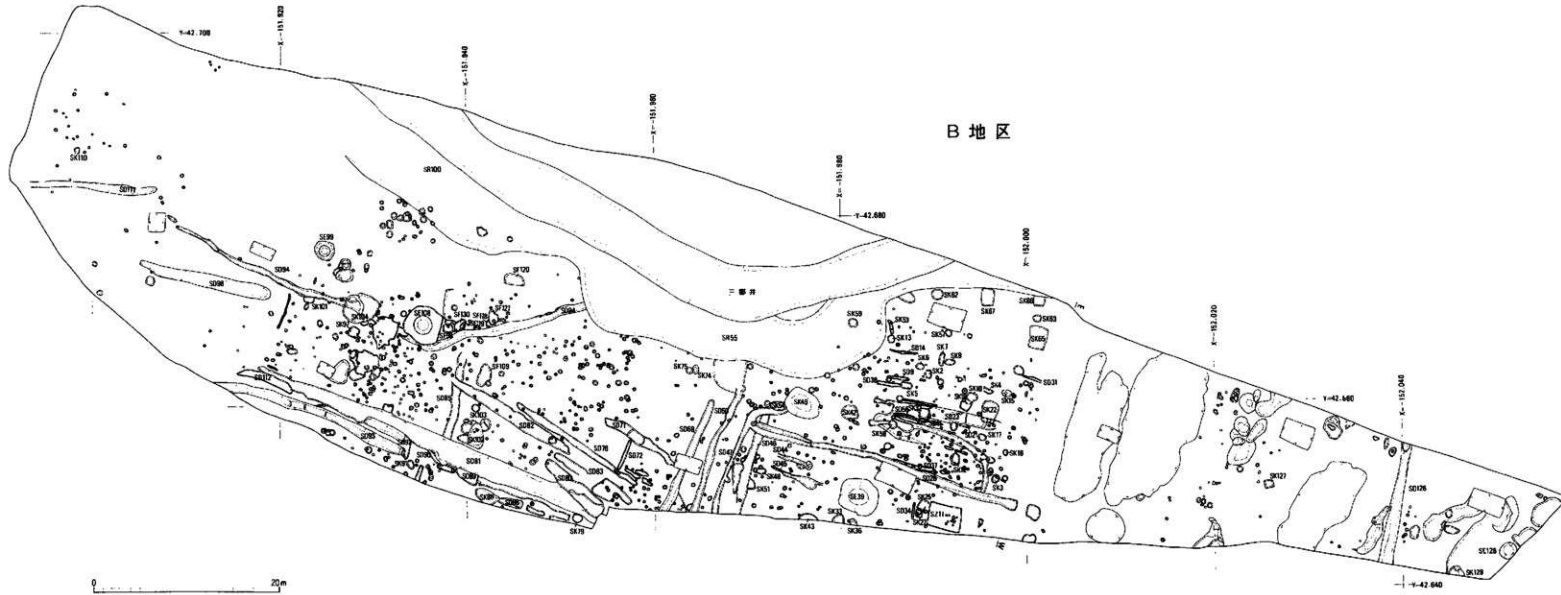


第6図 旧河道SR1北端部 1:400

A 地区



B 地区



第7图 調査区平面図 1:400

上層遺構密度が極めて薄いA地区およびB地区北端部分で、トレンチ調査に先立ち下層の調査を行った。その結果、調査区内を大きく蛇行する河道を検出した。この河道は、幅約4～6m、深さ約1.3mである。この部分の基本的な埋土は、灰色系・黄灰系砂質土、細砂、粗砂、シルト等の互層である。埋土中には、古墳時代中期～飛鳥時代の土器類が多量に含まれていた。特にB地区北端部では、遺物が集中する「土器溜」が数カ所確認できた。遺物組成としては、須恵器が中心で、それに土師器壺が付随する。また、この河道に切られる形で検出した鉄分の多く沈着する部分からは、弥生時代から古墳時代前期にかけての遺物が集中する土器溜を確認した。ここからは土師器小型丸底甕がまとめて出土しており、その中には体部焼成後穿孔されたものも含まれていた。これ以外に、際立った出土状況を示すものではなく、旧河道全体から幅広い時代にわたる多量の遺物が出土した。(木野本和之)

(2) 飛鳥時代の遺構

この時期の遺構には、土師器焼成坑がある。土師器焼成坑はB地区中央付近に集中して8基(可能性があるものを含めると9基)、B地区北端で1基確認された。

土師器焼成坑 S F 96 長辺1.1m以上、短辺1.0m、深さ約0.3mで、主軸はほぼ南北方向である。検出時に北辺と両コーナーに被熱痕が見られ、北辺が奥壁と推定して調査を進めた。土層観察では、奥壁より約1m南の範囲にわたって強い被熱痕が見られる。ここが床面と推定されるが、前壁の立ち上がり部分は S F 130との切り合いによってはっきりしない。また、床面から約5cm上に強い被熱痕が見られることから、この焼成坑では2回の焼成が行われた可能性が指摘できる。側壁は西壁では奥壁より約0.8m、東壁では約0.5mにわたり床面から遺構検出面までの被熱痕が見られる。特に床面は、奥壁に向かって右側に強い被熱痕の範囲が確認できる。遺物は、土師器壺・杯などの細片が奥壁部分に集中して出土している。

土師器焼成坑 S F 109 長辺1.6m以上、短辺約1m、深さ約0.3mで、主軸はほぼ東西方向である。北西コーナー壁部分に被熱痕が見られ、ここが奥壁

であると考えられる。土層観察では、明瞭な被熱痕は見られないが、第1・2層に焼土粒の混入が、第1層下に微弱な被熱痕が見られる。なお、この遺構は後述する S F 131と重複している。切り合い関係は、土層観察では断定できなかったが、床面の被熱痕の広がりから S F 109が新しいと思われる。埋土からは、土師器の細片がわずかに出土している。

土師器焼成坑 S F 110 B地区北端部に位置する。長辺1.1m以上、短辺約1m、深さ約0.3mで、主軸はほぼ南北方向である。検出時は「コ」の字状に被熱痕が確認できた。掘り下げると床面に炭化物の広がり確認できるのみで、被熱痕は南辺の上面にわずかながら確認したのみである。断ち割った結果、その面より下で焼土粒・炭化物、被熱痕の存在は確認されず、前述の面を床面と認定した。

土師器焼成坑 S F 118 後述する S F 121、S D 94に切られる遺構である。長辺約1.9m、短辺約0.5m以上、深さ約0.3mで、主軸はほぼ南北方向である。検出時、北辺および東コーナーに被熱痕が見られ、北辺が奥壁と推定される。土層観察では、奥壁から約0.6m南の範囲に強い被熱痕が見られ、ここが床面であると考えられる。平面観察では、奥壁から約0.8mの範囲に強い被熱痕が確認できる。遺物は、土師器片が奥壁部分の被熱した床面に、ほぼ接した状態で集中して出土したが、いずれも細片である。

土師器焼成坑 S F 119 S F 118の北に位置する。S D 94に切られる、残存部分の規模は長辺0.5m以上、短辺約0.7m、深さ約0.2mである。平面検出では被熱痕は確認できなかったが、S D 94の壁を観察すると、検出面より約0.2m下がった位置で被熱痕の広がりが確認でき、ここが床面と推定される。東西方向の土層観察では、東に向かうほど被熱痕は薄くなり、床面自体は上がる。したがって主軸はほぼ東西方向で、西側に奥壁があったものと考えられる。また、S D 94の西側壁には被熱痕が確認できないため、長辺の推定長は約1.1m程度であろう。なお、残存部分の土層観察では、被熱面が1面のみであることから、この焼成坑では1回のみの焼成が行われたものと考えられる。出土した遺物には、土師器細片がわずかにある。

土師器焼成坑 S F 120 長辺は推定で2.1m以上、

短辺約1.2m、深さ約0.2m、主軸はほぼ南北方向である。検出時に、北辺とその両コーナー被熱痕が見られた。壁には、奥全体と東西とも約0.5m南に被熱痕が見られる。床面は、奥壁から約0.7mの範囲に強い被熱痕が確認できる。土層観察で確認できる被熱面は1面だけであることから、この焼成坑では1回のみ焼成が行われたものとする。なお、奥壁やや西寄りには、空気調整孔と思われるピットが付属する。遺物は、土師器片が奥壁部分の被熱した床面に、ほぼ接した状態で集中して出土したが、いずれも細片である。

土師器焼成坑 S F 121 S F 118を切る焼成坑である。S F 118を掘削し床面の検討をしたところ、床面の被熱痕が不自然に断絶し東西方向の土層セクションに被熱痕の立ち上がり確認でき、別の焼成坑が存在するものと判断した。長辺約1.4m、短辺約0.8m、深さ約0.2mである。前述のように、S F 118の東西セクションで観察できた被熱痕の立ち上がりから見て、西壁が奥壁に相当するものとする。したがって、主軸は東西方向である。土層観察では、奥壁から約0.1~0.9mの範囲に強い被熱痕が見られ、この部分が床面であると推定される。確認された被熱痕はこの1面のみであることから、この焼成坑では1回の焼成が行われたものとする。床面北西隅付近に特に強い被熱範囲が認められるものの、側壁には被熱痕は認められない。遺物は、土師器細片がわずかに出土した。

土師器焼成坑 S F 130 S F 96を切る焼成坑である。S F 96を掘削し床面の検討をしたところ、前壁部分に別の土坑が重なっていることを確認した。精査の結果、かなり残りの悪い焼成坑を確認した。また、この焼成坑はS D 94に切られる。長辺約1.8m、短辺約1.1m、深さ約0.1mである。床面には、焼土粒・炭化物粒が散布するが、強い被熱痕は確認できない。したがって、奥・手前の位置関係がはっきりせず、主軸の方向も不明である。埋土からは、土師器細片がわずかに出土した。

土師器焼成坑 S F 131 長辺は推定で1.6m以上、短辺約1.1m、深さ約0.1m以下の規模。主軸は、ほぼ東西方向である。壁部分に被熱痕は見られないが南西部床面に微弱な被熱痕が見られることと、推定

される平面形から、南西辺が奥壁と推定される。土層観察では、明瞭な床面は確認できなかった。埋土から、土師器細片が少量出土している。

そのほかにも、S F 120の南東部分の旧河道の土層観察でも、底部に強い被熱痕をもつ落ち込みを確認している。焼成坑群に近いことから、これも旧河道がある程度埋没し安定した面となった後、構築された焼成坑の可能性がある。(川畑由紀子)

(3) 奈良時代の遺構

この時代の遺構には旧河道・溝がある。

旧河道 S R 115 調査区東端で、後述する近世の用水路に切られる形で検出した。他の旧河道と交錯する部分が多く、幅約5m・延長約7mを確認したのみである。水量はかなりあったようで、拳大の礫を多く含む砂層には、奈良時代を中心とする土器が多く含まれていた。

溝 S D 94 ゆるやかな弧を描く。南端は近世の用水路に切られ、北端は徐々に浅くなり途切れる。断面はV字の葉研状である。ちょうど中間部分で中世の遺構によって分断されているが一連のものであると考えられる。南端の延長は当時の河道であることから、この溝は川から水を引くためのものであった可能性がある。埋土から、奈良時代の土師器・須恵器が出土している。(木野本和之)

(4) 中世の遺構

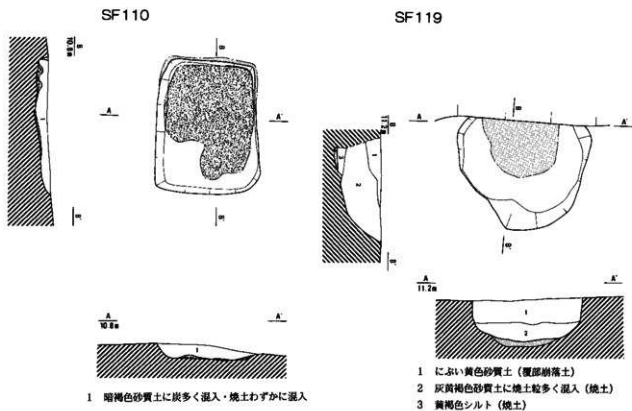
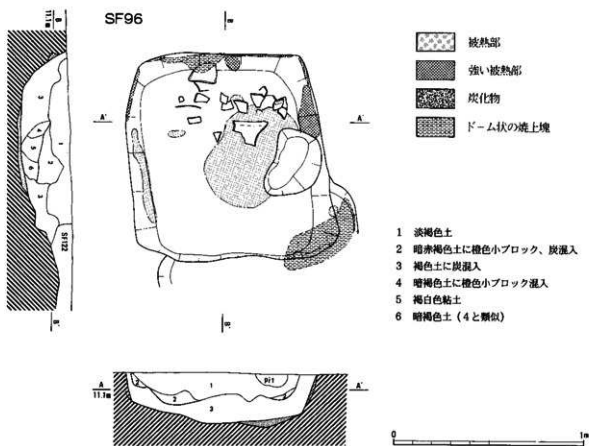
この時代の遺構には、旧河道・溝・土坑・井戸のほかに多数の柱穴がある。前述のように、この周辺は圃場整備事業が完了した地域であり、遺構はある程度のレベルまで削平されたと考えられる。特に、天花寺丘陵から南東に張り出す支根根周辺の標高が高い部分については、大きく削平されており、溝・井戸等の深く掘削された遺構以外の残りは悪かった。

a. 旧河道

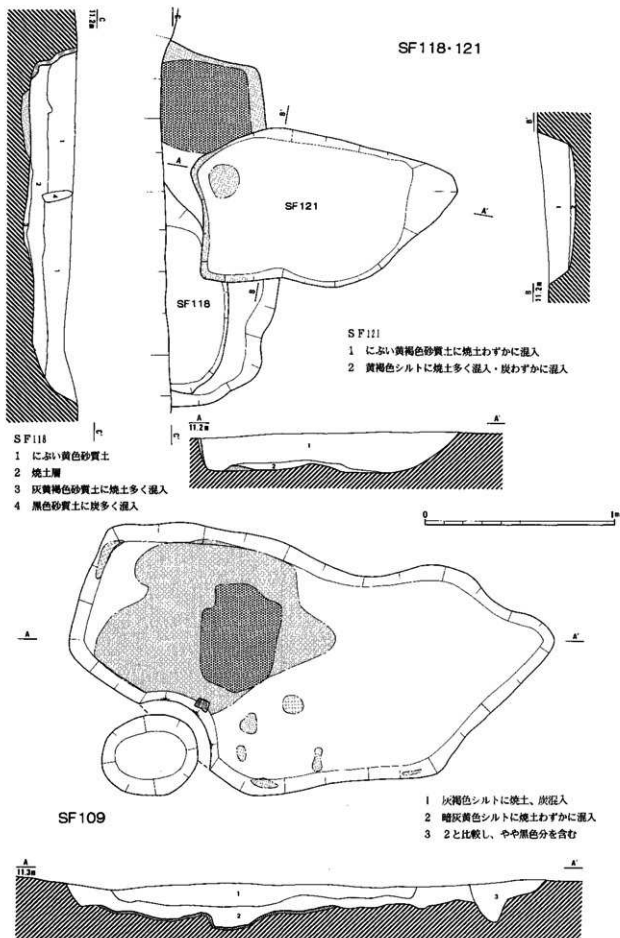
旧河道 S R 55 B地区のほぼ中央部東寄りで、屈曲する部分を検出した。後述する三郷井と、ほぼ重なる形である。埋土には、平安時代から室町時代にかけての土師器・陶磁器等が含まれていた。

b. 溝

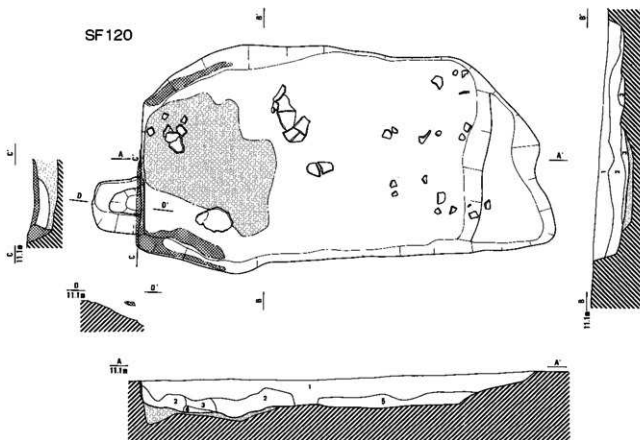
溝 S D 26 幅約1m・深さ約0.2~0.5m・延長約30mにわたって検出した。溝は、南西から北東方向に直線的に伸び、両端は途切れる。溝底には、拳



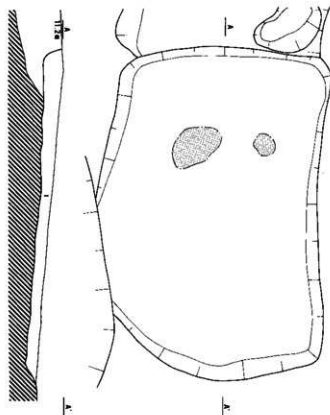
第8図 焼成坑SF96・119実測図 1 : 20



第9図 焼成坑SF109・118・121実測図 1:20



- 1 明黄褐色砂質土に焼土粒混入
- 2 におい黄褐色砂質土に焼土粒、炭多く混入
- 3 暗褐色砂質土に炭多く混入・焼土わずかに混入
- 4 橙色砂質土
- 5 黄褐色砂質土におい黄色ブロック含む・焼土炭わずかに混入（かき出しの土か）



- 1 灰黄褐色砂質土に焼土・炭多く混入



SF130

第10図 焼成坑SF120・130実測図 1:20

大から人頭大の礫がまとめて検出された。礫が途切れる部分の溝は浅く、おそらくこの部分については後世の削平を受けたものであると考えられる。埋土には、15世紀後半を中心とする土師器・陶器の破片が含まれていた。溝の状況から、これは礫敷の暗渠溝であったと考えられる。

溝 S D 50 幅約0.8m・深さ約0.2m・延長約14mにわたって検出した。溝は、東西方向に直線的に伸びるが、西端部分は調査区外の天花寺丘陵方向に伸び、東端は旧河道 S R55に切られる形で終息する。この部分には、拳大から人頭大の礫の集石が検出された。集石には奈良時代～中世の土器片・瓦片が含まれていた。集石の下に、遺構らしいものは確認できなかった。溝底には、前述の S D 26 同様に礫がまとめて検出されたことから、これも礫敷の暗渠溝であったと考える。埋土には、13世紀後半の陶器小皿等の遺物が含まれていた。

溝 S D 81 幅約2～3m・深さ約0.8mの素掘りの溝で、延長約35mにわたって検出した。断面形逆台形状を呈するこの遺構は、今回の調査で検出した遺構の中では最大規模で、溝というよりはむしろ堀と認識してもよいほどである。西に隣接する天花寺丘陵の裾と、ほぼ並行する形で南西から北東に直線的に伸びる。北端部分は S D 112 に切られる形で終息し、南端部分は調査区外に伸びる。埋土は、上から暗灰黄色系・灰黄色系・暗灰黄色系の大きく3層に分層が可能である。埋土上層からは15世紀末、下層からは14世紀末～15世紀中頃の南伊勢系の土師器皿がまとめて出土している。

溝 S D 93 幅約1.2m・深さ約0.5mの素掘りの溝で、延長約20mにわたって検出した。溝は、前述の S D 81 とほぼ並行する形で検出された。南端部は S D 92 に切られる形で終息し、北端部は調査区外の天花寺丘陵方向に伸びる。一部には、投棄されたとされる拳大から人頭大の礫が検出された。埋土には、13世紀後半の土師器・陶器が含まれていた。

溝 S D 126 幅約1.2m・深さ約0.4m・延長約13mにわたって検出した。断面形は、逆台形状を呈する素掘りの溝である。溝は、調査区を横断する形でほぼ東西方向に伸びる。埋土からは、15世紀後半の土師器・陶器が出土している。

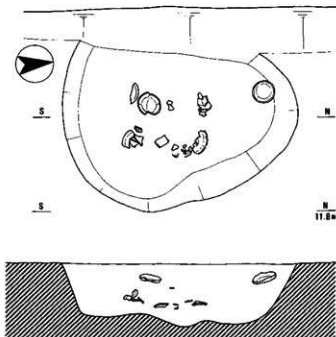
c. 土坑

土坑 S K 33 長径約1.2m・短径約1m・深さ約0.3mの平面形楕円形の土坑である。埋土には、14世紀末～15世紀初頭の南伊勢系土師器皿・陶器碗の他、青磁片も含まれていた。

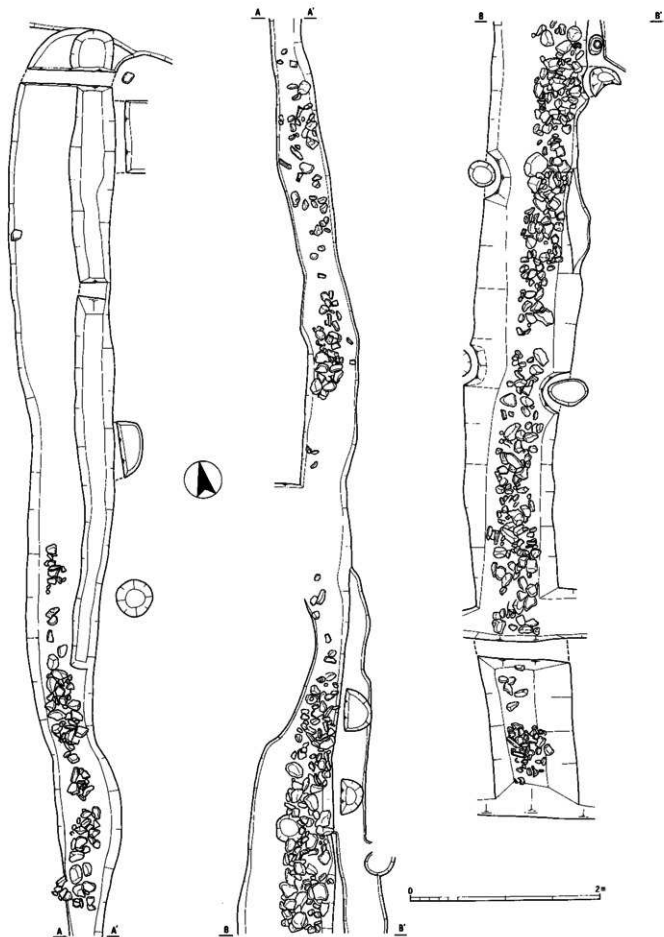
土坑 S K 79 直径約0.8mの土坑である。ベースと埋土の判別が難しく、上部をかなり削った時点であろう土坑が認識できる状態であった。埋土中には、14世紀前半の土師器・陶器が含まれていた。

d. 井戸

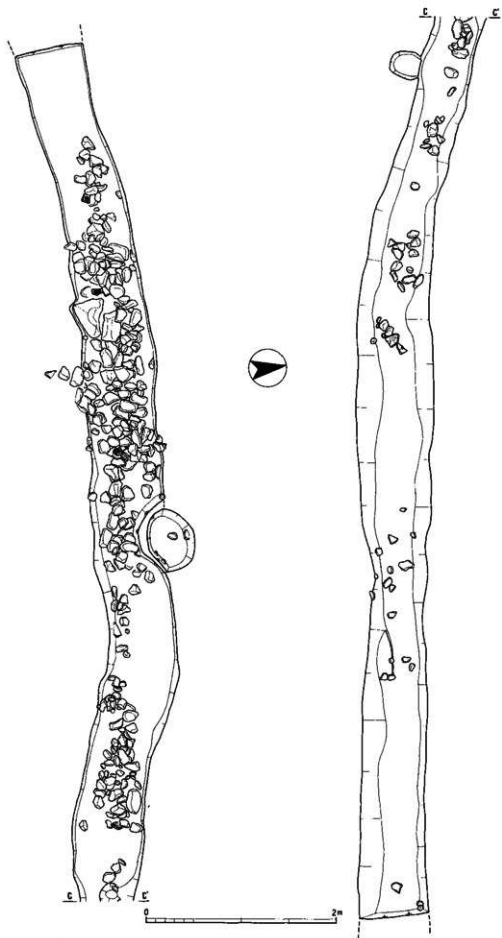
井戸 S E 39 掘形の長径約3.8m・短径約3mの井戸である。壁崩壊の危険があり、検出面から約2.2mの地点で人力による掘削を中止し、最終的には重機で断ち切った。確認した深さは約3.3mである。確認できた底の部分は、下層旧河道の砂礫層まで掘削されている。埋土の状況から、この井戸は廃絶後は一気に埋められたと考えられる。なお断ち切り時に、底部で人頭大の礫を確認しており、石組をもった井戸であった可能性もある。埋土には、奈良時代から中世後期の遺物が含まれている。しかし、この井戸は位置的に下層旧河道の埋土を掘削していることから、奈良時代の遺物は混入品の可能性が高い。埋土から出土した土師器は14世紀代のもので、



第11図 土坑SK33実測図 1:20



第12图 潜SD26实测图 1 : 20



第13图 溝SD50実測図 1 : 20

おそらくこの時期の井戸と考えられる。ただし、まとまった遺物の出土はなく断言は出来ない。

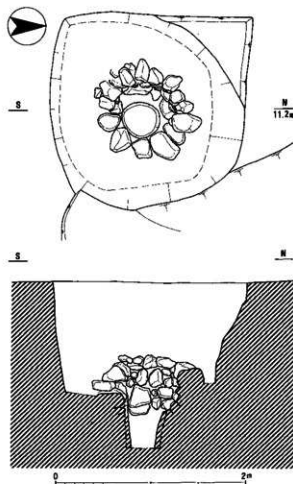
井戸SE99 石組の内径約0.6m、検出面から深さ約1.8mの石組井戸である。石組は、拳大から人頭大の川原石の乱石積を、底から4段分を確認した。おそらく上部の石組は、崩壊したか廃絶時に抜き取られたものと推測される。底には、直径約40cmの木製の井筒が据えられていたらしく、調査時にはその痕跡が確認できた。この井戸も、底部分は下層旧河道の砂層まで掘削されている。出土遺物がほとんどなく断言できないが、14世紀末～15世紀初頭のものであろう。

井戸SE108 石組の内径約1.2m、検出面からの深さ約2.3mの円形の石組井戸である。下層旧河道の砂礫層まで掘り下げたのち、底から4段目までは上面が比較的平坦な大石を、井戸径より30cm程内側にほぼ垂直に組む。5段目から8段目にかけては拳大から人頭大の石を漏斗状に開く形で、さらに上部は同じく人頭大の川原石をほぼ垂直に立ち上がるように組む。掘削段階では、埋土中に人頭大を中心とする礫が多く混入しており、石組はもう少し上まで積まれていたと推定される。底には直径50cm程の木製の井筒が据えられていたらしく、掘削時にはその痕跡を確認している。井戸底からは、14世紀末～15世紀初頭の土師器皿や常滑産と思われる陶器破片が出土している。

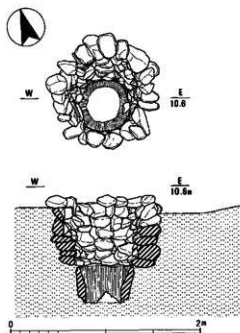
井戸SE128 調査区南端部で検出した、円形の石組井戸で、底部に丸太くり抜きの井筒を持つ。湧水層である青灰色シルト層まで掘り下げた後、上部は斜めに下部は垂直に削ぎ落とした直径約60cmの丸太くり抜きの井筒を据える。井筒の上から7段目までは、人頭大の比較的大きい川原石の乱石積みを確認できた。その上部は、圍場整備前まで使用されていた水路によって破壊されている。出土遺物はごく僅かであるが、14世紀前半の土師器鍋の破片が出土している。

e. ビット群

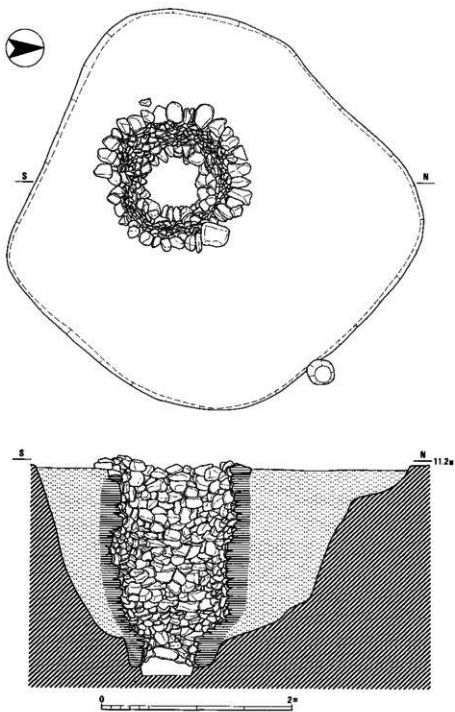
調査区内で多数確認されているビット群は、主に鎌倉時代から室町時代のものが中心で、一部には平安時代のものもある。その多くは、掘立柱建物の柱穴であることは間違いないものと考えられる。しか



第14図 井戸SE99実測図 1:40



第15図 井戸SE128実測図 1:40



第16図 井戸SE108実測図 1 : 40

し、建物としてまとめることはできなかった。

(木野本和之)

(5) 近世の遺構

近世のものとしては、江戸時代に開削された用水路がある。

三郷井 調査区中央部東寄りで検出した遺構である。検出したのは三郷井の屈曲部で、圃場整備事

業以前の図面のルートとも合致する。この溝の両岸には、護岸用の石組が積まれていた。この石組には、川原石の他に五輪塔や石臼等の石製品が転用されており、五輪塔の数は特に多い。埋土には、縄文土器片から現代のプラスチック製品までの幅広い時期の遺物が含まれる。

(木野本和之)

遺構番号	性 格	時 期	地 区	グリット	特 徴 ・ 形 状 など
SR1	旧河道	縄文 ～奈良	A・B		ほぼ調査区全域にわたる。 縄文晩期～奈良時代の遺物を多量に含む。調査区南部で西岸をわずかに確認したのみ、東岸は確認できず。A地区で流れを東に変える。
SK2	土 坑	中 世	B	e27	焼土が多く混じる。
SK3	土 坑	中 世	B	b29	
SK4	土 坑	中 世	B	c29	
SK5	土 坑	中 世	B	e27	SD38を切る。
SK6	土 坑	中 世	B	f27	
SK7	土 坑	中 世	B	f28	
SK8	土 坑	中 世	B	f28	
SD9	溝	中 世	B	e26・27	
SK10	土 坑	中 世	B	e28	SK19を切る。
SZ11	落ち込み状	不 明	B	a27	
SK12	土 坑	中 世	B	c28	
SK13	土 坑	中 世	B	f26	
SD14	溝	中 世	B	f26	
SK15	土 坑	中 世	B	e29	
SK16	土 坑	中 世	B	c29	
SK17	土 坑	中 世	B	d29	
SD18	抹消	—	—	—	
SK19	土 坑	中 世	B	e28	SK10に切られる。
SK20	抹消	—	—	—	
SD21	溝	中 世	B	d28	SD23を切る。
SK22	土 坑	中 世	B	d29	SD23に切られる。人頭大の礫出土。
SD23	溝	中世前期	B	d27～29	SK22・24・32、SD21を切る。
SK24	抹消	—	—	—	
SK25	土 坑	中 世	B	b27	
SD26	溝	中世前期	B	b28～	SD29に切られる。暗渠。
SK27	土 坑	中 世	B	a～b27	
SK28	土 坑	中 世	B	c30	
SD29	溝	中 世	B	c29～	
SK30	抹消	—	—	—	
SD31	溝	中 世	B	e30	
SK32	土 坑	中 世	B	d27	SD23掘削中に検出。
SK33	土 坑	中世前期	B	a25	土師器・山茶碗・青磁碗が出土。
SD34	溝	中 世	B	b27	
SZ35	抹消	—	—	—	
SK36	土 坑	中 世	B	a25	土師器出土。

第1表 遺構一覧表(1)

遺構番号	性 格	時 期	地 区	グリット	特 徴 ・ 形 状 な ど
SD37	溝	中 世	B	c 27	SD26に切られる。
SD38	溝	中 世	B	e 26	SK5に切られる。
SE39	井 戸	中 世	B	b25	埋土に特徴あり。素掘り井戸か。
SZ40	抹 消	—	—	—	
SD41	溝	中 世	B	d27	
SK42	土 坑	中 世	B	d25	
SK43	土 坑	中 世	B	a 24	
SD44	溝	中 世	B	c 23~24	
SD45	溝	中 世	B	c 23~24	
SD46	溝	中 世	B	b 22~d 23	
SD47	溝	中 世	B	b 21~d 23	
SK48	土 坑	中 世	B	c 23	
SK49	土 坑	中 世	B	d 24	
SD50	溝	中 世	B	b 21~d 22	
SK51	土 坑	中 世	B	b 22	
SK52	抹 消	—	—	—	
SK53	土 坑	中 世	B	g~f 26	
SK54	土 坑	中 世	B	d 23	
SR55	田河道	中世前期	B	e~g 22~24	SR 100・三郷井とほぼ重なる。
SD56	溝	中 世	B	d 26~27	
SK57	土 坑	中 世	B	f 28	
SK58	土 坑	中 世	B	d 26	
SK59	土 坑	中 世	B	g 25	
SZ60	抹 消	—	—	—	
SD61	抹 消	—	—	—	
SK62	土 坑	中 世	B	h 28	
SK63	土 坑	中 世	B	g 30	
SK64	土 坑	中 世	B	g 27	
SK65	土 坑	中 世	B	f 30	
SK66	土 坑	中 世	B	g 30	
SK67	土 坑	中 世	B	g 29	
SD68	溝	中 世	B	b 20~c 22	
SK69	抹 消	—	—	—	
SK70	抹 消	—	—	—	
SD71	溝	中 世	B	c 20	
SD72	溝	中 世	B	c 19	
SD73	抹 消	—	—	—	

第2表 遺構一覧表(2)

遺構番号	性 格	時 期	地 区	グリット	特 徴 ・ 形 状 な ど
SK74	土 坑	中 世	B	c 21	
SK75	土 坑	中 世	B	e 21	
SD76	溝	中 世	B	b～d 17～19	
SZ77	抹 消	—	—	—	
SD78	抹 消	—	—	—	
SK79	土 坑	中 世	B	a 18	土師器磁が出土。
SD80	溝	中 世	B	b 18	
SD81	溝	中 世	B	b～c 17～18	
SD82	溝	中 世	B	c～c 15～17	SD85を切る。
SD83	溝	中 世	B	c 17～18	
SD84	抹 消	—	—	—	
SD85	溝	中 世	B	c～e 14～15	SD82に切られる。
SK86	土 坑	中 世	B	b 15	SD88を切る。
SD84	抹 消	—	—	—	
SD88	溝	中 世	B	b 16～17	SK86に切られる。
SD89	溝	中 世	B	c 14	SD90に切られる。
SD90	溝	中 世	B	c 14	SD90を切る。
SK91	土 坑	中 世	B	c 13	
SD92	溝	中 世	B	c～e 9～13	SD84を切る。
SD93	溝	中 世	B	c～e 9～13	
SD94	溝	奈 良	B	g～h 9～17	SZ87に切られる。
SK95	抹 消	—	—	—	
SF96	焼成坑	飛 鳥	B	f～g 14	隅丸方形プラン。焼けは良くない。粘土塊あり。
SK97	土 坑	中 世	B	g 12	
SD98	溝	中 世	B	h 9	
SE99	井 戸	中 世	B	h～i 11	石組み。上部は崩壊。底に曲物の痕跡あり。
SR100	下層流路	古墳～奈良	B	i 13～18	SR55下層。古墳後期～奈良の遺物を大量に含む。
SK101	土 坑	中 世	B	g 11	
SK102	土 坑	中 世	B	d 15	
SK103	土 坑	中 世	B	d 15	
SK104	土 坑	中 世	B	g 12	
SK105	抹 消	—	—	—	
SK106	抹 消	—	—	—	
SK107	抹 消	—	—	—	
SE108	井 戸	中 世	B	f～g 14	石組み。上部は転落した石で埋まる。曲物痕跡あり。
SF109	焼成坑	飛 鳥	B	e 15	焼成面あり。2基切り合う可能性あり。
SK110	土 坑	中 世	B	k 4	隅丸方形。埋土に炭・灰が多く混じる。

第3表 遺構一覧表(3)

遺構番号	性 格	時 期	地 区	グリット	特 徴 ・ 形 状 な ど
SD111	溝	中 世	B	j 3~7	
SD112	溝	中 世	B	e 9~10	
SK113	抹 消	——	——	——	
SK114	抹 消	——	——	——	
SR115	旧河道	飛鳥~奈良	B	j~k 19	SR55ト履。飛鳥~奈良の遺物を多量に含む。
SK116	抹 消	——	——	——	
SK117	抹 消	——	——	——	
SF118	焼成坑	飛 鳥	B	f~g 15~16	SD94, SF 121に切られる。
SF119	焼成坑	飛 鳥	B	f 15~g 15	SD94に切られる。
SF120	焼成坑	飛 鳥	B	g~h 16	三角形プラン。2基切り合う可能性あり。
SF121	焼成坑	飛 鳥	B	g 15	SF118を切る。
SZ122	抹 消	——	——	——	
SZ123	抹 消	——	——	——	
SZ124	抹 消	——	——	——	
SZ125	抹 消	——	——	——	
SD126	溝	中世前期	B	z~c 40	土師器、山茶碗出土。
SK127	土 坑	中 世	B	b36~37	炭・灰混じりの埋土。土坑墓の可能性あり。
SE128	井 戸	中 世	B	a43	石組みの上部は崩壊。底に丸太くり抜きの井戸枠。
SK129	土 坑	弥 生?	B	z41	弥生土器の底部が出土。
SF130	焼成坑	飛 鳥	B	f 15	残り悪い。SF96を切る。隅丸方形プラン。
SF131	焼成坑	飛 鳥	B	g 16	被熱弱い。

第4表 遺構一覧表(4)

3 遺物

出土した遺物は、整理箱に換算して約200箱である。縄文時代から近代までのものがある。その大半は、下層旧河道から出土したものである。上層遺構検出中に出土した中世以前の遺物も、基本的に旧河道埋土の遺物であると思われる。そこで、本書の図版では縄文時代~平安時代の遺物については各時代別に、中世の遺物については各遺構別に提示する。以下、出土遺物の概略を記述する。個々の遺物の詳細は、出土遺物観察表(第5表~第21表)を参照されたい。

(1) 縄文時代の遺物(第17図)

深鉢あるいは甕が出土している。いずれも凸帯文系土器で、ほとんどが、口縁部直下あるいは少し下

がった位置に凸帯を巡らせる。凸帯は、指頭・二枚貝腹縁などで施すもの(1~6)・素文のもの(7~15)に大別できる。さらに、素文のものには凸帯が1条のもの・2条のものに分類できる。体部外面には二枚貝腹縁による条痕を、内面はナデを施す。また、土器製作時の接合部分で割離しているものも見られ、確認できるものは、接合部が内斜している様子が観察できる。これらの特徴から、晩期後半の凸帯文系土器である馬見塚式¹⁾に並行するものであると考えられる。また、16・17のように口縁端部にキザミを施すものもある。

(2) 弥生時代の遺物(第18・19図)

18は鉢あるいは碗である。外面にハケメを施した後、口縁部外面をナデで調整する。19は杯か。内・

外面ともに丁寧なミガキを施す。

20・21は器台。両者とも脚部に透穴をもつ。20は外面をミガキで調整し、21は脚裾部分に凹線文を施す。

22～25は高杯である。22は口縁部が横に張り出し端部外面には凹線文を施し、杯部はミガキで調整する。23～25は口縁部が内側に肥厚し、その上面はナデによる面をもつ。杯部上半には凹線文を施し、下半は縦あるいは横方向のミガキで調整する。

26～45、67～70は壺である。口縁部は広口と長頸の形態に分類できる。口縁部外面は、波状文、櫛状工具による刺突、貝殻腹縁によるキザミ、凹線文、ハケメ調整など多様な施文・調整がなされている。

47～66、71～73は甕。うち、51～66は受口口縁を有する甕（いわゆる「近江甕」）。いずれも口縁部外面に櫛状工具による刺突文を施す。66のように頸部と体部に櫛描横線を施すものもある。口縁端部が外方に屈曲し、いわゆる「S字状口縁台甕」に近い形態をもつ。

71・72は甕の底部。口縁部は甕形の土器になるものと思われる。71は底部に竹管状の工具によって18個の穴、72は底部中央に1個の穴をあけているが、いずれも焼成前穿孔である。

73・74は、いわゆる「叩き甕」。73の底部中央は「蛇の目」状に窪んでいる。また、74の胎土は角閃石を多く含む茶褐色のもので、他の土器との違いが著しい。これは、生駒山西麓から出土する土器の胎土に酷似しており、畿内からの搬入された可能性がある³。

75は手培型土器である。口縁部に羽状のキザミ、その下にはキザミを施す凸帯を巡らせ、下半部にはハケを施す。

76～88は壺・甕の破片である。波状文・横線文・羽状文・半裁竹管を用いた斜格子文・簾状文等の様様な文様を施している。その中でも、異質なものとして88があげられる。この破片は、五重の正方形を彫り込んだ幾何学模様のスタンプが押されている。僅かな間隔でいくつもの正方形を明確に描いていることからスタンプを使用したものと判断したが、他に類例を知らず多くを語れない。

ここで紹介した遺物は、一部を除きおおむね畿内

第IV様式に並行し、弥生時代中期後半～後期前半にかけてのものである。

(3) 古墳時代の遺物（第20図～第32図）

この時期の土器は、下層流路埋土から大量に出土した。以下に概略を述べる。

89～99・101・104・107・161は、広口壺。89・90は口縁垂部外面に棒状浮文、内面には櫛形刺突を施す。90は頸部に突帯をもち、刻目文を施す。92は、パレススタイル壺の口縁部破片で、口縁端部外面および内面に朱彩を施す。94は、上下両面に粘土突帯を貼り付け、断面T字状の口縁端部を形成する。99は、体部上半には櫛描横線文と刺突文を交互に3回施す。101の口縁部は、「逆ハの字」状に直線的に開く。底部は、僅かに窪む。104は、頸部に突帯に刻目文を、体部にハケを施す。107の底部には、製作時に敷いた木の葉の圧痕がこのころ。161は小形の壺。体部に焼成後穿孔がある。

100・102は長頸壺。100は、非常に薄い器壁をもつ。頸部は、体部からほぼ真上に向かって立ち上がった後、緩やかに外反する。102は、前者に比較して頸部はやや短く、口縁部は「逆ハの字」状に緩やかに開くものである。

103・105は、瓢壺。105は体部に2条の貝殻による圧痕がみられる。また、底部には方形の剝離痕が見られ、台付きであったと思われる。

108・116は、口縁端部が内側に肥厚する特徴がみられることから、布留式土器の影響を受けたものであろう。

110～112は二重口縁壺。111の頸部には、荒い刺突をもった突帯が巡らされる。

118～144・149・150・185～202は、いわゆる「S字状口縁台甕」³。また、145～148は「S字状口縁台甕」の口縁部に素地を付加して拡張するもの。186～193・201・202は「S字甕」の最終段階のもの。118は、口縁部に刻目文をもち頸部から体部上半にヨコハケを施す。口縁部の形態は、「S字甕」といふよりは「近江甕」に近いものである。

151～160は小型丸底壺。151・152のように凹み底で口縁部が直線的に伸びるものから、160のように底部が平底で口縁部が短くなった段階のものまで様々なタイプがある。158は、体部下半に焼成後穿孔が

みられる。

162～184は高杯。高杯には、杯部が碗状のもの(165・179・180)、屈曲するもの(162・164・163・166～168)、脚柱部(169～178・183・184)がある。164は、丸みを帯びた杯下部の上に直線的な口縁を作り出す。166～168は、長い口縁部が内湾し、口縁部内面に面をもつ。その脚部は、柱状部がほとんどなく、裾部は内湾する。

203～218は甕。203～208は、球形の体部をもつもの。その他は、長胴形の体部をもつものである。口縁端部の形状は、上面をつまみ上げるタイプのもの、丸くおさめるもの(208・209)がある。これらの中で208はやや異質なもので、内外面とも体部下半をケズリで調整し、外面上半は粗いミガキを施す。

219・220・236～240は、鍋。「く」の字に屈曲する口縁部をもち、ケズリで調整するもの(219・220)、ハケメで調整するもの(236～240)がある。また、把手がつくものと、つかないものの2種類がある。

221は甌。外面をタテハケ、内面をヨコハケで調整する。

222は、手捏ねのミニチュア土器。横瓶を模したものと思われる。223は短頸壺、224は甌である。通常は須恵器にみられる器種であるが、両者とも土器である。225は鉢。内外面共にケズリで調整する。226は土管。内外両面に縦方向のハケメで調整する。

227～233は円筒埴輪の破片。234・235は形象埴輪の脚部。その形状から、馬の脚部に相当すると思われる。

241～282は杯蓋、283～324は杯身。田辺編年TK 208～TK 217並行のものである。246の口縁部外面には、調整最終段階に板状工具を用いたと考えられるナデが認められる。282・313～316のように記号をもつものもある。325・326は、杯蓋に偏平な宝珠つまみがつくタイプ。有蓋高杯の蓋である。325には、246と同様の調整が施される。また、326の天井部裏面には当具痕跡が明瞭に観察できる。

327～333は高杯。長方形の2段透かしを持つもの(327)、脚部にカキメを施すもの(332)などがある。

334は小形直口壺。全体を回転ナデで調整し、頸部に2条の沈線を巡らせる。

335～341は甌。太い頸部のもの(335)、細い頸部

からラッパ状に口縁の開くタイプのものがある。

346～348は短頸壺。346の精緻さに比べると、348は焼成不良で全体的に厚ぼったく粗雑である。350は台付長頸壺。体部最大径部分にキザミを巡らせる。351～356は甕。353・355のような大型品もある。

357は横瓶。完形で出土した。体部はカキメの後格子タタキで調整する。

358～362は提瓶。つまみの形状は、輪状のもの(358)、鉤状のもの(360)、ボタン状のもの(359)がある。

363～375・377～381は鉢。口縁部が若干屈曲し開く369のようなタイプから、口縁部の屈曲のなくなる381のような形態に変化していくものと考えられる。376は須恵器杯蓋を模倣したものと思われる。外面はミガキで調整し、天井部には乳頭状のつまみをつける。

382～386は台付碗。台部は短く、裾は外反するものである。

(4) 飛鳥時代の遺物 (第33図)

下層旧河道から出土のものが大半であるが、古墳時代のもの比べて量は極端に少なくなる。

393の広口壺は、ほぼ完形。頸部から口縁部は外反気味に立ち上がり、口縁部は肥厚する。また、体部上半にはカキメが施される。

397～400の内面には放射状暗文が施される。

401・405は内面の外側に放射状暗文、内側に螺旋状暗文が施される。

406～413は甕。体部が球形のもの(406)、長胴のもの(407～413)がある。口縁部の形態は、「く」の字状のものが主であるが、412のように大きく外反するものもある。

(5) 奈良時代の遺物 (第34図)

下層旧河道のほか、溝等の遺構出土遺物がある。杯蓋には、偏平で径の大きなもの(418)がある。杯身は平坦な底部から器壁がシャープに立ち上がるもの(419)、緩やかな曲線を描いて立ち上がるもの(431)がある。

円面甕(424)は、検出中の出土。細片ではあるが方形の透穴部分が僅かに残る。

436・437の杯底部には、墨書されている。436については「平」と判読できたが、437については欠

損部分があり判読できなかった。

447は調査区壁清掃中に出土した小片。玉縁状口縁の鉢と考えられる。緑色・茶色の釉が施されており、二彩あるいは三彩陶器の可能性があると小片であり断定はできない。

451は土製紡錘車。中心に軸を通す穴を貫通させる。一部を欠くが、ほぼ完形である。

452は軒平瓦の瓦当部分。部分的に剝離し、磨滅も激しいが、偏向唐草文が確認できる。北に隣接する天華寺廃寺⁴のものと思われる。

(6) 平安時代の遺物 (第35図)

下層旧河道埋土・包含層から出土のもので、遺構からの出土はない。

453は須恵器三足甕の脚部。ヘラを用いて獣脚の形を削り出した後、線刻で細部を表現している。

ロクロ土師器は、卓(454・455)、皿(456~458)、小形壺(463)、椀(466)がある。

464・465は黒色土器。465の内面は、暗文風のミガキが施される。

467・468は甕。南伊勢系土師器鍋の祖形となる土器である。強いナデによって口縁端部は肥厚し、丸みを帯びた形状を呈する。

(7) 中世の遺物 (第36図~第38図)

旧河道及び、溝・土坑・井戸等の遺構から出土したのものがある。

S R 55出土遺物

469~472は土師器皿。469・470は外面をオサエ、内面をナデで調整し、471・472は内外面をナデで調整する。

473は尾張型第7型式の山茶碗⁵。直線的に伸びる器壁をもち、口縁端部には面をもつ。退化した高台には、切痕が観察できる。

474・475は土師器鍋。口縁部は、上部にヨコナデが施され、断面形は三角形を呈する。南伊勢系土師器鍋第2段階⁶のものである。

これらの遺物は、おおむね13世紀後葉から14世紀前葉にかけてのものである。

S D 93出土遺物

477は土師器皿。口縁部はやや肥厚し、底部をオサエで調整する。

478・479は尾張型第7型式の山皿。478の口縁部

はやや肥厚し丸く収めるのに対し、479は口縁端部に面をもつ。

480は尾張型第7型式の山茶碗。ゆるやかに外反する口縁端部をまるく収めるものである。

これらの遺物は、おおむね13世紀後葉のものである。

S E 128出土遺物

この遺構からは、481の土師器鍋片1点が出土しただけである。口縁部上端へのヨコナデが一段と進むタイプで、南伊勢系土師器鍋第3段階⁷のもので、14世紀中葉から15世紀前半のものである。

S D 126出土遺物

482は土師器皿。内湾する口縁部の端部をつまみ上げる。内面をナデ、外面をオサエで調整する。15世紀後葉のものである。

その他に、14世紀代の土師器皿、13世紀代の瀝美型の山茶碗底部(484)があるが、混入品であろう。

S K 2 出土遺物

小型の土師器鍋(485)が出土している。口縁部の形態から、南伊勢系土師器鍋第3段階⁸に相当するもので、14世紀末から15世紀初頭ののものである。

S K 79出土遺物

486は土師器鍋。南伊勢系土師器鍋第3段階⁹に相当する。口縁部等の特徴から、14世紀中葉のものと思われる。

S D 29出土遺物

土師器皿(482・483)が出土している。いずれも、器高が低く扁平なものである。内面をナデ、外面をオサエで調整する。14世紀後葉のものである。

S K 33出土遺物

土師器皿(489~491)は口径11cm前後のもので、内面をナデ、外面をオサエで調整する。

492は尾張型第8型式の山茶碗。高台は完全に無くなるタイプである。

この他にも、青磁・陶器等の破片も若干出土している。これらは、14世紀末のものである。

S D 81出土遺物

この遺構からは、まとまった量の土師器皿が出土している。扁平な小皿形のもの(493~497)、口径が7cm前後のもの(508・509)、口径が11cmのもの(498~507)がある。小皿形は全体をナデで調整するが、

歪みが目立つ。その他は、内外面をナデ、底部をオサエで調整する。14世紀末から15世紀中葉のものである。

SE108出土遺物

底から出土した土師器皿2点(510・511)がある。口径11cm前後のもので、内外面をナデ、底部をオサエで調整する。14世紀末から15世紀前葉のものである。

SD26出土遺物

513は土師器皿。口径は約7.5cm。器壁は薄く、口縁部は内湾する。

515は古瀬戸後期の陶器平碗⁸。ロクロ形成で、底部は高台を削り出す。外面上半および内面を施釉する。

516・517は土師器羽釜。大きく内湾する口縁端部が外側に向かって折り返され、姥口の口縁部を作り出す。体部には粗いハケメが施される。

これらは、おおむね15世紀代の遺物である。

この他にも、混入品と思われる遺物を2点紹介する。512は土師器皿。これまで報告してきた本遺跡出土の土師器皿は、いずれも南伊勢系のものであったが、これは主に中北勢で流通・使用されたものである。器高は低く、器壁はやや厚目。外面オサエ、内面ナデで調整する。口縁端部内面には、ナデによる平坦面が形成される。514は尾張型第7形式の山茶碗。

SD68出土遺物

518は土師器鍋。口縁部折り返しの幅が狭まり、断面形が鋭利な三角形を呈するものである。南伊勢系土師器鍋第4段階に相当し、16世紀前後のものである。

Pit出土遺物

中北勢で多く見られる12世紀後葉の土師器皿(519・520)、13世紀中葉の土師器皿(522)、15世紀代の土師器皿(521)等がある。

三郷井出土遺物

近世に開削され、圃場整備直前まで機能していた用水路であり、幅広い時期の遺物が出土した。

524は平安時代の緑釉陶器碗。内面底近くに2条の沈線を巡らせ、内外面に緑釉を施す。

525は尾張型第7形式の山茶碗。底部外面には、「いやくま」と墨書されているが、現在のところ意味は不明である。

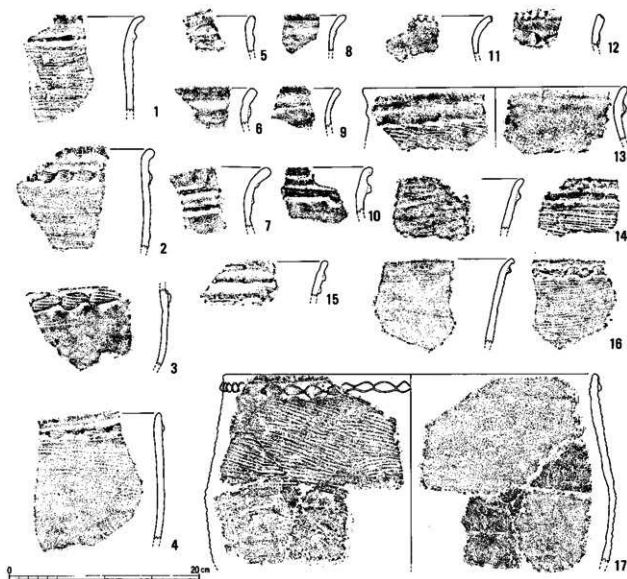
526は、奈良時代の瓦を転用した加工円盤。瓦片の間縁部を打ち欠き、円形に加工する。片面にはワッフル状の格子叩き目、もう片面には布目が残る。

527は、14世紀後葉の常滑産の甕。口縁部の断面形は「N」字状を呈する。また、体部上半には篋記号が刻まれる。

538～544は、三郷井の護岸石垣として転用されていた五輪塔類。空・風・火・水・地輪を一体で造り出す「一石五輪塔」(538～540、542・543)のほか、水・地輪(541)、空・風・火輪(544)、空・風輪(545)のパーツを一体で造り出すもの、単独パーツのもの(548～544)など、様々なバリエーションがある。また、547は宝篋印塔の笠部分である。上部には相輪を差し込む穴が穿たれている。ほとんどが隣接する一志町産の井関石製であるが、554のように花崗岩製のものもある。

石製品・鉄製品(第39図)

小型磨製石斧(555)は弥生時代、紡錘車(556)・双孔円盤(557)は古墳時代の遺物。558は雁又式鉄鎌。ピットから出土。(木野本和之)



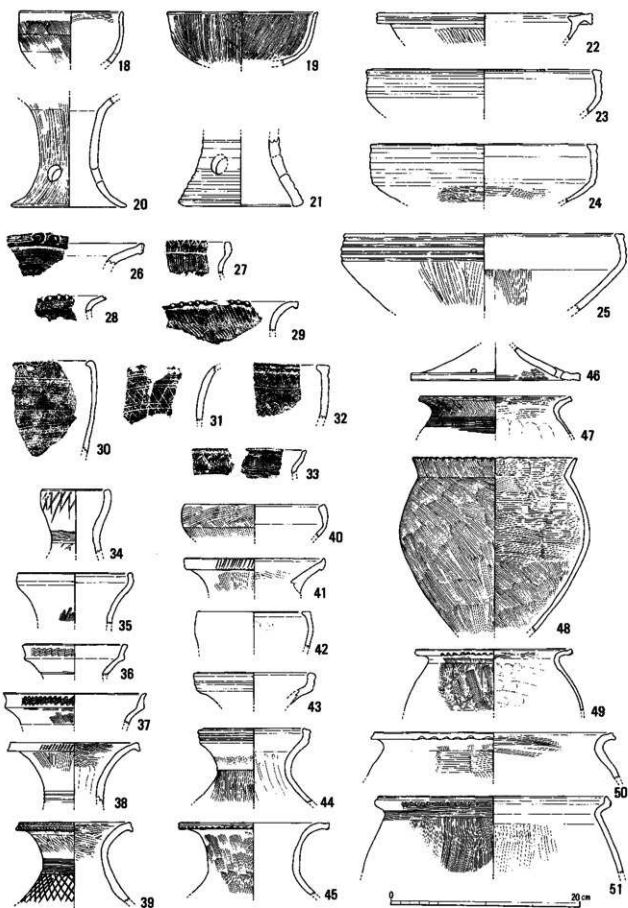
第17図 出土遺物実測図(1) 1 : 4

(註)

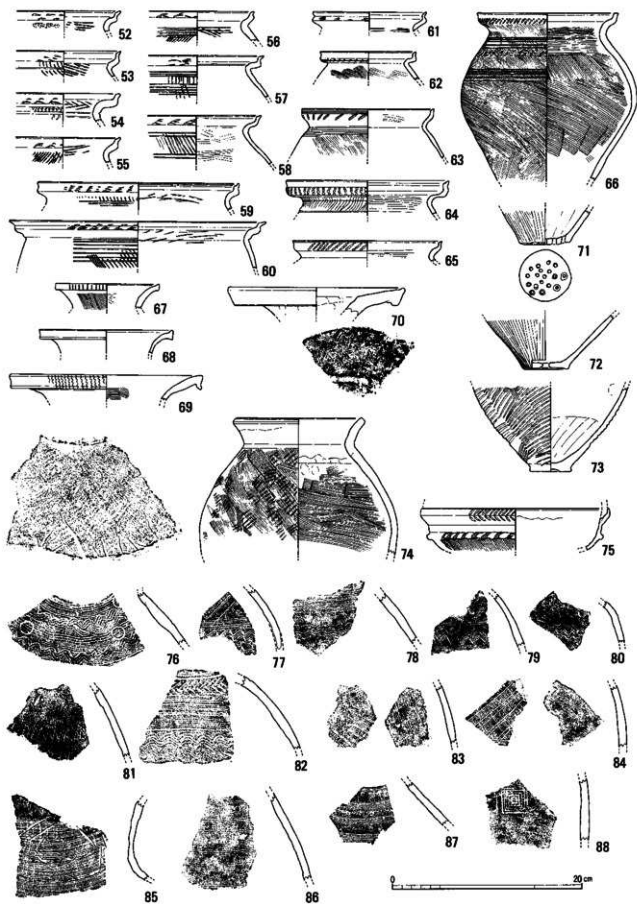
- 1 馬見塚式については、鈴木克彦「伊勢湾沿岸地方における凸帯文深鉢の様相—伊勢地方からの視点—」(『三重県史研究』第6号 1990)を参照した。
- 2 伊藤裕偉氏のご教示による。
- 3 「S字壺」については、赤塚次郎「濃尾平野低地部における古墳時代の壺」、原田幹「S字壺の分布と地域型」、早野浩二「S字壺0類をめぐって」(『鍋と壺のデザイン』第4回東海考古学フォーラム 1996)などを参照した。
- 4 田辺昭三『須恵器大成』(角川書店 1981)
- 5 山田猛「天花寺庵寺」(『昭和55年度泉宮園場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教

育委員会 1981) ほか。

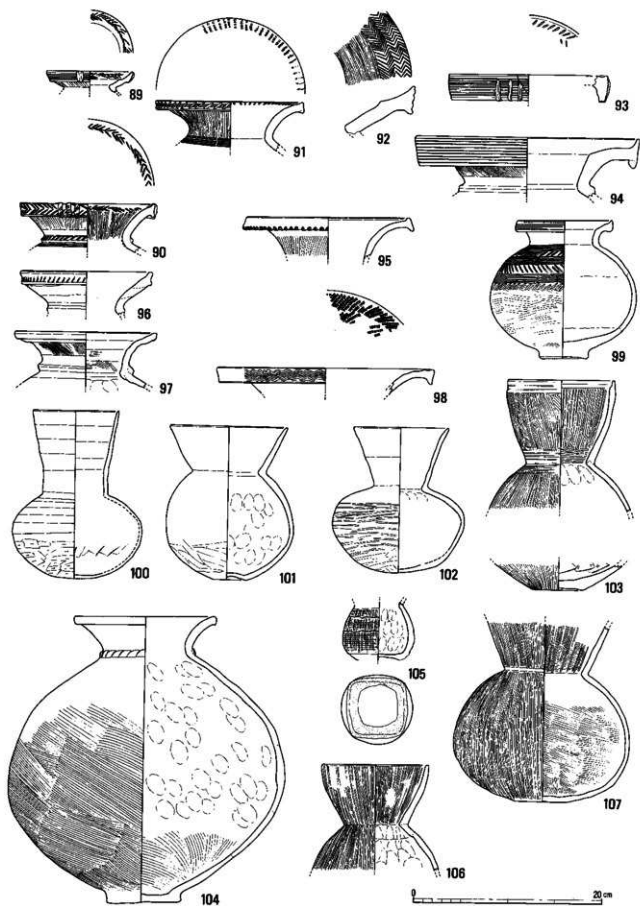
- 6 山茶碗については、藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」(『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994)を参照した。
- 7 南伊勢系の鍋については、伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」(『Miehistory』Vol.1 1990)、同「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」(『鍋と壺のデザイン』第4回東海考古学フォーラム 1996)などを参照した。
- 8 古瀬戸製品については、藤澤良祐「中世瀬戸窯の動態」(『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界—その生産と流通—』資料集(瀬戸市埋蔵文化財センター 1996)を参照した。



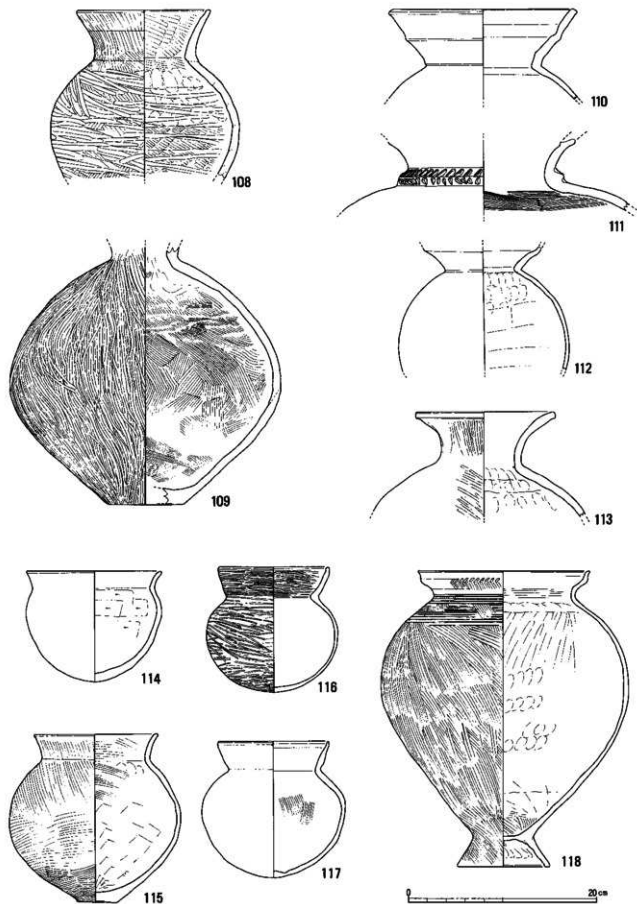
第18图 出土遗物实测图(2) 1:4



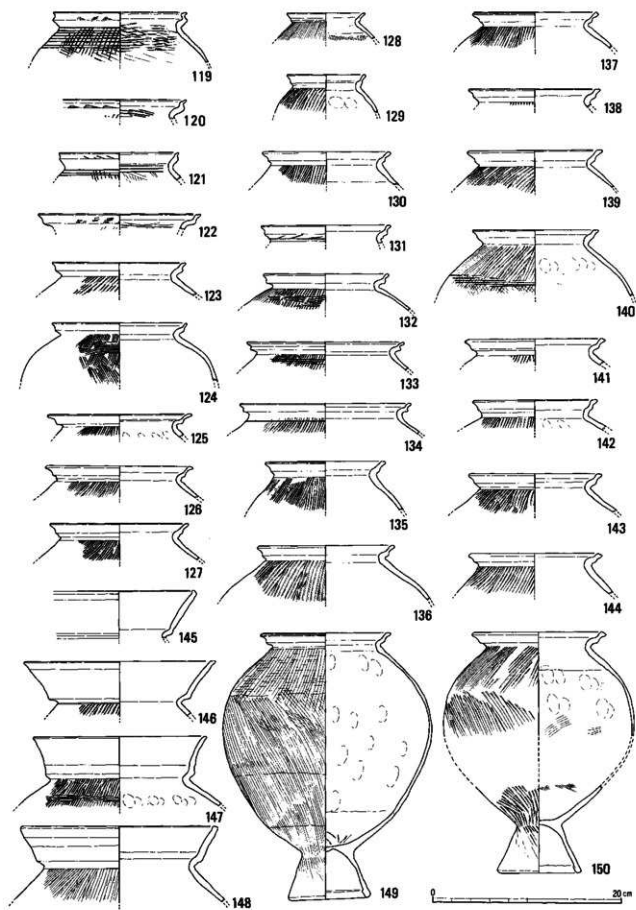
第19图 出土物实测图(3) 1 : 4



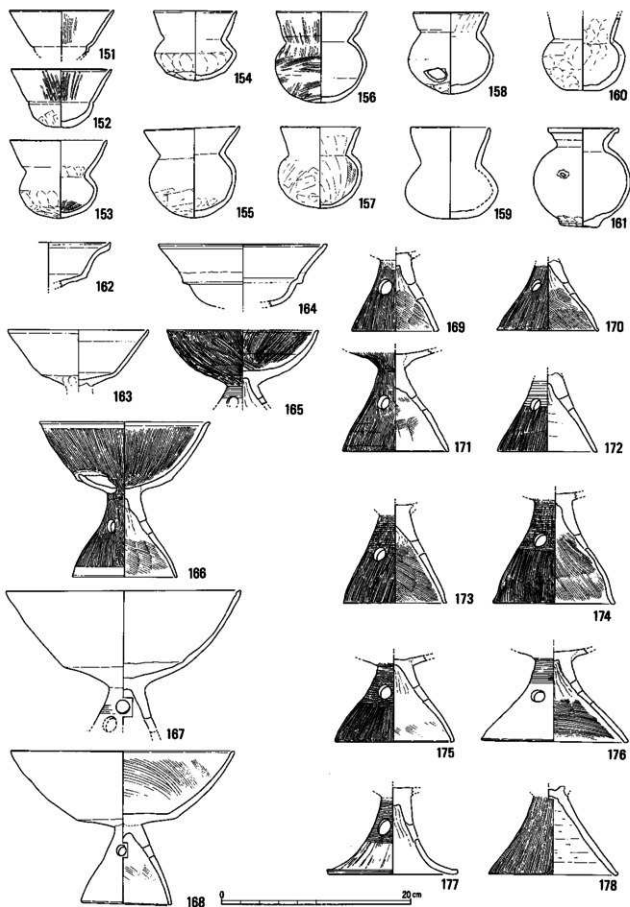
第20圖 出土遺物実測圖(4) 1 : 4



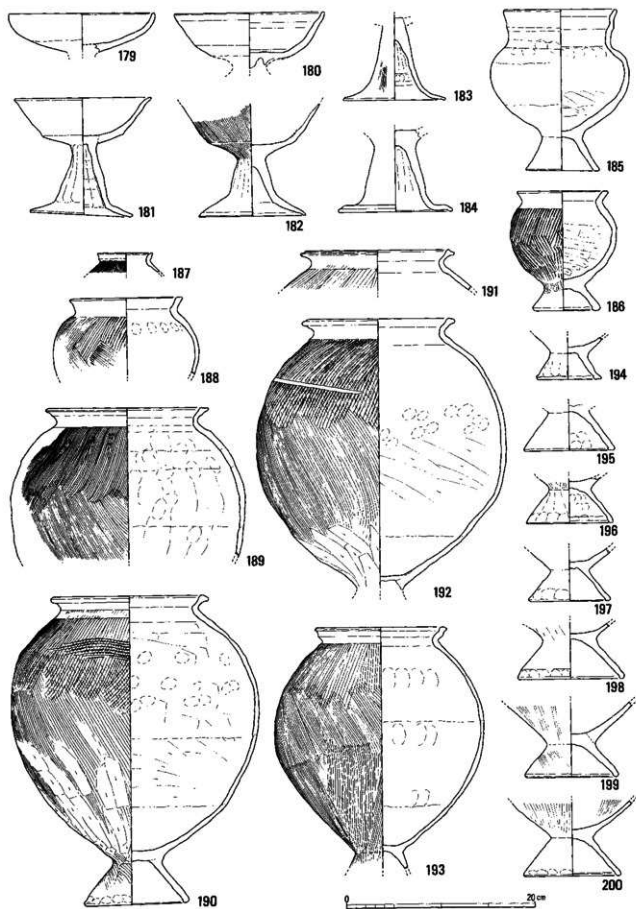
第21图 出土文物实测图(5) 1 : 4



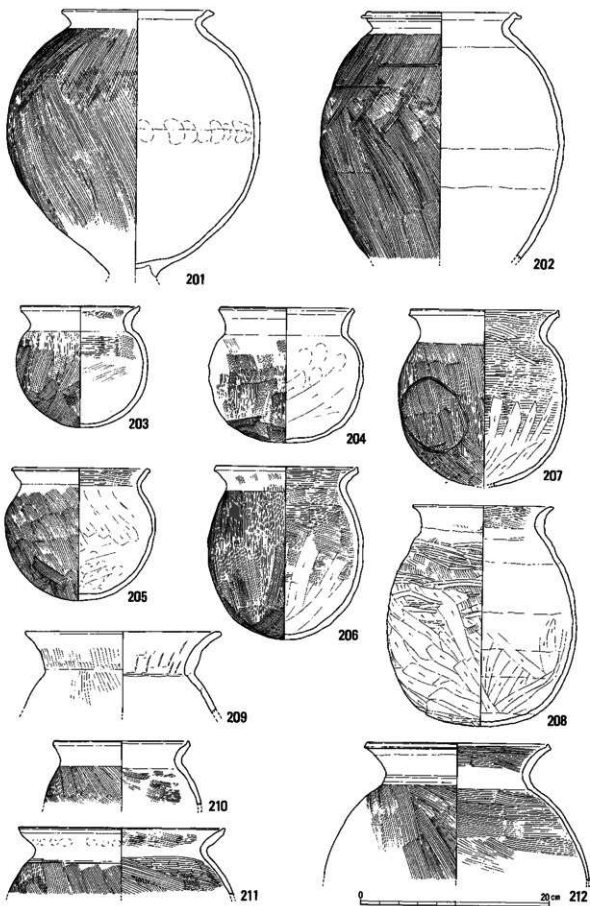
第22图 出土物实测图(6) 1 : 4



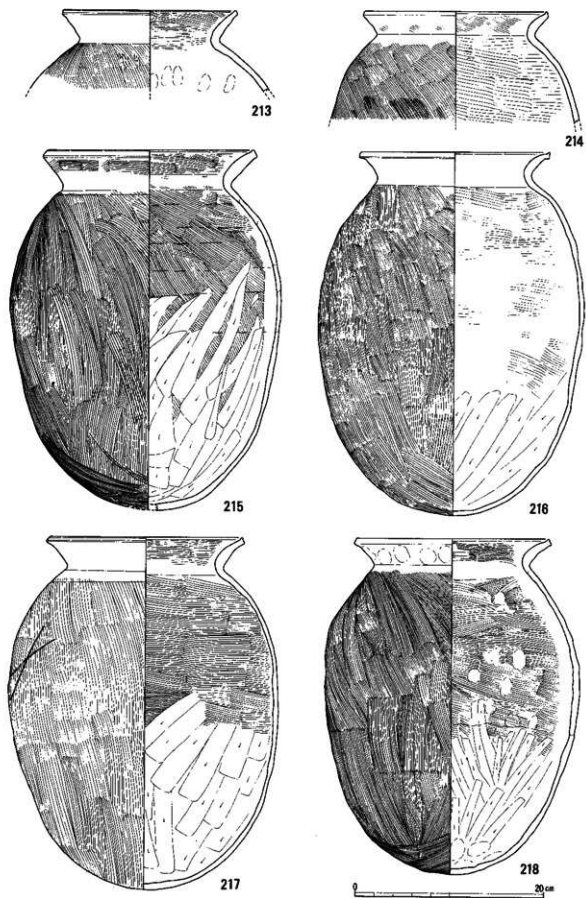
第23图 出土物实测图(?) 1 : 4



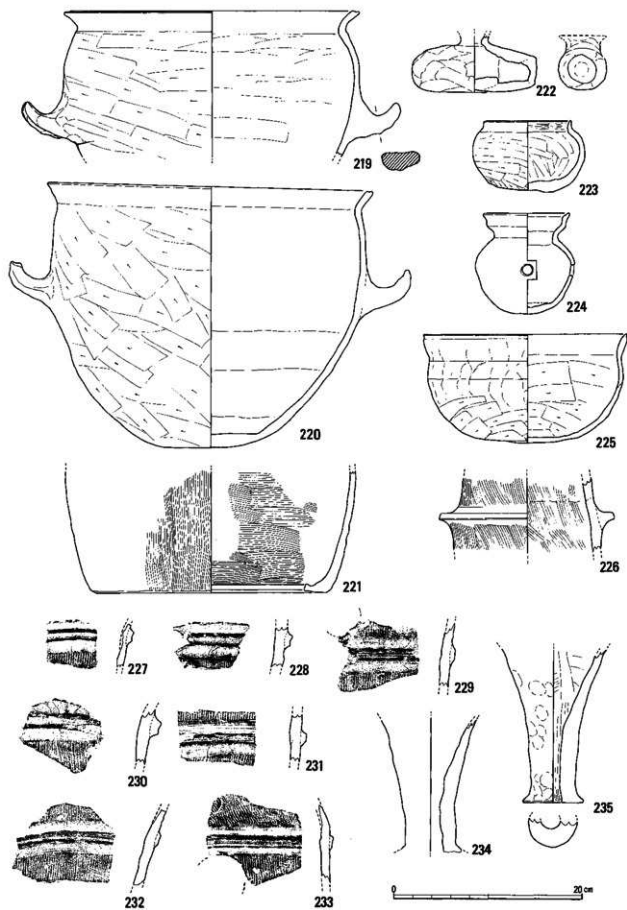
第24图 出土遗物实测图(8) 1:4



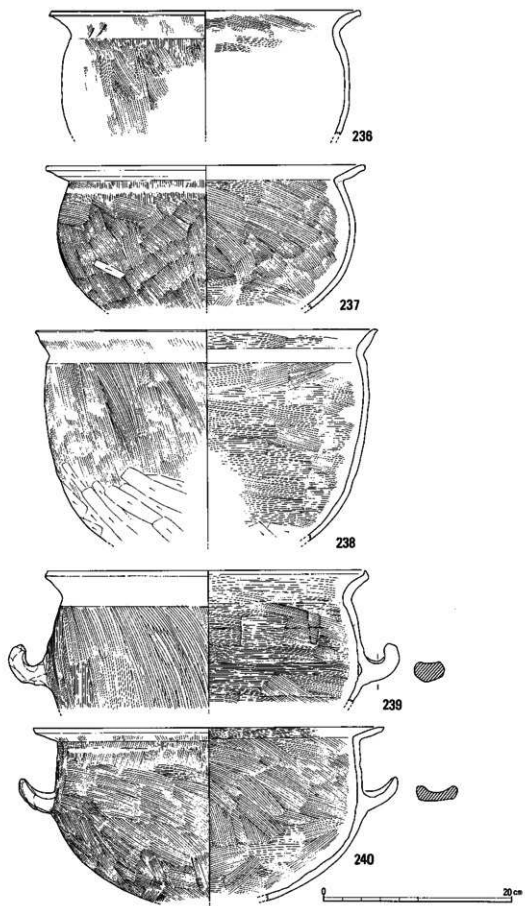
第25图 出土遺物実測図(6) 1 : 4



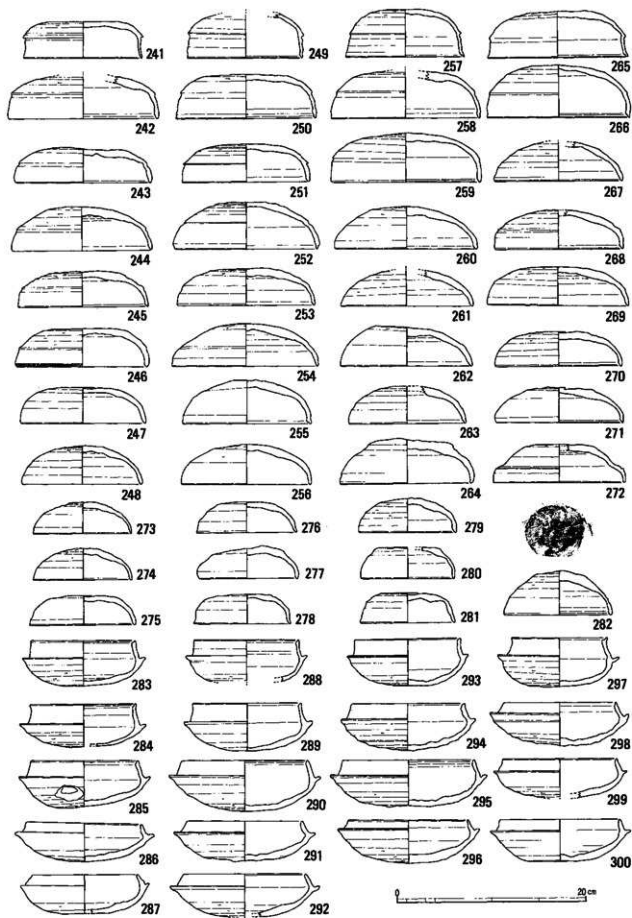
第26图 出土遺物実測図09 1 : 4



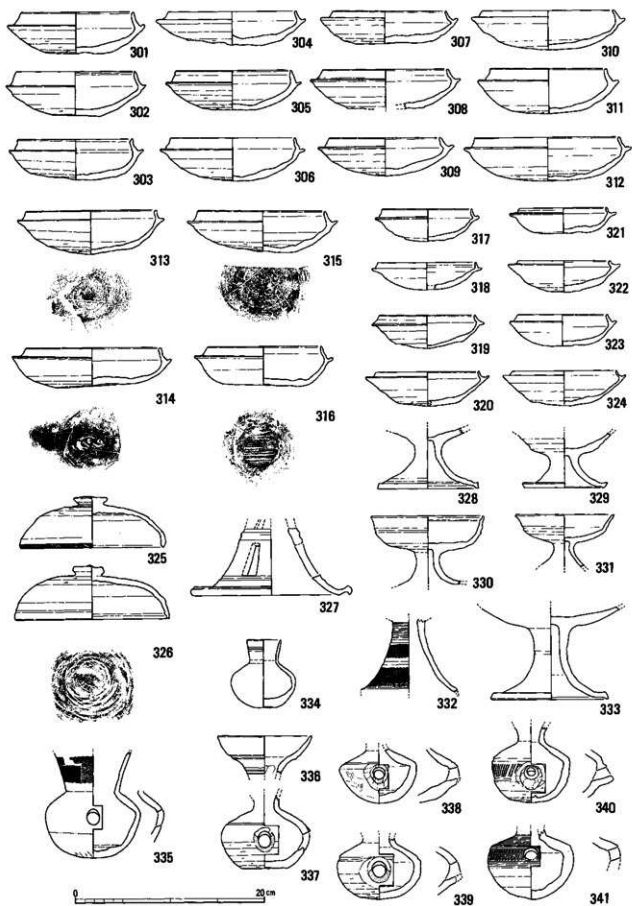
第27图 出土物实例图① 1 : 4



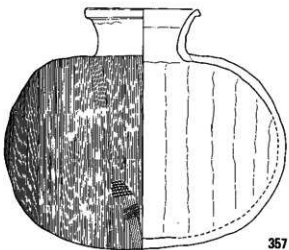
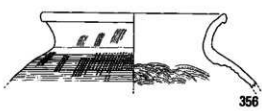
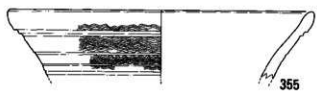
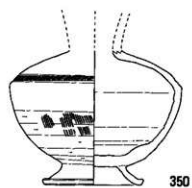
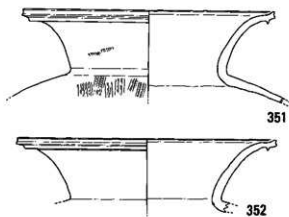
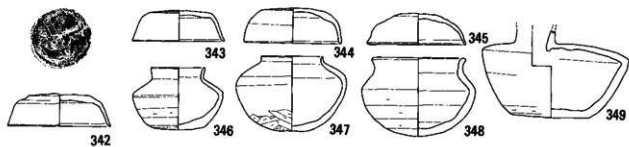
第28图 出土文物实测图04 1 : 4



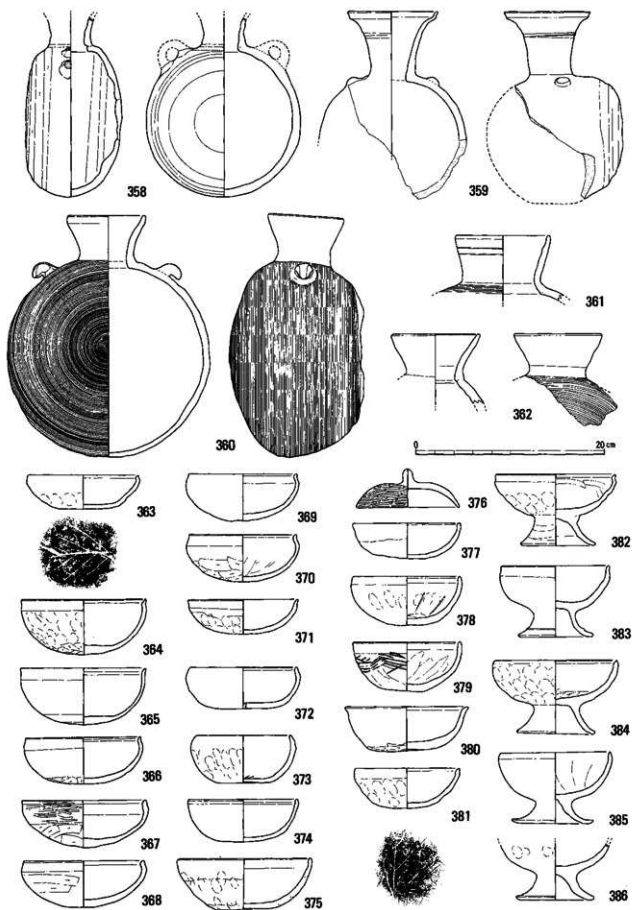
第29图 出土遗物实测图 1 : 4



第30图 出土文物实例图④ 1 : 4



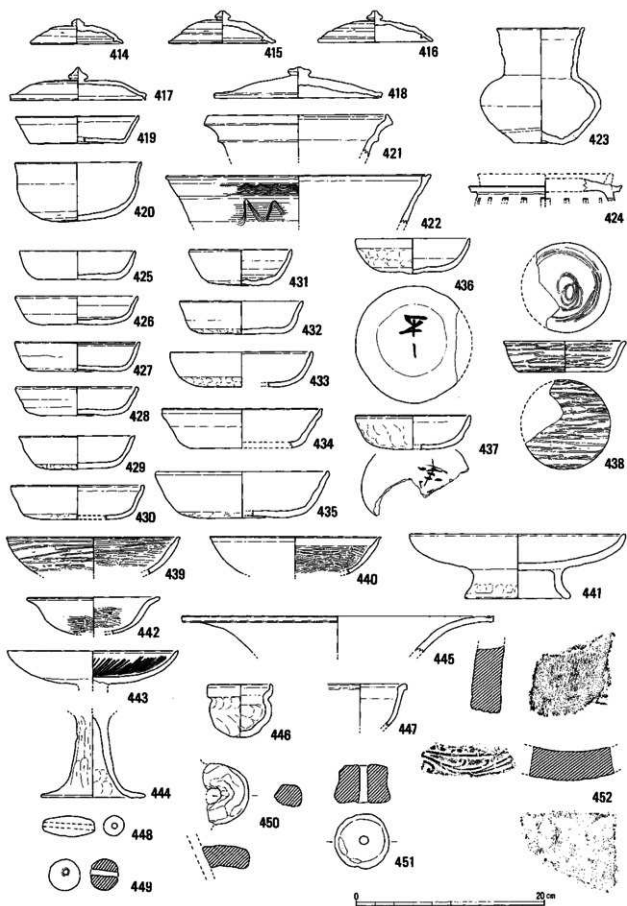
第31图 出土物实测图09 1 : 4



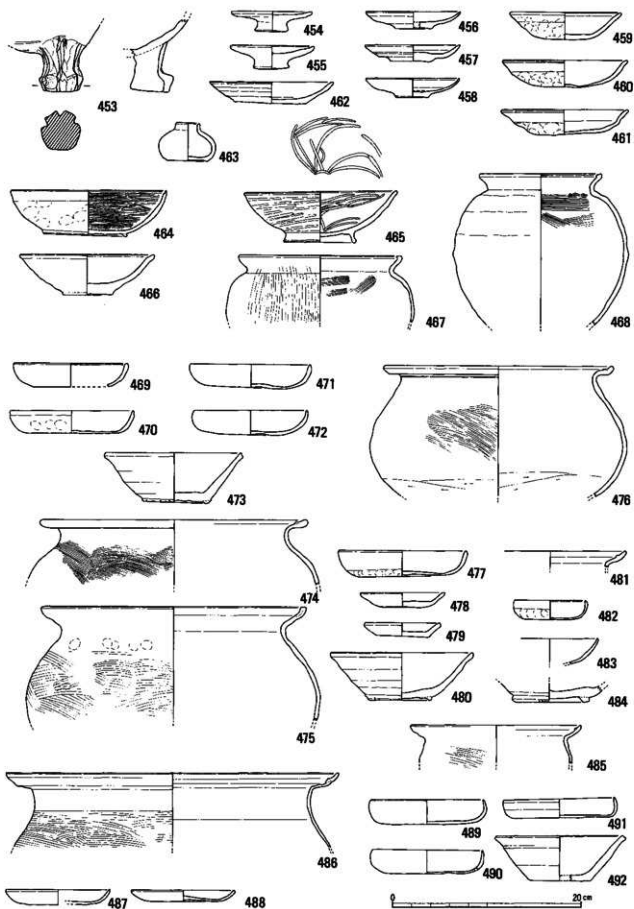
第32图 出土遺物実測図⑨ 1:4



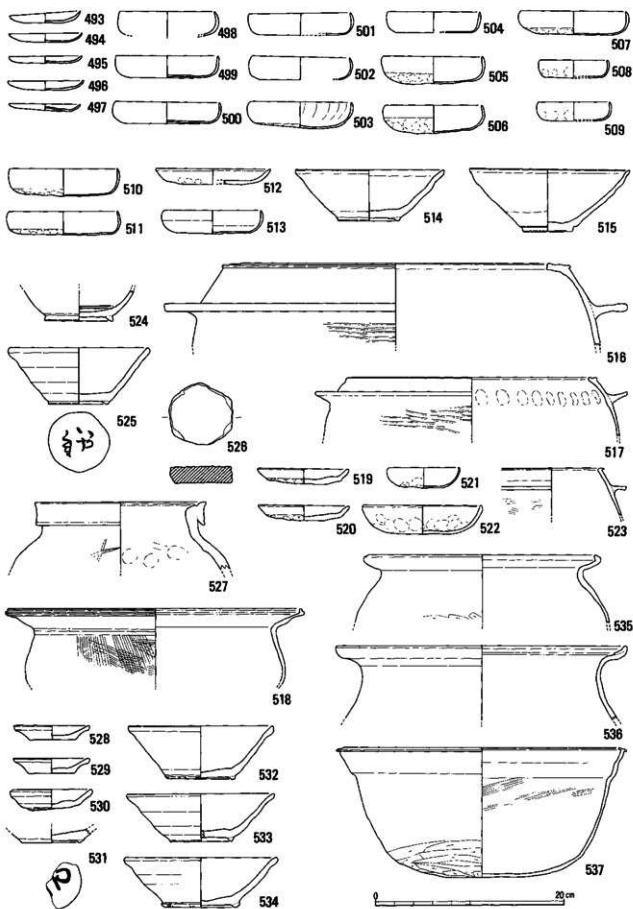
第33图 出土物实测图(7) 1:4



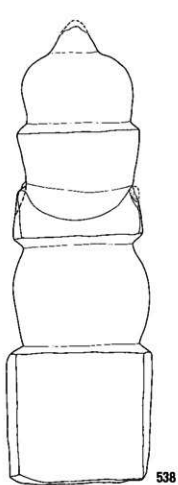
第34图 出土遺物実測図⑩ 1 : 4



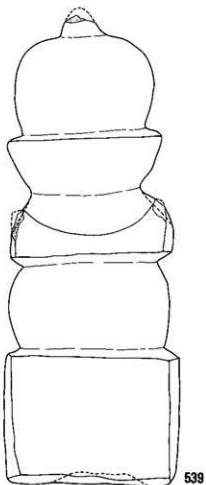
第35図 出土遺物実測図(9) 1 : 4



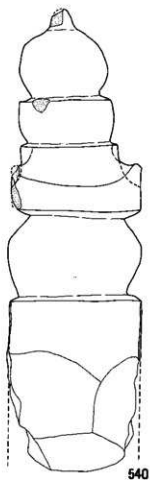
第36圖 出土遺物実測図 1 : 4



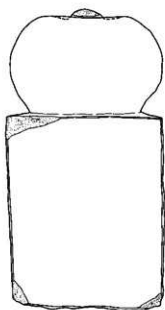
538



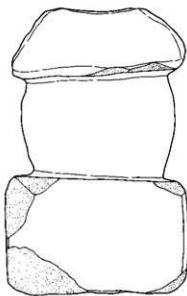
539



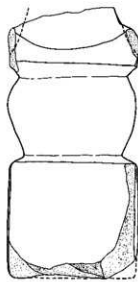
540



541



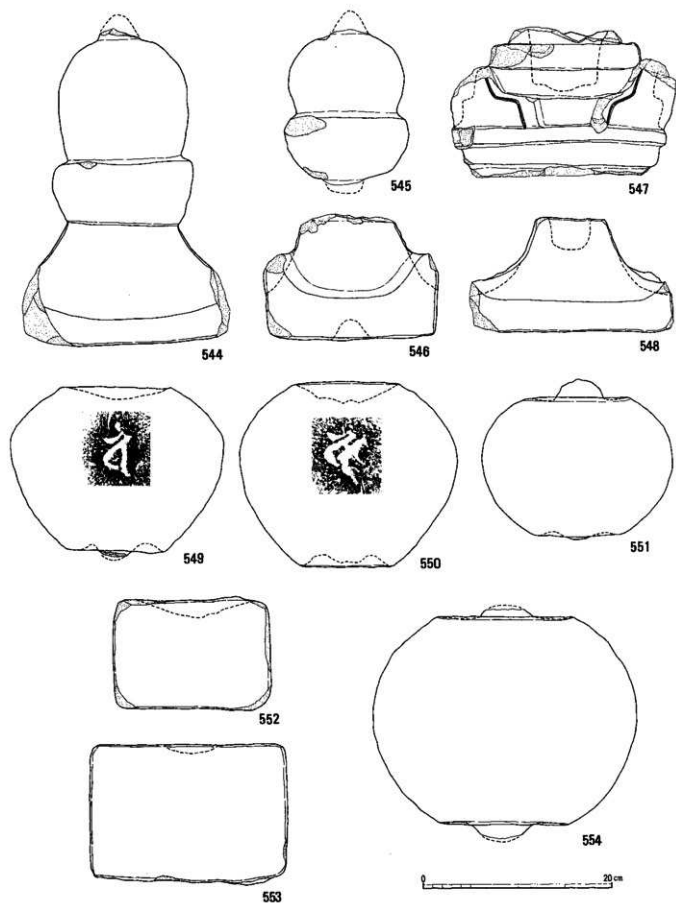
542



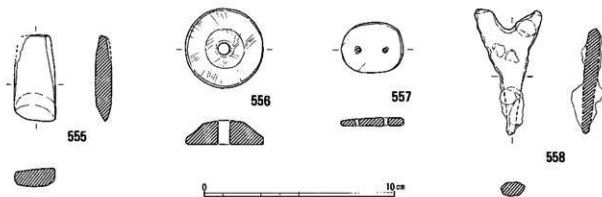
543



第37图 出土遺物実測図(0) 1 : 4



第38图 出土遺物実測図(2) 1:4



第39回 出土遺物実測図(特) 1 : 2

No.	実測No.	器種	遺構名	取り上げ時の名称	計測値 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	151-01	縄文土器 深鉢	SR01	T.R	径不明	外:ナデ, 凸部貼付け→条痕 内:ナデ	粗	並	灰白 橙	小片	縄文晩期 馬見塚式並行
2	151-03	縄文土器 深鉢	SR01	旧渡路	径不明	外:ナデ, 凸部貼付け→条痕 内:ナデ	粗	並	にぶい黄褐	小片	縄文晩期 馬見塚式並行
3	152-01	縄文土器 深鉢	検出		径不明	外:ナデ, 凸部 内:オサエ	粗	並	にぶい褐	小片	縄文晩期 馬見塚式並行
4	151-02	縄文土器 深鉢	SR01	旧渡路	径不明	外:ナデ, 凸部貼付け→条痕 内:ナデ	やや粗	並	灰黄 橙	小片	縄文晩期 馬見塚式並行
5	152-08	縄文土器 深鉢	Bc26 p112		径不明	外:ナデ, 凸部 内:ナデ	粗	並	黄灰	小片	
6	045-04	縄文土器 深鉢	e18 p115		口縁	ヨコナデ→素文突帯	粗	並	浅黄橙	細片	
7	152-07	縄文土器 深鉢	Bc19 p111		径不明	外:ナデ, 凸部 内:ナデ	やや粗	並	灰褐 にぶい褐	小片	縄文晩期 馬見塚式並行
8	045-05	縄文土器 深鉢	裏土 彫削		口縁	ナデ→素文突帯	粗	並	にぶい褐	細片	
9	045-07	縄文土器 深鉢	検出		口縁	ナデ→素文突帯	粗	並	にぶい黄褐 にぶい橙	細片	
10	045-06	縄文土器 深鉢	検出		口縁	ナデ→素文突帯	粗	並	にぶい黄褐	細片	
11	152-03	縄文土器 深鉢	検出		径不明	外:口縁端部に刺突, 条痕	やや粗	並	灰黄褐 灰黄	小片	
12	151-05	縄文土器 深鉢	試掘 No.8		径不明	外:ナデ, 凸部 内:条痕	粗	並	橙	小片	
13	151-04	縄文土器 深鉢	SR55		径:28.0 径不確定	外:ナデ, 凸部貼付け→条痕 内:ナデ	粗	並	にぶい橙	小片	縄文晩期 馬見塚式並行
14	029-04	縄文土器 深鉢	SF 120		口縁	ナデ→貼付突帯→条痕	粗	並	にぶい黄 灰白	口縁部破片	
15	152-02	縄文土器 深鉢	SR01	旧渡路	径不明	外:ナデ, 2重に凸部 内:ナデ	やや粗	並	浅黄 灰	小片	縄文晩期 馬見塚式並行
16	030-01	縄文土器 深鉢	SR01	東西 TR	口縁	ナデ→貼付突帯→条痕	粗	並	橙	口縁部破片	
17	011-02	縄文土器 深鉢	SD29		口:39.0	ナデ・条痕・素文突帯	粗	並	にぶい橙 にぶい褐	口:1/18	
18	131-07	弥生土器 高杯	SR01	旧渡路	口:10.8	外:ヨコナデ, ハケメ 内:ヨコナデ, ハケメ, ナデ	やや密	並	灰白 明黄橙	口:1/7	
19	131-05	弥生土器 高杯	SR01	旧渡路	口:15.8	外:ヨコナデ→ハケメ後ミガキ 内:ヨコナデ→ミガキ	やや密	並	浅黄橙 灰白	口:1/8	
20	134-05	弥生土器 高杯	SR01	旧渡路	底:12.0	外:ミガキ, 3方に透かし穴 内:ヨコナデ, ナデ	やや密	並	浅黄橙	底:僅かに残る	
21	153-07	弥生土器 高杯	SR01	旧渡路	底:13.2	外:凹線文, 透かし穴 内:ナデ	粗	並	灰黄	口:1/6	
22	132-04	弥生土器 高杯	SR01	旧渡路	口:22.4	外:口縁端部外面に凹線文。ヨコナデ, ミガキ 内:ヨコナデ	密	並	にぶい褐 にぶい橙	口:1/10	
23	153-02	弥生土器 高杯	SR01	サブ T.R	口:25.1	外:ヨコナデ, 凹線文 内:キザミ, ヨコナデ	やや粗	並	灰白	口:1/8	
24	153-01	弥生土器 高杯	SR01	旧渡路	口:24.1	外:ヨコナデ, 凹線文, ミガキ 内:ヨコナデ, ハケメ	やや粗	並	灰白	口:1/6	
25	132-01	弥生土器 高杯	SR01	旧渡路	口:29.4	外:ヨコナデ→ミガキ→凹線文 内:ヨコナデ→ハケメ	粗	並	橙 浅黄橙	口:1/13	

第5表 出土遺物観察表(1)

No.	実測No	器 種	遺構名	取り上げ時の名称	計測値 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
26	133-07	弥生土器	SR01	旧流路	小片	外:口縁端部外面に横線文施文後内形添文貼付。横線文、波状文内:ヨコナデ、ミガキ	やや密	並	灰白にふい橙	小片	
27	155-04	弥生土器	SR01	旧流路	径不明	外:ナデ、斜格子、沈線、ハケメ内:ナデ、ハケメ	やや密	並	にふい黄橙	小片	
28	155-05	弥生土器	SR01	旧流路	径不明	外:ナデ、刺突、ハケメ内:ナデ、ハケメ	やや粗	並	にふい黄橙	小片	
29	155-01	弥生土器	SR01	旧流路	径不明	外:ナデ、刺突、ハケメ内:ハケメ	やや粗	並	にふい橙	小片	
30	133-02	弥生土器	SR01	旧流路	小片	外:ヨコナデ、波状文、櫛描横線文内:ヨコナデ	やや粗	並	浅黄橙灰白	小片	
31	128-06	弥生土器	SR01	南北TR	小片	外:格子文 内:不明	やや密	並	灰白	小片	
32	155-03	弥生土器	SR01	旧流路	径不明	外:ナデ、波状文、櫛描横線文内:ナデ	やや密	並	淡橙	小片	
33	155-07	弥生土器	検出		径不明	外:ナデ、刺突、ハケメ内:ハケメ	やや密	並	灰白	小片	
34	153-05	弥生土器壺	SR01	旧流路	口:7.2	外:へらによる斜格子文、ナデ、横線文、沈線 内:ナデ	やや密	並	灰白	口:1/5	
35	131-03	弥生土器広口蓋	SR01	旧流路	口:12.0	外:ヨコナデ、ハケメ内:ヨコナデ、調整不明瞭	やや密	並	にふい橙にふい黄橙	口:1/8	
36	127-06	弥生土器壺	SR01	旧流路	口:11.0	外:ヨコナデ、波状文、沈線内:ヨコナデ	やや密	並	灰地灰白	小片	
37	153-04	弥生土器壺	SR01	旧流路	口:15.0	外:波状文、ハケメ内:ハケメ、ナデ	やや粗	並	灰白	口:1/7	
38	127-05	弥生土器壺	SR01	旧流路	口:14.0	外:口縁部壺下面に刺突、ハケメ、横線内:波状文、ハケメ、シボリ目	やや密	並	灰白	口:2/3	
39	135-01	弥生土器壺	検出		口:11.6	外:口縁端部外面に印線後刺突、ヨコナデ→ハケメ→櫛描横線→へら描斜格子内:オサエナデ→ハケメ	密	並	浅黄橙	口:3/4	
40	128-02	弥生土器壺	SR01	旧流路	口:15.0	外:ハケメ 内:ナデ	やや密	並	にふい橙	口:1/5	
41	127-04	弥生土器壺	TR		口:15.0	外:口縁端部外面に櫛状工具による刺突、キザミ、ハケメ内:ヨコナデ、ハケメ	やや密	並	浅黄橙	口:1/6	
42	128-07	弥生土器鉢小	SR01	旧流路	小片	外:ヨコナデ、横線文内:ハケメ	やや密	並	灰黄	小片	
43	153-03	弥生土器壺	SR 100		口:13.0	外:ヨコナデ、西線文、ナデ内:ヨコナデ	やや粗	並	灰白	口:1/7	
44	127-02	弥生土器壺	SR01	旧流路	口:12.0	外:ヨコナデ、印線文、ハケメ内:ヨコナデ、シボリ	やや粗	並	灰白	口:完存	
45	127-01	弥生土器壺	SR01	旧流路	口:16.0	外:口縁端部下面キザミ、ハケメ内:ヨコナデ、ナデ	やや密	並	浅黄橙灰白	口:1/4	
46	103-02	弥生土器壺	SR01	旧流路	口:17.8	外:ナデ 内:ハケメ 透かし穴2方にあけ	やや粗	並	橙地灰	口:1/7	
47	131-04	弥生土器壺	SR01	旧流路	口:16.0	外:ヨコナデ、キザミ、タテハケ横線内:ヨコナデ、ハケ、ナデ後軽いオサエ	密	並	にふい黄橙	口:1/5	
48	159-02	弥生土器壺	SR01		口:17.5	外:口縁端部に刺突、ハケメ内:ハケメ	やや密	並	明黄灰にふい橙	口:1/2	外面に煤が付着。
49	116-03	弥生土器壺	麻土		口:17.0	外:口縁端部下部に刺突、ハケメ内:ハケ後ヨコナデ、オサエ後ナデ	やや密	並	灰白浅黄橙	口:1/8	
50	105-01	弥生土器壺	SR01	旧流路	口:25.2	外:ヨコナデ、ハケメ内:ヨコナデ、ナデ、ハケメ	やや密	並	灰白	口:1/9	
51	102-04	弥生土器壺	SR01	旧流路	口:24.0	ヨコナデ→口縁端部外面に刺突、ハケメ 内:ハケメ	やや密	並	灰白	口:1/7	
52	139-02	弥生土器壺	SR 100		径不明	外:ヨコナデ、ナデ→刺突内:ヨコナデ、ハケ	やや粗	並	浅黄橙	小片	受口状口縁
53	136-02	弥生土器壺	SR 100		小片	外:ヨコナデ、刺突、ハケメ内:ヨコナデ、ハケメ	やや粗	並	灰白	小片	受口状口縁 外面に煤が付着
54	139-01	弥生土器壺	SR01	旧流路	径不明	外:ヨコナデ、ナデ→刺突、沈線内:ヨコナデ、ハケ	やや粗	並	灰白	小片	受口状口縁
55	139-03	弥生土器壺	SR 100		径不明	外:ヨコナデ、ハケ→刺突内:ヨコナデ、ハケ	粗	並	にふい黄橙	小片	受口状口縁
56	139-08	弥生土器壺	SR01	東西TR	径不明	外:ヨコナデ→ハケ→刺突→横線内:ヨコナデ、ハケ	やや粗	並	橙	小片	受口状口縁
57	139-05	弥生土器壺	検出		径不明	外:ヨコナデ→ハケ→横線内:ヨコナデ、ナデ、沈線	やや密	並	灰	小片	受口状口縁
58	139-06	弥生土器壺	SR 100		径不明	外:ヨコナデ→ハケ→刺突→横線内:ヨコナデ、ハケ	やや粗	並	灰白	小片	

第6表 出土遺物観察表(2)

No.	実測No.	器種	遺構名	取り上げ時の名称	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
59	136-08	弥生土器	SR01	旧流路	口:21.0	外:ヨコナデ、朝突、ハケメ 内:ヨコナデ、ハケメ	やや粗	並	灰白	口:1/7	受口状口縁
60	137-03	弥生土器	検出		口:27.0	外:ヨコナデ、朝突、ハケ 内:ヨコナデ、ハケ、ナデ	やや粗	並	にぶい黄褐色	口:1/12	受口状口縁
61	140-03	弥生土器	SR01	旧流路	口:12.0	外:ヨコナデ、朝突 内:ヨコナデ、ハケ	やや粗	並	灰白	口:1/7	受口状口縁
62	153-06	弥生土器	SR01	旧流路	口:10.2	外:ヨコナデ、キザミ、ナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ハケメ	やや粗	並	橙	口:1/4	
63	104-04	弥生土器	SR01	旧流路	口:13.8	外:ヨコナデ、ハケメ、朝突 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	灰白	口:1/8	受口状口縁
64	131-06	弥生土器	SR01	旧流路	口:17.0	外:ヨコナデ、朝突、ハケメ 内:ヨコナデ、ハケ、オサエ	粗	並	淡黄灰白	口:1/5	受口状口縁
65	131-01	弥生土器	SR01	旧流路	口:15.6	外:ヨコナデ、キザミ、ナデ、ハケ 内:ヨコナデ、ハケ	やや粗	並	灰白	口:1/8	受口状口縁
66	122-02	弥生土器	SR01	旧流路	口:14.8 体:18.7	外:ヨコナデ、朝突、細描横線、ハケメ 内:ヨコナデ、ハケメ、ナデ	粗	並	浅黄褐色 灰白	口:完存 体:1/2	受口状口縁
67	127-03	弥生土器	SR01	旧流路	口:11.0	外:口縁部外面に彫刻工具による朝突、ハケメ 内:ヨコナデ、ハケメ	やや粗	並	橙	口:1/6	
68	131-02	弥生土器	SR01	旧流路	口:13.9	ヨコナデ、ナデ	粗	並	にぶい橙 浅黄褐色	口:1/6	
69	132-02	弥生土器	SR01	旧流路	口:20.2	外:口縁部下面に貝殻履線によるキザミ、頸部ハケ 内:ヨコナデ、ハケメ	やや粗	並	明褐色	口:1/10	
70	132-03	弥生土器	SR01	旧流路	口:17.3	外:ヨコナデ、ハケメ 内:波状文、ナデ	粗	並	橙 赤	口:1/16	
71	128-03	弥生土器	SR01	南北TR	底:5.5	外:ハケメ 内:工具ナデ	やや粗	並	橙 灰白	底:完存	底部に焼成前穿孔18個あり。
72	134-03	弥生土器	SR01	旧流路	底:4.6	外:ハケメ 内:ナデアゲ	粗	並	浅黄褐色	底:完存	受口状口縁 外面に煤付着 底部に焼成前穿孔あり。
73	174-03	弥生土器	SR01	東西TR	底:4.2	ナデアタキ	やや粗	良	橙 褐色	底:1/3	内面に炭化物
74	011-01	弥生土器	SD61		口:13.1	ハケメ、タタキ、ヨコナデ	粗	並	にぶい橙	口:9/16	
75	130-05	弥生土器	検出		口:20.0	外:羽状キザミ、ヨコナデ、キザミ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	橙 にぶい橙	残:1/15	
76	129-01	弥生土器	SR01	旧流路	小片	外:直線文、波状文、竹管文 内:オサエ、ナデ	やや粗	並	浅黄褐色 灰白	小片	
77	155-08	弥生土器	SR01	旧流路	径不明	外:半截竹管状工具による斜格子文、横線文、波状文 内:ハケメ	やや粗	並	浅黄褐色 灰	小片	
78	129-05	弥生土器	検出		小片	外:波状文、波状文 内:オサエ、ナデ	やや粗	並	浅黄褐色	小片	
79	154-04	弥生土器	SR100		径不明	外:波状文、細描横線文 内:ナデ	やや粗	並	橙	小片	
80	154-06	弥生土器	SR01	旧流路	径不明	外:ナデ、波状文 内:ハケメ	やや粗	並	にぶい橙 黒褐色	小片	
81	129-04	弥生土器	SR01	旧流路	小片	外:横線、波状文 内:刺彫	やや粗	並	浅黄褐色 橙	小片	
82	135-02	弥生土器	SR55		小片	外:細描横線、回線、羽状文、波状文 内:横方向ナデ	やや粗	並	浅黄褐色 橙褐色	小片	
83	133-06	弥生土器	SR01	旧流路	小片	外:横線文、波状文、半截竹管状工具による斜格子文 内:ハケメ	やや粗	並	灰白	小片	
84	128-05	弥生土器	SR01	旧流路	小片	外:格子文、細描横線 内:ハケメ	やや粗	並	明褐色 黒	小片	
85	154-01	弥生土器	SR01	旧流路	径不明	外:ナデ、ハケメ、波状文 内:刺彫により調整不明	やや粗	並	浅黄褐色	小片	
86	129-02	弥生土器	SR01	旧流路	小片	外:横線 内:ハケメか	やや粗	並	黄灰	小片	
87	154-05	弥生土器	SR01	旧流路	径不明	外:ナデ、横線文 内:刺彫のため調整不明	やや粗	並	浅黄褐色	小片	
88	129-03	弥生土器	SR01	南北TR	小片	外:ナデ、スタンプ 内:オサエ、ナデ	やや粗	並	淡黄	小片	表面に幾何学状スタンプあり。
89	105-03	土師器	SR01	旧流路	口:9.0	口縁部垂下部の外面に沈線一掃状浮文、内面に輪状刺突	やや粗	並	橙	口:1/4	ミニチュアのバレンスか。

第7表 出土遺物観察表(3)

No.	実測No.	器種	遺構名	取り上げ時の名称	計測値(cm)	観察・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
90	104-01	土師器 広口壺	SR100		口:14.0	口縁端部外面に刺突・棒状浮文、頸部にハケメ、口縁端部内面に刺突・ミガキ	やや粗	並	浅黄橙	口:1/4	
91	109-03	土師器 広口壺	SR01	TR	口:15.3	口縁端部外面にキザミ、頸部に横線文、口縁部内面に刺突	やや粗	並	にぶい黄褐	口:2/3	
92	168-02	土師器 広口壺	SR01	表土層削り	口縁	口縁端部外面に縦回線4条→朱彩 口縁上面に横杉状文→朱彩	密	良	淡黄橙	破片	
93	105-02	土師器 広口壺	SR01	サブTR	口:16.6	口縁端部垂下部の外面に成線→棒状浮文、内面に横杉状刺突	やや粗	並	橙	口:1/8	
94	077-03	土師器 広口壺	試掘取付NO3		口:23.6	口縁端部上下に粘土帯貼付け後ナデー→8〜9本の成線、頸部下に凸帯貼付け後縦方向のハケメ	密	並	灰白 浅黄橙	口:1/10	
95	102-02	土師器 広口壺	SR01	旧流路	口:17.0	口縁端下部キザミ、ナデー→ハケメ 口縁部内面は朱彩	やや粗	並	浅黄橙	口:1/3	
96	104-02	土師器 広口壺	SR01	サブTR	口:13.4	口縁端部外面に刺突、ナデー	やや粗	並	にぶい橙	口:1/6	
97	077-02	土師器 広口壺	試掘No1		口:14.8	ナデー頸部に凸帯貼付け→ハケ	密	並	淡黄・橙	口:1/3	内面に炭化物が付着
98	104-03	土師器 広口壺	SR01	旧流路	口:22.6	口縁端部垂下部に波状文、口縁部内面に刺突	やや粗	並	浅黄橙	口:1/8	
99	032-03	土師器 広口壺	SR01	旧流路	口:10.2 高:12.7	口縁部外面に細横線文、体部上半に細横線文・刺突文を交互に3回施文、体部下半にハケメ	粗	並	浅黄橙	口:1/4 体:完存	
100	122-01	土師器 長頸壺	SR01	旧流路	口:9.0 高:5.8 体:6.8 底:17.8	外:ヨコナデ後ミガキ、ケズリ 内:ヨコナデ後ミガキ、板ナデ、ナデ、工具痕有り。	やや密	並	淡黄	口:1/5 高:2/5 体:完存	頸部から体部にかけて黒斑。
101	031-03	土師器 広口壺	SR01	旧流路	口:12.5 高:16.3	オサエ・ナデーヨコナデ	やや密	並	浅黄橙	口:1/2 体:完存	
102	092-02	土師器 長頸壺	SR01	旧流路	口:10.0 高:15.3	ヨコナデーミガキ ケズリ→ミガキ	やや粗	並	橙	口:1/3 体:ほぼ完存	
103	168-03	土師器 短頸壺	SR01	表土層削り	口:11.2 底:5.2	ナデー→ヘラミガキ	密	良	橙 浅黄橙	体部を欠く	
104	046-01	土師器 広口壺	SR01	旧流路	口:14.7 高:30.8	ナデー・オサエ→ハケメ 頸部に貼付変型→キザミ目	粗	並	浅黄橙	口:2/3 体:完存	
105	114-03	土師器 付付壺	SR01	旧流路	体:7.6	外:ナデ、ミガキ・カキメ→貝殻圧痕 内:ナデ・オサエ	やや密	並	橙	体:完存	小形の彫造に方形の台が付くものと思われる。
106	036-02	土師器 壺	SR01	旧流路	口:10.8	オサエ・ナデー→ミガキ	やや粗	並	にぶい橙	口:2/3	一部黒斑有り
107	126-01	土師器 広口壺	SR01		口:19.4	外:ミガキ 内:ハケメ後ミガキ、ナデ、ハケメ	やや粗	並	灰黄	体:1/2	底部に木葉痕あり。
108	123-01	土師器 壺	SR01		口:13.9 体:20.0	外:ヨコナデ、ハケメ、ミガキ 内:ヨコナデ、ハケメ、オサエ、薺いミガキ	やや粗	並	橙	口:4/5 体:3/4	口縁端部は内側に肥厚、布留罫の影響を受ける
109	078-01	土師器 二重口縁壺	SR01	旧流路	体:28.8 底:7.7	外:ハケメミガキ 内:ハケメ横方向の薺いミガキ	密	並	灰・灰白	体:1/2	
110	108-01	土師器 二重口縁壺	検出		口:20.0	外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	灰白	口:1/4	華感強い。
111	165-01	土師器 二重口縁壺	SR01	旧流路	高:18.2	外:ナデ、内帯貼付け後刺突 内:ナデ、ハケメ	やや粗	並	にぶい橙	頸部ほぼ完存	
112	093-02	土師器 二重口縁壺	SR01	旧流路	体:18.1	外:ナデーミガキか 内:ナデ、オサエ・ナデ、工具ナデ	やや密	並	灰白 浅黄橙	体:1/2	口縁部は、疑口縁部分で欠損。
113	010-02	土師器 壺	SD61		口:14.5	ナデー・オサエ→ミガキ	粗	並	橙・暗灰黄	口:3/8	
114	117-01	土師器 丸蓋壺	SR01	南部落込	口:14.0	外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ、ケズリ、ナデ	やや粗	並	灰白	口:1/2	
115	119-03	土師器 壺	検出		口:12.9 高:17.8 底:4.2	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、工具ナデ	やや粗	並	灰白	口:7/8 底:完存	
116	031-02	土師器 壺	SR01	旧流路	口:11.8 高:13.3	ナデー→ケズリ→ミガキ	やや粗	並	橙 にぶい黄橙	口:3/4	
117	120-01	土師器 丸蓋壺	SR01	旧流路	口:11.6 高:13.4	外:ヨコナデ、ナデ、剥離強い 内:ナデ、ハケメ	やや粗	並	灰白 浅黄橙	ほぼ完存	
118	178-01	土師器 付付壺	SR01	旧流路	口:18.3 高:31.3	オサエ・ハケメ→ヨコナデー→口縁にキザミ目	粗	良	淡茶灰	口:1/5 高:4/5	
119	140-02	弥生土 器壺	SR01	旧流路	口:14.0	外:ヨコナデ、ハケ、刺突、横線 内:ヨコナデ、ハケ	やや粗	並	淡黄	口:1/5	受口状口縁

第8表 出土土物観察表(4)

No.	実測No.	器種	遺構名	取り上げ時の名称	計測値(cm)	顕微・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
120	136-07	土師器 台付甕	SR01	旧流路	径不明	外:ヨコナデ、刺突、ハケ 内:ヨコナデ、ハケ	やや粗	並	灰白	小片	A類
121	136-01	土師器 台付甕	SR01	旧流路	口:15.2 径不確定	外:ヨコナデ、刺突、ハケメ 内:ヨコナデ、ハケメ	粗	並	橙灰白	小片	A類
122	136-03	土師器 台付甕	SR01	旧流路	口:17.0 径不確定	外:ヨコナデ、刺突、ハケメ 内:ヨコナデ、ハケ	やや粗	並	灰褐色	小片	A類
123	137-05	土師器 台付甕	SR01	旧流路	口:14.0	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	にぶい黄褐色	口:1/3	C類
124	140-05	土師器 台付甕	SR01	下層TR	口:14.0	外:ヨコナデ、ハケ 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	淡黄	口:1/3	
125	136-06	土師器 台付甕	SR01	旧流路	口:15.0 径不確定	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、オサエ	やや粗	並	淡黄褐色	小片	C類
126	141-05	土師器 台付甕	SR100	旧流路	口:15.0	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	にぶい黄褐色	口:1/3	
127	141-07	土師器 台付甕	SR01	旧流路	口:14.5	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	淡黄白	口:1/3	
128	029-01	土師器 台付甕	SR01	南北TR	口:8.2	ナデーハケメ	やや粗	並	灰白	口:1/7	ミニチュア土器
129	138-03	土師器 台付甕	検出		口:8.0	外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ、オサエ	やや粗	並	橙	口:1/5	C類
130	140-07	土師器 台付甕	SR01	サブTR	口:13.3	外:ヨコナデ、ハケ 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	にぶい黄褐色 灰白	口:1/5	
131	136-05	土師器 台付甕	SR01	サブTR	口:13.5	外:ヨコナデ、刺突、沈線 内:ヨコナデ	やや粗	並	淡黄	口:1/6	C類
132	141-03	土師器 台付甕	SR01	旧流路	口:12.9	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	灰白	口:僅か	
133	140-06	土師器 台付甕	SR01	旧流路	口:16.5	外:ヨコナデ、ハケ 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	灰白	口:1/11	
134	137-02	土師器 台付甕	SR01	旧流路	口:18.0	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	灰白	口:1/5	C類
135	138-01	土師器 台付甕	SR01	旧流路	口:12.0	外:オコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	灰白	口:1/5	D類
136	140-01	土師器 台付甕	SR01	旧流路	口:14.0	外:ヨコナデ、ハケ 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	にぶい黄褐色	口:1/3	
137	137-04	土師器 台付甕	SR01	旧流路	口:13.0	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	淡黄褐色	口:1/6	D類
138	139-09	土師器 台付甕	SR01	旧流路	口:13.0	外:ヨコナデ、ハケ 内:ヨコナデ	やや粗	並	灰白	口:1/6	
139	138-04	土師器 台付甕	SR01	旧流路	口:13.5	外:オコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	淡黄	口:3/7	D類
140	110-02	土師器 台付甕	SR01	旧流路	口:13.0	外:ヨコナデーハケメ 内:ヨコナデ、ケズリ	やや粗	並	灰白	口:4/5	
141	137-01	土師器 台付甕	SR01		口:14.0	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	灰黄	口:1/4	D類
142	136-04	土師器 台付甕	検出		口:13.0	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、オサエ	やや粗	並	灰白	小片	D類
143	141-01	土師器 台付甕	SR01	旧流路	口:13.5	外:ヨコナデーハケ、沈線 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	にぶい橙	口:1/5	
144	140-04	土師器 台付甕	SR01	サブTR	口:13.5	外:ヨコナデ、ハケ 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	淡黄灰	口:1/6	
145	142-05	土師器 台付甕	SR01	旧流路	径不明	ヨコナデ	やや粗	並	淡黄	小片	山陰系口縁
146	142-04	土師器 台付甕	SR01	旧流路	口:19.5	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	淡黄	口:1/6	山陰系口縁
147	142-03	土師器 台付甕	SR01	旧流路	口:17.9	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、オサエ	やや粗	並	淡黄	口:僅か	山陰系口縁
148	142-02	土師器 台付甕	SR01	旧流路	口:20.1	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ	やや粗	並	淡黄褐色	口:1/4	山陰系口縁
149	157-01	土師器 台付甕	SR01	下層TR	口:13.1 高:28.3 径:8.0	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ・オサエ、ナデ	やや中	並	にぶい橙	ほぼ完存 体一部欠	D類
150	110-01	土師器 小形丸底甕	SR01	旧流路	口:15.0 高:25.5 径:8.0	外:ヨコナデーハケメ 内:ヨコナデ、オサエ・ハケメ	粗	並	橙、褐灰 褐色、にぶい橙	口:1/4 台:2/3	
151	083-03	土師器 小形丸底甕	SR01	旧流路	口:11.0	外:摩擦のため調整不明 内:ミガキ	密	並	にぶい橙	口:1/5	
152	114-02	土師器 小形丸底甕	SR01	旧流路	口:10.6 高:6.2	外:ミガキ、ナデ、ケズリ 内:ミガキ、ナデ	やや密	並	灰白黒	口:1/8	
153	028-03	土師器 小形丸底甕	SR01	旧流路	口:10.0 高:8.2	ナデ・工具ナデ・指ナデーハラケズリ	やや粗	並	灰白	ほぼ完存	

第9表 出土遺物観察表(5)

No.	実測No.	器種	通橋名	取り上げ時の名称	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
154	028-01	土師器 小形丸 底蓋	SR01	旧渡 路	口:8.6 高:7.3	ナデ・工具ナデ・指ナデ→ヘラケズリ	やや 粗	並	淡黄	口:1/2	
155	163-04	土師器 小形丸 底蓋	SR01	瀬川 中	口:10.0 径不確定	外:ヨコナデ、ナデ、ケズリ 内:ヨコナデ、ナデ	やや 粗	並	灰黄	口:僅か	
156	164-01	土師器 小形丸 底蓋	SR01	谷から の埴輪	口:9.5	外:ヨコナデ、広いミガキ 内:ヨコナデ、ナデ	やや 粗	並	橙	口:一部 欠く	
157	028-02	土師器 小形丸 底蓋	SR01	サブ TR	口:8.4 高:8.5	ナデ・工具ナデ・指ナデ→ヘラケズリ	やや 粗	並	にぶい黄橙	口:1/2	
158	048-05	土師器 小形丸 底蓋	表土 掘削		口:7.8 高:8.6	ナデ・ケズリ→ヨコナデ・工具による ナデ	やや 粗	並	灰白 浅黄橙	口:3/8	体部下平に焼成 後穿孔有り
159	164-02	土師器 小形丸 底蓋	SR01	旧渡 路	口:8.0	厚減により調整不明瞭	粗	並	浅黄橙 にぶい橙	口:一部 欠く	黒灰あり。
160	093-03	土師器 小形丸 底蓋	SR01	瀬川 中	体:8.4	オサエ・ナデ	やや 粗	並	淡黄	体部ほぼ 完存	底部は平底状。
161	048-06	土師器 広口蓋	表土 掘削		口:1.3 高:10.4	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや 粗	並	にぶい橙 にぶい橙	口:1/3	体部に焼成後穿 孔有り
162	098-03	土師器 高杯	SR01	旧渡 路	小片	回転ナデ	やや 密	不良	橙	小片	
163	098-01	弥生土 器高杯	SR01	旧渡 路	口:14.8	回転ナデ、ナデ・オサエ	密	並	淡黄 浅黄橙	口:完存	
164	098-02	土師器 高杯	SR01	旧渡 路	口:17.7	ナデ、ヨコナデ	密	並	淡黄橙	口:1/3	北陸系土器か。
165	096-04	弥生土 器高杯	SR01	旧渡 路	口:15.9	ハケ→ミガキ 3方に透かし穴	やや 粗	並	淡黄橙 浅黄橙	口:1/9	
166	168-01	土師器 高杯	SR01	表土 掘削	口:18.0 高:18.4	精緻なヘラミガキ	密	良	にぶい黄橙 灰白	口:2/3 脚:2/3	杯部下平に焼成 後穿孔有り
167	119-01	弥生土 器高杯	検出		口:25.0	杯部:厚減激しく調整不明瞭 脚部:脚端横線、3方に透かし穴	やや 粗	並	黄橙	口:ほぼ完 存	
168	047-01	弥生土 器高杯	検出		口:23.0 高:18.4	ナデ→ハケミガキ風の調整不明瞭 脚部3方向に透かし穴	粗	並	にぶい橙	口:1/2 脚:1/2	
169	101-01	弥生土 器高杯	SR01	旧渡 路	底:9.3	外:ミガキ、3方に透かし穴 内:ハケミ	やや 密	並	橙	脚:完存	
170	100-04	弥生土 器高杯	SR01	旧渡 路	底:10.7	ミガキ	やや 密	並	淡赤褐	口:1/3	
171	097-01	弥生土 器高杯	SR01	旧渡 路	底:11.0	ハケ→ミガキ 3方に透かし穴	やや 粗	並	にぶい橙 浅黄橙	脚完存	
172	100-03	弥生土 器高杯	SR01	旧渡 路	底:10.4	ミガキ→横線、3方に透かし穴	密	並	灰白	底:3/4	
173	100-02	弥生土 器高杯	SR01	旧渡 路	底:11.0	ミガキ→横線、3方に透かし穴	密	並	浅黄橙	底:3/4	
174	100-01	弥生土 器高杯	SR01	旧渡 路	底:12.9	ミガキ→横線、3方に透かし穴	密	並	浅黄橙	底:ほぼ完 存	
175	029-02	土師器 高杯	SR01	南北 TR	底:11.8	ナデ→ミガキ→横線文	やや 粗	並	浅黄橙	脚:3/4	
176	097-02	弥生土 器高杯	検出		底:15.5	ミガキ→横線、3方に透かし穴	やや 粗	並	浅黄橙 淡赤褐	脚:完存	
177	101-02	土師器 高杯	SR01	旧渡 路	底:13.6	ミガキ→横線、3方に透かし穴	やや 密	並	浅黄橙	底:5/6	
178	101-03	土師器 高杯	SR01	旧渡 路	底:13.5	外:ミガキ 内:ケズリ	やや 粗	橙	にぶい橙 灰白	底:3/4	
179	119-02	土師器 高杯	SR01	下層 TR	口:15.1	厚減激しく調整不明瞭	密	並	浅黄橙	口:1/3	
180	096-03	土師器 高杯	SR01	旧渡 路	口:15.8	ヨコナデ、ナデ	密	並	浅黄橙 にぶい橙	口:1/2	
181	032-01	土師器 高杯	SR01	南北 TR	口:14.4 高:12.6	ナデ・工具ナデ→ヨコナデ	やや 密	並	にぶい橙	口:完存 脚:1/2	
182	098-05	土師器 高杯	SR01	旧渡 路	底:11.3	ハケ→ナデ	やや 粗	並	淡橙	底:ほぼ完 存	
183	099-01	土師器 高杯	SR01	旧渡 路	底:10.8	ナデ→ミガキ、ヨコナデ	密	並	浅黄橙	底:ほぼ完 存	
184	099-04	土師器 高杯	SR01	旧渡 路	底:12.0	ナデ	密	並	浅黄橙	底:ほぼ完 存	
185	092-01	土師器 付付篋	SR01	旧渡 路	口:11.6 高:17.1 台:7.6	ヨコナデ、オサエ、ケズリ	密	並	明褐灰 浅黄橙 にぶい橙	完存	外面に煤が付着

第10表 出土遺物観察表(6)

No.	実測No.	器種	遺構名	取上げ時の名称	計測値 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
186	032-02	土師器 土師器 土師器 土師器 土師器	SR01	南北 TR	口:9.7 底:12.7	ナデ・ハケメーヨコナデ	やや粗	並	にぶい黄褐色	ほぼ完存	
187	028-06	土師器 土師器 土師器	SR01	旧渡 筋	口:5.6	ナデーハケメ	やや粗	並	灰白	口:完存	ミニチュア土器
188	109-02	土師器 土師器 土師器	SR01	旧渡 筋	口:11.5	外:ヨコナデーハケメ 内:ヨコナデ・ナデ	やや粗	並	灰褐色	口:3/4	
189	112-01	土師器 土師器 土師器	SR01	旧渡 筋	口:16.8	外:ヨコナデーハケメ 内:ヨコナデーナデ後オサエ	やや粗	並	淡黄褐色 灰白	口:3/8	
190	033-01	土師器 土師器 土師器	SR01	南北 TR	口:15.4 底:33.0	ナデ・オサエーハケメーハラケズリ	やや粗	並	淡黄褐色	口:3/4 台:完存	
191	103-03	土師器 土師器 土師器	SR01	南面 露込	口:15.1	外:ヨコナデ・ナデ・ハケメ 内:ヨコナデ	やや粗	並	灰白 褐色	口:1/4	
192	167-01	土師器 土師器 土師器	SR01	横山	口:15.0 底:26.5	外:ヨコナデ・ハケメ 内:ヨコナデ・ナデ・オサエ・ケ	やや粗	並	淡黄褐色	口:完存 底:2/3	宇田裏
193	121-01	土師器 土師器 土師器	SR01	旧渡 筋	口:13.5	外:ヨコナデ・ハケメ 内:ヨコナデ・ナデ・オサエ	やや粗	並	灰白	口:ほぼ完 存	外面に煤付着。
194	147-04	土師器 土師器 土師器	SR01	表土 埋削	口:6.7	外:オサエ 内:オサエ後ナデ	やや粗	並	灰白 褐色	完存	
195	146-03	土師器 土師器 土師器	SR01	旧渡 筋	口:9.5	外:工具ナデ 内:ナデ・オサエ	やや粗	並	淡黄褐色	完存	
196	145-01	土師器 土師器 土師器	SD50		口:9.2	外:ハケ 内:オサエ	やや粗	並	にぶい黄褐色 にぶい褐色	完存	
197	146-04	土師器 土師器 土師器	SR01	南北 TR	口:8.5	ナデ・オサエ	やや粗	並	淡黄褐色 にぶい褐色	ほぼ完存	
198	144-04	土師器 土師器 土師器	SR01	旧渡 筋	口:10.9	ナデ・オサエ	やや粗	並	灰白	完存	
199	144-01	土師器 土師器 土師器	SR01	旧渡 筋	口:9.4	外:ハケメ 内:ナデ	やや粗	並	灰白	完存	
200	143-02	土師器 土師器 土師器	SR01	旧渡 筋	口:10.0	外:工具ナデ 内:ナデ	やや粗	並	灰白	口:2/3	
201	001-01	土師器 土師器 土師器	検出		口:15.0 底:28.5	ナデ・オサエーハケメ	やや粗	並	淡黄褐色	口縁部へ 体部完形	
202	156-01	土師器 土師器 土師器	SR01	旧渡 筋	口:15.5	外:ヨコナデ・ハケメ 内:ヨコナデ・ナデ	やや粗	並	灰白	口:ほぼ完 存	宇田裏
203	163-03	土師器 土師器 土師器	SR100		口:12.5	外:ヨコナデ・ナデ・ハケメ 内:ヨコナデ・ハケメ	やや粗	並	にぶい黄褐色	ほぼ完存	
204	120-02	土師器 土師器 土師器	SR01	旧渡 筋	口:14.0 底:14.2	外:ヨコナデ・ナデ・ハケメ 内:ナデオサエ一部ケズリ	やや粗	並	淡黄	口:1/2	
205	036-01	土師器 土師器 土師器	SR01	旧渡 筋	口:14.0 底:14.0	ナデ・ハケメーヨコナデ	やや粗	並	褐色	口:1/4	外面に煤付着
206	093-01	土師器 土師器 土師器	SR01	下層 TR	口:15.0 底:18.3	外:ヨコナデーハケメ 内:ハケメハケ後ケズリ	やや粗	並	にぶい褐色	口:1/3	底部にヘラ書き 線15cm本あり
207	159-01	土師器 土師器 土師器	SR01	旧渡 筋	口:15.8	外:ヨコナデ・ハケメ 内:ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	やや粗	並	灰白	口:3/5	体部に円弧状の ヘラ起りあり。
208	038-01	土師器 土師器 土師器	SR01	旧渡 筋	口:14.7 底:23.3	ナデーハケメケズリー粗いミガキ	粗	並	淡黄褐色	口:1/3	
209	113-01	土師器 土師器 土師器	検出		口:20.8	外:ヨコナデーハケメ 内:ナデ・工具ナデ	やや粗	並	灰白	口:6/7	
210	163-01	土師器 土師器 土師器	SK 127	SF 127	口:14.0	ヨコナデ・ハケメ	やや粗	並	淡黄褐色	口:7/8	
211	039-01	土師器 土師器 土師器	検出		口:21.6	ナデ・オサエーハケメーヨコナデ	やや粗	並	淡黄褐色	口:ほぼ 完存	
212	166-01	土師器 土師器 土師器	検出		口:19.1	外:ヨコナデ・ハケメ 内:ハケメ	やや粗	並	淡黄褐色	口:1/4	
213	106-01	土師器 土師器 土師器	SR01	旧渡 筋	口:18.5	外:ヨコナデーハケメ 内:ナデ・オサエーハケメ	やや粗	並	灰白	口:1/3	
214	116-01	土師器 土師器 土師器	SR01	下層 TR	口:20.0	ハケ後ヨコナデーハケメ	やや粗	並	淡黄褐色	口:1/3	
215	040-01	土師器 土師器 土師器	SR01	旧渡 筋	口:21.6 底:38.4	ナデ・オサエーハケメーハラケズリー ヨコナデ	やや粗	並	淡黄褐色	ほぼ完存	外面に煤付着
216	118-01	土師器 土師器 土師器	SR01	旧渡 筋	口:20.0 底:38.9	外:ヨコナデーハケメ 内:ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	やや粗	並	淡黄褐色	口:1/3	
217	124-01	土師器 土師器 土師器	SR01	旧渡 筋	口:20.1 底:37.6	外:ヨコナデ・ハケメ 内:ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	やや粗	並	灰白	口:1/2	
218	014-01	土師器 土師器 土師器	表土 埋削		口:20.2 底:35.9	ナデ・オサエーハケメーハラケズリ	粗	並	灰褐色・灰白	ほぼ完存	
219	115-01	土師器 土師器 土師器	SR01	下層 TR	口:31.0	外:ヨコナデケズリ、把手貼り付け 内:ヨコナデ・工具ナデ	やや粗	並	灰白 淡黄褐色	口:1/3	
220	082-01	土師器 土師器 土師器	SR01	旧渡 筋	口:32.5	外:ケズリ・ナデ 内:ナデ	粗	並	淡黄・褐色・灰 白	ほぼ完存	
221	165-02	土師器 土師器 土師器	SK 100		口:24.2	外:ハケメ・ナデ 内:ハケメ	やや粗	並	灰白	底:1/8	

第11表 出土遺物観察表(7)

No.	実測No.	器種	通稱名	取り上げ時の名称	計測値 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
222	049-06	土師器 横瓶	検出		径:4.9 径:13.4	ナデ・オサエ	やや粗	並	浅黄橙	体:2/3	ミニチュア土器
223	031-01	土師器 圓形須臈	SR01		口:9.4 高:7.5	指ナデーケズリ→ヨコナデ	やや粗	並	灰白	ほぼ完存	
224	092-03	土師器 ハンク	SR01	南面 彫込	口:9.8 高:10.7	ヨコナデ、ナデ、体部最大径部分に 彫込彫筋	やや粗	並	灰白 明褐色	ほぼ完存	
225	111-03	土師器 鉢	SR01	旧渡 路	口:21.4 高:11.6	外:ヨコナデ、ナデ、オサエ、ケズリ 内:ヨコナデ、ケズリ	やや粗	並	灰白 浅黄橙	口:1/4	
226	085-01	土師器 土管	SE39	SZ39	径:20.0	ナデーハケメ	やや粗	並	橙	径:1/2	
227	149-03	円筒埴 輪	SR01	旧渡 路	径不明	外:凸帯貼付け後ナデ、ハケメ 内:割懸のため調整不明	やや粗	並	浅黄橙	小片	
228	150-03	円筒埴 輪	SR01	旧渡 路	径不明	外:凸帯貼付け後ナデ、ハケメ 内:オサエ・ナデ	やや粗	並	浅黄橙	小片	
229	150-04	円筒埴 輪	SR01	旧渡 路	径不明	外:凸帯貼付け後ナデ、ハケメ 内:オサエ・ナデ	やや粗	並	浅黄橙	小片	円形透かし穴部 分、皿かに残る
230	150-02	円筒埴 輪	SR01	旧渡 路	径不明	外:凸帯貼付け後ナデ、ハケメ 内:オサエ・ナデ	やや粗	並	浅黄橙	小片	
231	150-01	円筒埴 輪	SR01	旧渡 路	径不明	外:凸帯貼付け後ナデ、ハケメ 内:ナデ	やや粗	並	浅黄橙	小片	
232	149-04	円筒埴 輪	SR01	旧渡 路	径不明	外:凸帯貼付け後ナデ、ハケメ 内:オサエ・ナデ	やや粗	並	浅黄橙	小片	
233	085-02	扁形埴 輪	SR01	旧渡 路	小片	ナデーハケメ	やや粗	並	橙	小片	円形透穴残る。
234	149-02	形家埴 輪	SR01	旧渡 路	径:13.7	外:寧座のため調整不明 内:オサエ、ナデ	やや粗	並	浅黄橙	脚:1/2	
235	029-03	形家埴 輪	SR01	旧渡 路	径:8.5 径:16.0	ナデーオサエ	やや粗	並	浅黄橙	脚:1/2	馬形埴輪の脚部 分が。
236	107-02	土師器 甕	SF96		口:33.0	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ、ハケメ<残る	やや粗	並	にぶい黄橙	口:1/6	
237	007-01	土師器 甕	検出		口:33.4	オサエ・ナデーハケメ→ヨコナデ	やや粗	並	灰白	口:1/4	
238	125-01	土師器 清掃 中			口:36.2	外:ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内:ハケメ	やや粗	並	にぶい橙 灰黄橙	口:1/6	
239	162-01	土師器 甕	SR01	旧渡 路	口:33.5	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ハケメ	やや粗	並	浅黄橙 にぶい橙	口:7/8	
240	158-01	土師器 甕	検出		口:37.0	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ハケメ	やや粗	並	浅黄橙	口:1/5	
241	064-04	須恵器 杯蓋	SR 100		口:12.4	回転ナデー→回転ケズリ	やや粗	良	灰・灰白	口:1/5	
242	066-02	須恵器 杯蓋	検出		口:15.8	回転ナデー→回転ケズリ	やや粗	並	灰	口:1/4	
243	018-02	須恵器 杯蓋	SR01	旧渡 路	口:14.3 高:3.8	回転ナデー→回転ケズリ ヘラ切り	やや粗	並	褐灰	完存	
244	074-01	須恵器 杯蓋	SR01	下層 TR	口:14.8	回転ナデー→回転ケズリ	やや粗	並	灰オリブ	口:2/3	
245	065-02	須恵器 杯蓋	SR01	旧渡 路	口:13.8	回転ナデー→回転ケズリ	やや粗	並	灰白	完存	天井部へラ切り 未調整
246	073-02	須恵器 杯蓋	SR01	下層 TR	口:13.8	回転ナデー→回転ケズリ 11線部外面に、調整最終段階の板 状工具によるナデ。	やや粗	良	灰白	ほぼ完存	
247	075-02	須恵器 杯蓋	SR01	下層 TR	口:13.0	回転ナデー→回転ケズリ	やや粗	良	明青灰 灰白	口:3/8	
248	070-01	須恵器 杯蓋	SR01	下層 TR	口:12.5	回転ナデ	やや粗	並	灰白	ほぼ完存	天井部へラ切り 後ナデ
249	117-02	須恵器 杯蓋	SR01	南面 彫込	口:12.1	回転ナデー→回転ケズリ	やや粗	良	灰	口:2/3	
250	063-04	須恵器 杯蓋	SR01		口:14.8	回転ナデー→回転ケズリ	並	良	暗青灰	口:1/3	
251	015-04	須恵器 杯身	SR 100		口:13.2	回転ナデー→回転ケズリ	やや粗	良	灰白	口:1/2	
252	169-02	須恵器 杯蓋	SR01	旧渡 路	口:15.0 高:5.0	回転ナデー→回転ケズリ	密	良	灰	口:1/2	
253	065-01	須恵器 杯蓋	SR01	旧渡 路	口:14.6	回転ナデー→回転ケズリ	やや粗	並	灰・灰白	完存	
254	073-03	須恵器 杯蓋	SR01	下層 TR	口:15.7	回転ナデー→回転ケズリ→沈線	やや粗	良	灰白 灰	ほぼ完存	
255	075-03	須恵器 杯蓋	SR01	下層 TR	口:13.4	回転ナデー→回転ケズリ	やや粗	並	明青灰	口:1/2	天井部へラ切り
256	018-01	須恵器 杯蓋	SR01	旧渡 路	口:13.8 高:4.3	回転ナデー→回転ケズリ	やや粗	並	灰	口:3/4	外面灰かぶり
257	048-02	須恵器 杯蓋	表土 掘削		口:12.4 高:5.1	回転ナデー→回転ケズリ	粗	並	明青灰	口:1/4	

第12表 出土遺物観察表(8)

No.	実測No.	器種	遺構名	取り上げ時の名称	計測値(cm)	形状・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
258	065-04	須恵器杯蓋	SR 01	旧流路	口:15.8	回転ナデー回転ケズリ	やや密	並	灰	口:1/2	
259	020-05	須恵器杯蓋	SR01	伏掘TR	口:15.5 高:5.25	回転ナデー回転ケズリ	やや粗	良	灰白	完存	
260	020-04	須恵器杯蓋	SR01	南北TR	口:14.8 高:4.5	回転ナデー回転ケズリ	やや粗	良	明青灰	完存	
261	072-03	須恵器杯蓋	SR01	TR	口:14.0	回転ナデー回転ケズリ	やや粗	良	灰白・灰	口:2/3	
262	074-02	須恵器杯蓋	SR01	下層TR	口:14.1	回転ナデー回転ケズリ	やや粗	並	灰白	口:3/4	
263	084-03	須恵器杯蓋	SD 115		口:12.4	回転ナデーヘラ切り後ナデ	やや密	並	灰	口:1/4	
264	019-01	須恵器杯蓋	三郷井	旧用水路	口:13.8	回転ナデーヘラ切り	やや粗	良	灰白	口:2/3	
265	065-05	須恵器杯蓋	SR01	旧流路	口:14.9	回転ナデー回転ケズリ	やや粗	不良	灰	口:2/3	天井部ヘラ切り未調整
266	066-01	須恵器杯蓋	輸出		口:15.2	回転ナデー回転ケズリ	やや密	並	灰白	口:1/4	
267	015-06	須恵器杯身	SR01	旧流路	口:13.8	回転ナデー回転ケズリ	やや粗	良	灰白	口:1/3	
268	016-01	須恵器杯蓋	SR01	旧流路	口:13.6	回転クロナデー回転ケズリ	やや粗	並	灰白	口:2/3	
269	073-01	須恵器杯蓋	SR01	下層TR	口:14.8	回転ナデー回転ケズリ	やや粗	不良	灰白	口:1/2	
270	015-05	須恵器杯身	SR01	旧流路	口:13.2	回転ナデー回転ケズリ	やや密	良	灰白	口:少量 欠く	
271	065-03	須恵器杯蓋	SR01	旧流路	口:13.6	回転ナデー回転ケズリ	やや密	不良	灰白	口:5/6	天井部ヘラ切り後ナデ
272	084-02	須恵器杯蓋	SR 115		口:14.0	回転ナデーケズリ	やや密	並	灰白	口:1/10	
273	067-06	須恵器杯蓋	輸出		口:10.4	回転ナデー回転ケズリ	やや密	並	灰白	口:1/2	天井部ヘラ切り未調整
274	018-03	須恵器杯蓋	SR01	東西TR	口:10.4 高:3.35	回転ナデー回転ケズリ ヘラ切り	やや粗	並	灰	口:2/3	
275	068-05	須恵器杯蓋	SR 100		口:11.0	回転ナデー	やや密	良	灰白	口:2/3	天井部ヘラ切り
276	048-03	須恵器杯蓋	輸出		口:10.6 高:3.2	回転ナデー	密	並	灰・灰白	口:1/2	
277	068-06	須恵器杯蓋	SR 100		口:10.25	回転ナデー	やや粗	良	灰	口:3/8	天井部ヘラ切り 口縁部焼き込み
278	069-02	須恵器杯蓋	SR 100		口:10.2	回転ナデー	やや密	良	灰白	口:1/4	天井部ヘラ切り
279	016-02	須恵器杯蓋	輸出		口:10.1 高:3.5	クロコナデー→クロケズリ ヘラ切り	密	良	灰	口:2/3	
280	069-04	須恵器蓋	SR 100		口:9.7	回転ナデー	やや密	良	灰白	口:3/8	天井部ヘラ切り
281	069-05	須恵器蓋	SR 100		口:10.0	回転ナデー	やや粗	良	灰白	口:1/4	天井部ヘラ切り
282	070-03	須恵器杯蓋	SR01	下層TR	口:11.3	回転ナデー回転ケズリ	やや密	並	灰白	口:3/8	天井部にヘラ記号あり
283	070-02	須恵器杯身	SR01	南部落込	口:11.0	回転ナデー回転ケズリ	やや密	並	灰白・灰	ほぼ完存	
284	076-02	須恵器杯身	SR01	南北TR	口:11.05	回転ナデー回転ケズリ	やや密	良	灰	口:1/2	
285	020-02	須恵器杯身	SR01	旧流路	口:11.2 高:4.95	回転ナデー・ナデー回転ケズリ	やや粗	良	灰	口:1/2	内から外への焼成後穿孔有り
286	169-03	須恵器杯身	SR01	旧流路	口:12.4 高:4.1	回転ナデー回転ケズリ	密	良	暗灰	ほぼ完存	
287	172-01	須恵器杯身	SR01	旧流路	口:11.0 高:4.1	回転ナデー回転ケズリ	やや粗	良	暗青灰		
288	048-01	須恵器杯身	表土埋所		口:11.0	回転ナデー回転ケズリ	やや粗	並	青灰	口:1/4	
289	065-06	須恵器杯身	SR01	旧流路	口:11.5	回転ナデー回転ケズリ	やや粗	不良	灰	口:1/2	外面に煤が付着
290	017-01	須恵器杯身	SR01	旧流路	口:13.3 高:5.4	回転ナデー・ナデー回転ケズリ	やや粗	並	灰	完存	
291	017-03	須恵器杯身	SR 115		口:12.2 高:4.3	回転ナデー・ナデーヘラ切り	やや粗	並	灰白	完存	
292	070-04	須恵器杯身	SR01	下層TR	口:13.0	回転ナデー回転ケズリ	やや粗	並	灰白	口:3/8	
293	066-04	須恵器杯身	表土埋所		口:11.2	回転ナデー回転ケズリ	やや密	並	青灰	口:1/4	

第13表 出土遺物観察表(9)

No.	実測No.	器種	遺構名	取り上げ時の名称	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	構成	色調	残存度	備考
294	063-01	須恵器杯身	SR01	旧流路	口:12.2	回転ナデ→回転ケズリ	密	良	青灰	口:1/2	口縁端部に研磨痕あり。
295	063-02	須恵器杯身	SR01		口:14.0	回転ナデ→回転ケズリ	粗	良	青灰	口:1/2	口縁端部に研磨痕あり。
296	074-06	須恵器杯身	SR01	下層TR	口:12.8	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	並	明オリブ灰	口:3/4	口:3/4
297	066-05	須恵器杯身		表土掘削	口:10.2	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	並	明オリブ灰	完存	
298	063-03	須恵器杯身	SR01		口:12.0	回転ナデ→回転ケズリ	密	良	明青灰	完存	口縁端部にヘラによる凹線あり
299	066-03	須恵器杯身		検出	口:12.2	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	並	灰白	口:1/5	
300	019-03	須恵器杯身	SR01	南北TR	口:12.7	回転ナデ→回転ケズリ ヘラ切り	やや密	良	灰白・灰	ほぼ完存	
301	020-03	須恵器杯身	SR01	南北TR	口:11.8 高:4.4	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	やや軟	灰白・灰	口:2/3	
302	019-02	須恵器杯身	SR01	南北TR	口:12.5	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	良	灰白	口:4/5	
303	074-03	須恵器杯身	SR01	下層TR	口:12.2	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	並	灰	ほぼ完存	
304	071-02	須恵器杯身	SR01	南部露込	口:13.5	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	並	灰白	口:3/4	底部未調査。
305	020-01	須恵器杯身	SR01	旧流路	口:12.1 高:4.2	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	良	灰白	ほぼ完存	
306	017-02	須恵器杯身	SR01	南北TR	口:13.1 高:4.5	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	並	灰白	ほぼ完存	底部外面に自然釉
307	075-04	須恵器杯身	SR01	下層TR	口:11.95	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	良	褐灰灰白	口:1/4	
308	015-03	須恵器杯身	SR01	旧流路	口:13.2	回転ナデ 底部ヘラ切り	やや密	良	灰白	口:2/5	
309	015-01	須恵器杯身	SR01	旧流路	口:11.7 高:4.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	良	灰白	ほぼ完存	
310	161-02	須恵器杯身		検出	口:14.0 高:4.2	回転ナデ→回転ケズリ	並	良	オリブ灰灰白		
311	019-04	須恵器杯身	SR01	南北TR	口:12.2	回転ナデ→回転ケズリ 内面底部に当て具痕跡有り	やや密	良	灰白	ほぼ完存	
312	072-01	須恵器杯身	SR01	下層TR	口:15.2	回転ナデ→回転ケズリ	粗	良	灰白	口:1/3	底部外面にヘラ記号あり
313	074-04	須恵器杯身	SR01	下層TR	口:13.8	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	並	明オリブ灰	口:1/2	底部外面にヘラ記号あり
314	076-01	須恵器杯身	SR01	下層TR	口:14.2	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	良	灰白	口:3/8	底部にヘラ記号あり
315	074-05	須恵器杯身	SR01	下層TR	口:13.6	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	並	褐灰灰	口:1/2	底部外面にヘラ記号あり
316	076-03	須恵器杯身	SR01	下層TR	口:12.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	良	灰・灰白	口:1/3	底部外面に当て具状痕跡あり。
317	068-03	須恵器杯身	SR100		口:9.2	回転ナデ	やや密	良	灰白	ほぼ完存	底部ヘラ切り 外面に自然釉
318	071-03	須恵器杯身	SD61		口:10.4	回転ナデ	密	並	灰白	口:1/8	外面に自然釉が付着。
319	015-02	須恵器杯身	SR01	旧流路	口:10.2 高:3.5	回転ナデ 底部ヘラ切り	やや粗	良	灰白	完存	片面のみ自然釉
320	017-04	須恵器杯身	SR01	旧流路	口:11.0 高:3.6	回転ナデ ヘラ切り	やや密	並	灰	口:1/2	
321	068-02	須恵器杯身	SR100		口:9.2	回転ナデ	やや密	良	灰白	口:1/2	底部ヘラ切り
322	071-04	須恵器杯身	SR01	TR	口:9.8	回転ナデ	粗	並	灰黄褐・灰	口:1/4	
323	019-05	須恵器杯身		三郷井	口:9.1	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	良	灰白	ほぼ完存	
324	172-02	須恵器杯身	SR01	旧流路	口:11.2 高:3.6	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	良	青灰		
325	075-01	須恵器杯蓋	SR01	下層TR	口:15.0	回転ナデ→回転ケズリ 口縁部は調整の最終段階に板状工具によるナデ	やや粗	良	灰	完存	
326	072-02	須恵器杯蓋	SR01	TR	口:16.0	回転ナデ→回転ケズリ→沈線	粗	良	灰	ほぼ完存	
327	060-02	須恵器高坏		検出	底:16.5	回転ナデ→沈線→方形透窓を三方に付ける	やや密	良	灰	底:1/3	
328	060-05	須恵器高坏		SR100	底:10.5	回転ナデ	やや密	良	灰白	底:3/4	
329	060-04	須恵器高坏		検出	底:8.4	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	良	灰白	底:1/3	

第14表 出土遺物観察表00

No.	実測No.	器種	遺構名	取り上げ時の名称	計測値 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
330	117-04	須恵器高杯	検出		口:11.8	回転ナデー→回転ケズリ	やや密	良	灰	口:僅か	
331	060-03	須恵器高杯	TR		口:10.4	回転ナデー→回転ケズリ→沈線	やや密	不良	灰白	口:1/3	脚上部内面に紋り目あり。
332	056-03	須恵器高杯	SR01	下層TR	基部径:3.4	回転ナデー→カキメ	密	良	灰	基部:1/3	
333	060-01	須恵器高杯	表土掘削		底:12.4	回転ナデー→ナデー→沈線	やや密	良	灰白	脚:1/2	脚上部内面に紋り目あり。
334	023-02	須恵器直口壺	検出		口:3.5 高:7.15	回転ナデー	やや密	良	灰白	体部完存	
335	061-03	須恵器ハソク	SR 190	旧浜路	体:10.0	回転ナデー→ケズリ後ナデー→波状文	やや密	並	灰白・灰	体:ほぼ完存	外面の一部に自然輪あり。
336	084-05	須恵器ハソク	SR 115		口:10.05	回転ナデー→沈線	やや密	並	灰	口:3/4	
337	023-04	須恵器ハソク	SR01		底:4.6	回転ナデー→回転ケズリ	やや密	並	灰	体部完存	
338	062-03	須恵器ハソク	SR 190		体:8.2	回転ナデー→沈線	やや密	並	灰	体:ほぼ完存	内面に焼き跡あり。
339	062-02	須恵器ハソク	SR 190		体:8.8	回転ナデー→回転ケズリ→沈線	やや密	並	灰白	体:ほぼ完存	
340	062-01	須恵器ハソク	SR 100		体:8.3	回転ナデー→回転ケズリ→沈線・刺突	やや密	良	灰白	体:ほぼ完存	
341	062-04	須恵器ハソク	SR01	下層TR	体:9.2	回転ナデー→回転ケズリ→カキメ→刺突	やや密	並	灰白	体:1/2	
342	067-05	須恵器蓋	検出		口:10.8	回転ナデー	やや密	並	灰白	口:1/2	天井部へラ切り未調整。ヘタ記号あり。
343	067-04	須恵器蓋	検出		口:9.7	回転ナデー→回転ケズリ	やや密	並	灰白	口:2/3	
344	067-03	須恵器杯蓋	検出		口:10.4	回転ナデー→回転ケズリ	やや密	並	灰白	口:1/2	天井部へラ切り後ナデー
345	069-03	須恵器杯蓋	SR 190		口:10.3	回転ナデー	やや密	良	灰・灰白	口:1/4	天井部へラ切り
346	023-03	須恵器短頸壺	SR 190		口:5.5 高:8.55	回転ナデー→一部ケズリ後回転ナデー	やや密	並	灰白	ほぼ完存	
347	061-01	須恵器短頸壺	SR 190	検出	口:6.3 高:7.9	回転ナデー→ヘラケズリ	やや密	良	灰白	口:1/4	
348	108-03	須恵器短頸壺	SR01	TR	口:10.0	外:回転ナデー→回転ケズリ 内:回転ナデー	やや粗	並	灰白	口:僅か	
349	005-03	須恵器平瓶	検出		径:15.8 高:9.3	ロコナデー、ロコケズリ→施軸	やや密	良	灰	体部ほぼ完存	
350	024-01	須恵器長頸壺	表土掘削		台:9.8	回転ナデー→タキ後回転ケズリ 体部最大径部分上にキザミ	やや密	並	灰	台部完存	
351	053-02	須恵器壺	SR01	南北TR	口:26.4	回転ナデー→タキ	やや密	並	灰・灰白	口:僅か	
352	056-01	須恵器壺	SR01	旧浜路	口:27.2	回転ナデー	やや粗	良	灰	口:1/4	
353	053-01	須恵器壺	SR 190		口:32.8	回転ナデー→波状文→凹線→カキメ	やや密	良	灰・灰白	口:5/12	
354	054-01	須恵器壺	SR01	東TR	口:23.2	回転ナデー	やや密	良	灰・灰白	口:1/4	胴部外面に逆シ字状のヘタ記号あり。
355	055-01	須恵器壺	SR01	TR	口:32.1	回転ナデー→波状文→凹線→沈線	やや密	良	灰・灰白	口:1/9	
356	054-02	須恵器壺	SR01	旧浜路	口:19.4	回転ナデー→タキ→カキメ	やや密	並	灰白	口:1/3	体部内面に当て具痕跡あり。
357	025-01	須恵器横瓶	SR01	旧浜路	口:11.8 高:25.5	口:ナデー→ヨコナデー 体:ナデー→カキメ→コウシタタキ	やや粗	並	灰	完存	
358	058-01	須恵器埋瓶	SR01		幅:16.3 底:10.2	回転ナデー→回転ケズリ→把手貼り付け	やや粗	良	灰	体:ほぼ完存	外面に自然輪が覆れる。
359	022-01	須恵器横瓶	SR01	東西TR	口:9.4	回転ナデー→回転ケズリ	密	良	灰白	口:1/6	
360	021-01	須恵器横瓶	SR01	旧浜路	口:8.0 高:25.75	回転ナデー→カキメ	密	良	灰白	ほぼ完存	
361	061-02	須恵器壺	SR 190		口:9.8	回転ナデー→沈線→カキメ	やや密	良	灰白	口:1/2	
362	057-02	須恵器埋瓶	SR 100		口:9.0	回転ナデー→カキメ	やや粗	良	灰白	口:完存	
363	160-04	土師器鉢	SR01	下層TR	口:11.6 高:4.6	外:ヨコナデー。オサエ内:ヨコナデー。ナデー	やや粗	良	にぶい黄褐	口:1	底部外面に木蓋痕跡に覆れる。
364	027-02	土師器鉢	SR01	旧浜路	口:13.0 高:5.9	ナデー→オサエ→ヨコナデー	密	並	灰白	口:5/8	

第15表 出土遺物観察表(0)

No.	実測No.	器種	遺構名	取り上げ時の名称	計測値 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
365	172-04	土師器 罎	SR01	旧成 路北	口:13.2 高:6.0	ナデ→ヨコナデ	密	やや 良	灰白		
366	026-03	土師器 鉢	SR01	旧成 路北 TR	口:12.0 高:4.9	ナデ・ケズリ→ヨコナデ	粗	並	橙	口:3/4	
367	081-03	土師器 鉢	SR01	下層 TR	口:13.0	ヨコナデ→ミガキ→ケズリ	粗	並	にぶい橙 浅黄橙	口:5/16	
368	081-01	土師器 鉢	SR01	下層 TR	口:12.6	ヨコナデ→ケズリ	粗	並	浅黄橙・橙	口:12.6	
369	160-01	土師器 鉢	SR01	南堀 塚北	口:11.6 高:5.0	外:ヨコナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	並	良	橙 暗灰黄	口:1/3	表面割れ溝み調整 不明瞭。
370	026-02	土師器 鉢	SR01	ナデ TR	口:11.3 高:5.0	ナデ・ケズリ→ヨコナデ 内面に工具によるナデ	やや 粗	並	黄橙	口:3/4	
371	079-02	土師器 鉢	検出		口:11.8	ナデ、オサエ	密	並	灰白	口:1/3	
372	079-04	土師器 鉢	SR01	旧成 路	口:11.4	ナデ・工具による調整	密	並	灰白	口:1/4	
373	079-03	土師器 鉢	SR01	旧成 路	口:10.0	ナデ、オサエ	粗	並	浅黄橙	口:1/2	
374	026-05	土師器 鉢	SR01	旧成 路	口:11.5 高:4.5	ナデ→ヨコナデ	密	並	浅黄橙	完存	
375	079-01	土師器 鉢	SR01	旧成 路	口:14.1	ナデ、オサエ	密	並	浅黄橙	口:3/4	
376	081-08	土師器 杯蓋	SR 100		口:11.0	ナデ→ミガキ	密	並	橙	口:1/2	
377	160-03	土師器 杯	SR 100		口:11.6 高:3.7	外:ヨコナデ、オサエ 内:ナデ	やや 粗	良	浅黄橙	口:	
378	081-05	土師器 鉢	SR01	下層 TR	口:11.3	ナデ、オサエ、工具によるナデ	密	並	浅黄橙 にぶい橙	ほぼ完存	
379	026-04	土師器 鉢	SR01		口:11.2 高:5.2	ナデ・ハケ→ヨコナデ 内面に工具によるナデ	粗	並	灰白	完存	
380	026-01	土師器 鉢	SR01	東西 TR	口:12.9 高:4.6	ナデ・ケズリ→ヨコナデ	やや 粗	並	橙	口:5/8	
381	079-05	土師器 鉢	SR01	下層 TR	口:11.2	ナデ、オサエ	粗	並	にぶい橙	ほぼ完存	底部外面に木葉 痕あり。
382	028-04	土師器 台付罎	SD 115		口:12.7 高:7.6	口:ナデ→オサエ 台:ナデ	やや 密	並	橙	口:1/5 台:ほぼ完 存	
383	094-02	土師器 台付罎	SR01	旧成 路	口:11.6 高:7.5	ヨコナデ、ナデ	やや 密	並	淡橙	口:3/4 台:1/2	腕部に黒斑1ヶ所 あり。
384	034-01	土師器 台付罎	SR01		口:13.0 高:7.8	ナデ、オサエ→ヨコナデ	やや 密	並	灰白	口:完存 台:1/4	
385	094-03	土師器 台付罎	SR01	旧成 路	口:11.7	工具ナデ、ナデ、ヨコナデ	粗	並	浅黄橙	口:1/2	
386	095-01	土師器 台付罎	SR 100		台:7.5	オサエ、ナデ、ヨコナデ	やや 粗	並	浅黄橙	台:1/2	
387	019-06	須恵器 杯蓋	検出		口:10.5	回転ナデ→回転ケズリ 宝珠ツツミ	やや 粗	良	灰白	口:6/7	
388	170-01	須恵器 杯蓋	検出		口:14.1 高:3.45	回転ナデ→回転ケズリ	密	良	青灰	口:4/5	
389	044-01	須恵器 杯蓋	検出		口:12.2 高:2.4	回転ナデ→回転ケズリ	やや 密	並	灰白	口:1/4	
390	044-02	須恵器 杯蓋	黄土 掘削		口:13.5 高:2.2	回転ナデ→回転ケズリ	やや 密	並	灰白	口:1/10	
391	043-01	須恵器 杯蓋	黄土 掘削		口:25.7	回転ナデ→波状文	やや 粗	並	灰	口:1/11	内面に自然輪
392	117-03	須恵器 罎鉢	検出		口:13.6	回転ナデ	やや 密	良	灰白 灰	口:1/2	
393	023-01	須恵器 広口罎	SR01	旧成 路	口:8.5 高:11.2	回転ナデ→回転ケズリ→カキメ	粗	良	灰白・灰	完存	
394	081-07	土師器 杯	SR 100		口:11.0	ナデ、オサエ	密	並	浅黄橙	口:5/8	
395	081-04	土師器 杯	SR01	下層 TR	口:12.0	ナデ、オサエ	密	並	橙	口:7/16	
396	081-02	土師器 杯	SR01	下層 TR	口:13.0	ナデ、オサエ	密	並	浅黄橙	ほぼ完存	
397	080-01	土師器 罎	検出		口:11.2	ナデ→内面にハケメ	密	並	橙	口:1/4	
398	080-04	土師器 罎	SR 100		口:10.1	ナデ・ヨコナデ 暗文	粗	並	橙	口:3/4	
399	080-03	土師器 罎	検出		口:12.0	ナデ・ヨコナデ 暗文	密	並	橙	口:5/6	
400	081-06	土師器 杯	SR 100		口:11.8	ナデ・ヨコナデ 暗文	粗	並	橙	口:1/2	

第16表 出土遺物観察表④

No.	実測No.	器種	遺構名	取り上げ時の名称	計測値 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
401	080-02	土師器 土師器 土師器	SR 100		口:17.0	外:ミガキ 内:ミガキ・跡文	密	並	浅黄橙	口:1/3	
402	042-02	土師器 杯	SR01	旧流 路	口:12.4 高:3.4	ケズリ→ナデ・オサエ→ミガキ 底部内面に螺旋状跡文有り	やや 粗	並	浅黄 浅黄橙	口:1/3	底部内面に墨書 有り。判読不能
403	083-04	土師器 土師器 土師器	検出		底:12.4	外:ナデ、高台貼付け後ナデ 内:跡文	密	並	橙	底:1/4	
404	041-04	土師器 土師器	検出		口:20.8 高:2.4	ナデ→ケズリ 風化のため調整不明瞭	やや 粗	並	浅黄橙	口:僅か	
405	037-01	土師器 土師器	検出		口:20.8 高:2.8	ナデ・オサエ→ヨコナデ 内面に放射状・螺旋跡文	やや 粗	並	橙	ほぼ完存	
406	008-03	土師器 土師器 土師器	検出		口:14.1 高:10.2	オサエ・ハケメ→ヨコナデ・ハラケズリ	やや 粗	並	浅黄橙・褐 灰	口:1/8	底部にヘラ記号 有り
407	102-03	土師器 土師器 土師器	検出		口:15.0	外:ヨコナデ→ハケメ 内:オサエ・ナデ→ハケメ	やや 粗	並	浅黄橙 灰褐	口:僅か	
408	110-03	土師器 土師器 土師器	SR 100		口:17.5	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ナデ→ハケメ	やや 粗	並	淡黄	口:ほぼ完 存	
409	108-02	土師器 土師器 土師器	検出		口:14.7	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ハケメ	やや 粗	並	灰白	口:1/5	
410	106-02	土師器 土師器 土師器	SR 100		口:21.2	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ナデ→ハケメ	やや 粗	並	にぶい橙	口:1/3	
411	116-02	土師器 土師器 土師器	表土 埋前		口:20.0	ハケ後ヨコナデ→ハケメ	やや 粗	並	浅黄橙 にぶい橙	口:1/4	
412	107-01	土師器 土師器 土師器	検出		口:26.0	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ハケメ	やや 粗	並	浅黄橙	口:1/6	
413	102-01	土師器 土師器 土師器	SR 115	東 TR	口:30.0	外:ハケメ 内:ナデ→口縁部ハケメ	やや 粗	並	灰白	口:1/8	
414	064-01	須恵器 杯蓋	SR 100		口:9.8	回転ナデ→回転ケズリ	並	良	暗青灰	口:4/5	口縁部に研磨 痕あり
415	064-02	須恵器 杯蓋	検出		口:11.3	回転ナデ→回転ケズリ	並	良	明青灰	口:3/4	口縁部に研磨 痕あり
416	063-05	須恵器 杯蓋	検出		口:12.2	回転ナデ→回転ケズリ	密	良	暗青灰	完存	口縁部に研磨 痕あり
417	009-02	須恵器 杯蓋	検出		口:14.2 高:3.4	ロクロナデ・ロクロケズリ→貼付ナデ	やや 粗	良	灰	口:2/3	内面に自然釉が 付着
418	064-03	須恵器 杯蓋	検出		口:17.8	回転ナデ	並	良	灰	口:3/4	口縁部内面に自然 釉あり
419	084-04	須恵器 杯蓋	SR 115		口:13.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや 粗	並	灰	口:僅か 底:1/4	
420	068-01	須恵器 杯蓋	SR 100		口:13.2	回転ナデ→回転ケズリ	やや 粗	良	灰白	口:僅かに 残る	
421	085-04	須恵器 土師器	SR 115		口:10.2	回転ナデ	やや 粗	並	灰白	口:1/8	
422	084-01	須恵器 土師器	SR 115		口:28.1	回転ナデ→面線、カキメ後波状文	やや 粗	並	暗オリーブ 灰	口:1/12	
423	169-04	須恵器 土師器	SR01	旧流 路	口:9.2 高:12.2	回転ナデ→回転ケズリ	並	良	暗灰	口:1/3 体:完存	
424	049-02	須恵器 土師器	検出		破片		密	並	灰白	破片	
425	006-01	土師器 杯	検出		口:12.2	ナデ(器面剥離で詳細不明)	やや 粗	並	浅黄橙	口:2/3	内面に黒色物付 着。僅か
426	172-03	土師器 杯	SR01	旧流 路	口:12.8 高:4.0	ナデ→ヨコナデ	密	良	橙		底部外面に墨痕 有り
427	044-06	土師器 杯	検出		口:13.2 高:3.1	ナデ→ヨコナデ、ケズリ 磨減激し調整不明瞭	やや 粗	並	浅黄橙	口:1/2	
428	004-03	土師器 杯	SR 115	旧河 路	口:13.0 高:3.0	ナデ→ヨコナデ	密	並	橙	4/5	
429	036-05	土師器 杯	SR01	旧流 路	口:12.0 高:3.5	ナデ・オサエ→ヨコナデ 底部外面にケズリ	やや 粗	並	灰白	口:1/3	
430	083-06	土師器 杯	SR 115		口:14.1	オサエ・ナデ	密	並	灰白	口:1/4	
431	071-01	須恵器 杯身	SR01	東西 TR	口:10.8	回転ナデ→回転ケズリ	やや 粗	並	灰白	口:3/8	底部糸切り痕あ り。外面に墨痕が 付着
432	036-04	土師器 杯	SR01	旧流 路	口:12.8 高:3.8	ナデ・オサエ→ヨコナデ 底部外面にケズリ	やや 粗	並	灰白	口:1/3	
433	036-03	土師器 杯	SR01	旧流 路	口:14.8 高:3.6	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや 粗	並	淡黄	口:1/3	
434	083-01	土師器 杯	SR 115		口:17.0	ナデ	密	並	浅黄橙	口:1/6	
435	041-02	土師器 杯	表土 埋前		口:18.2 高:5.0	ナデ→ケズリ	やや 粗	並	橙	口:2/5	
436	173-01	土師器 杯	SR01	旧流 路	口:12.2 高:3.7	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや 粗	良	灰白 淡橙	口:2/3	底部外面に墨書 「正」

第17表 出土遺物観察表③

No.	実測No.	器種	遺構名	取り上げ時の名称	計測値 (cm)	調査・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
437	027-01	土師器杯	SR01	旧流筋	口:12.0 高:3.5	ナゲ後オサエ→ヨコナゲ	密	並	淡黄	口:1/2	底部に墨書有るが判読不能
438	004-02	土師器杯	SR115	旧河道	口:13.0 高:3.3	オサエ・ナゲ→ケズリ・ミガキ	密	並	橙	口:1/2 底:2/3	底部内面に螺旋状の暗紋
439	090-02	黒色土器瓶	SR01	旧流筋	口:18.2	ケズリ→ミガキ	やや密	並	外:淡橙内:黒焼	口:1/6	
440	173-02	黒色土器瓶	SR01	旧流筋	口:18.2	ヨコナゲ→内面黒化処理後ヘラミガキ	密	良	橙黒		
441	115-02	土師器台付皿	検出		口:22.7 高:6.8 底:11.0	外:ナゲ・オサエ、貼付けナゲ 内:ナゲ	やや密	並	灰白	口:1/3 台:2/3	
442	083-02	土師器高杯	SR115		口:14.1	ナゲ→ミガキ	密	並	橙	口:1/9	
443	098-04	土師器高杯	検出		口:18.0	外:ヨコナゲ、ナゲ 内:ミガキ	やや密	並	橙	小片	
444	099-05	土師器高杯	SR01		底:11.0	ナゲ	やや密	並	灰白 橙	底:ほぼ完 存	
445	103-01	土師器鉢	検出		口:33.0	ナゲ	やや密	並	橙 浅黄橙	口:1/6	
446	174-02	土師器手づくね土器	表土層削		口:6.9 高:5.5	ナゲ・オサエ→ヨコナゲ	やや密	良	にぶい黄橙 浅黄橙	ほぼ完存	
447	085-03	磁輪陶器鉢	調査区東壁		小片	ロクロナゲ→施軸	やや粗	並	緑色・茶色	口:僅か	二彩あるいは三彩陶器か。
448	085-06	土師器土罐	SR115		長:5.45 高:2.2	ナゲ	やや密	並	にぶい黄橙	ほぼ完存	
449	085-07	土師器土罐	SR115		長:2.9 高:3.4	ナゲ	やや密	並	にぶい黄橙	ほぼ完存	
450	049-05	須恵器把手	三ツ井	旧水路	径:3.0	ナゲ・ケズリ	密	並	灰白	把手部分のみ完存	
451	174-01	土師器紡織車	検出		径:5.6 高:4.0	オサエ・ナゲ	やや密	良	橙→黒焼	ほぼ完存	
452	030-02	軒平瓦	三ツ井	旧水路	瓦当	ナゲ→オサエ 布目痕あり	やや粗	良	灰	瓦当部破片	願内唐草文
453	006-02	須恵器三豆壺	検出		高:7.5	(体部)ロクロナゲ (脚部)ヘラケズリ→焼削	やや密	良	灰白	脚部ほぼ完存	獣脚
454	049-01	土師器皿	SR55	東西TR	口:8.5 高:2.1	ロクロナゲ→糸切り	やや粗	並	灰白	完存	
455	048-07	土師器皿	SR55	東西TR	口:8.7 高:2.45	ロクロナゲ→糸切り	やや粗	並	灰白	口:5/6	
456	086-06	ロクロ土師器皿	SR55		口:9.8	ロクロナゲ、ナゲ→糸切り	密	並	灰褐 黄橙	ほぼ完存	
457	086-04	ロクロ土師器皿	調査区壁		口:10.0	ロクロナゲ、ナゲ・オサエ→糸切り	密	並	淡黄	口:7/8 底:完存	
458	086-01	ロクロ土師器皿	SR55		口:9.8	ロクロナゲ、ナゲ→糸切り	密	並	灰褐 灰黄	口:7/8 底:完存	
459	012-03	土師器皿	検出		口:11.7 高:2.9	ナゲ・オサエ→ヨコナゲ	密	並	液橙・浅黄 橙	口:5/6	
460	012-02	土師器皿	検出		口:13.1 高:2.9	ナゲ・オサエ→ヨコナゲ	やや粗	並	浅黄橙・褐 灰	口:5/6	
461	012-01	土師器皿	検出		口:13.4 高:2.7	ナゲ・オサエ→ヨコナゲ	やや粗	並	橙	口:7/8	
462	012-04	ロクロ土師器皿	検出		口:12.9 高:2.3	ロクロナゲ→糸切り	密	良	淡黄	口:7/8	
463	083-05	ロクロ土師器小形壺	検出		口:2.6 底:4.3	ヨコナゲ、ナゲ 底:糸切り痕	密	並	灰白	口:僅か 底:1/2	
464	012-06	黒色土器瓶	検出		口:16.4 高:4.9	オサエ・ナゲ→内面ミガキ 高台貼付けナゲ	やや粗	並	褐灰・にぶい 橙・黒	口:2/5 台:3/4	
465	090-04	黒色土器瓶	検出		口:14.8	外:ミガキ 内:贈文風ミガキ	やや粗	並	外:灰白 内:贈灰	口:完存 台:4/5	
466	090-01	ロクロ土師器碗	検出		口:13.9 台:5.2	ロクロナゲ→糸切り	やや粗	並	浅黄橙	口:3/4 底:完存	
467	103-04	土師器壺	検出		口:17.1	外:ヨコナゲ→ハケメ 内:ヨコナゲ、ケズリ	やや密	並	灰白 浅黄橙	口:1/5	
468	008-01	土師器壺	検出		口:12.8	ナゲ・ハケメ→ヨコナゲ 磨滅激しく調整の詳細不明	やや粗	並	淡橙	口:1/3	

第18表 出土遺物観察表④

No.	実測No.	器種	遺構名	取り上げ時の名称	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
469	086-05	土師器 罎	SR55		口:12.0	ナデ・オサエ	密	並	淡黄	小片	
470	087-03	土師器 罎	SR55		口:13.0	ナデ・オサエ	密	並	灰白	口:1/4	
471	013-04	土師器 罎	SR55		口:12.5 高:2.1	オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	並	淡黄	口:3/4	南伊勢系
472	013-03	土師器 罎	SR55		口:12.3 高:2.6	オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	並	淡黄	ほぼ完存	南伊勢系
473	013-01	陶器 甕	SR55		口:14.4 高:5.3	ロクロナデ→糸切り→貼付高台	やや粗	良	灰白	口:3/4	山茶碗
474	013-02	土師器 罎	SR55		口:28.4	ナデ・ハケメ→ヨコナデ	粗	並	浅黄緑	口:3/8	
475	089-01	土師器 罎	SR55		口:27.0	ナデ・オサエ→ハケメ	やや粗	並	明褐色 灰褐色	口:1/4	外面に煤が付着
476	003-01	土師器 罎	SD18		口:23.6	ナデ・ハケメ→ヨコナデ・ケズリ	粗	並	浅黄緑	口:3/4	南伊勢系 外面に煤付着
477	034-02	土師器 罎	SD93		口:13.3 高:2.8	ナデ・オサエ	やや密	並	浅黄緑	ほぼ完存	
478	034-05	陶器 罎	SD93		口:8.6 高:1.6	ロクロナデ→糸切り	密	良	灰白	ほぼ完存	山皿
479	034-06	陶器 罎	SD93		口:7.6 高:1.5	ロクロナデ→糸切り	やや密	良	灰白	完存	山皿 内面に自然釉
480	035-02	陶器 甕	SD93		口:14.8 高:5.05	ロクロナデ→糸切り→高台貼付	やや密	並	灰白	口:1/3 底:完存	山茶碗 内面に自然釉
481	089-04	土師器 罎	SE 128		小片	ヨコナデ	やや粗	並	灰白	小片	外面に煤が付着
482	086-02	土師器 罎	SD 126		口:7.5	ナデ・オサエ	やや密	並	浅黄緑	口:3/4	
483	087-01	土師器 罎	SD 126		小片	ナデ・オサエ	密	並	淡黄	小片	
484	091-02	陶器 甕	SD 126		台:7.1	ロクロナデ→糸切り→高台貼付け	やや密	並	灰白	台:2/3	山茶碗 器型型
485	005-02	土師器 罎	SK2		口:18.2	ナデ・ハケメ→ヨコナデ	やや密	並	浅黄緑	口:1/6	南伊勢系 外面に煤付着
486	052-06	土師器 罎	SK79		口:35.1	ナデ・ハケメ→ヨコナデ	やや密	並	浅黄緑	口:1/4	南伊勢系 外面に煤付着
487	087-05	土師器 罎	SD29		口:11.0	ナデ・オサエ	密	並	明褐色 赤褐色	口:2/7	
488	087-04	土師器 罎	SD29		口:11.0	ナデ・オサエ	密	並	褐色 に赤い黄緑	口:3/4	
489	004-01	土師器 罎	SK33		口:11.5 高:2.6	オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	並	灰白	口:5/6	南伊勢系
490	004-04	土師器 罎	SK33		口:11.5 高:2.5	オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	並	灰白	完存	南伊勢系 焼成後穿孔あり
491	012-05	土師器 罎	SK33		口:11.7 高:2.1	ナデ・オサエ→ヨコナデ	密	並	灰白	口:7/8	
492	004-05	陶器 甕	SK33		口:14.0 高:6.5	ロクロナデ→糸切り	やや粗	並	灰白	1/2	山茶碗 内面に煤多く付着
493	051-01	土師器 小皿	SD81		口:7.3 高:1.4	ナデ	やや密	並	灰白	口:7/8	南伊勢系
494	051-02	土師器 小皿	SD81		口:7.7 高:1.2	ナデ	やや密	並	灰白	口:3/4	南伊勢系
495	051-03	土師器 小皿	SD81		口:7.5 高:0.8	ナデ	やや密	並	淡黄	ほぼ完存	南伊勢系
496	051-04	土師器 小皿	SD81		口:7.9 高:1.0	ナデ	やや密	並	灰白	口:1/2	南伊勢系
497	051-07	土師器 小皿	SD81		口:7.4 高:0.8	ナデ	やや密	並	淡黄	口:1/2	南伊勢系
498	050-04	土師器 罎	SD81		口:9.7	ナデ	密	並	浅黄緑	口:3/4	南伊勢系 ゆがみ大
499	050-03	土師器 罎	SD81		口:10.6 高:2.3	ナデ	密	並	浅黄緑	口:1/3	南伊勢系 ゆがみ大
500	050-02	土師器 罎	SD81		口:10.8 高:2.3	ナデ	密	並	浅黄緑	口:7/8	南伊勢系
501	050-05	土師器 罎	SD81		口:10.6 高:2.4	ナデ	密	並	灰白	口:1/2	南伊勢系
502	050-06	土師器 罎	SD81		口:10.2 高:2.5	ナデ	やや密	並	灰白	口:1/2	南伊勢系 ゆがみ大
503	034-03	土師器 罎	SD81		口:10.5 高:2.8	ナデ	やや密	並	灰白	完存	
504	050-08	土師器 罎	SD81		口:9.6 高:2.2	ナデ	密	並	灰白	口:1/4	南伊勢系

第19表 出土遺物観察表09

No	実測No.	器 種	遺構名	取り 上げ 時の 名称	計測値 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
505	052-01	土師器 皿	SD81		口:10.5 底:3.0	ナデ・オサエ	粗	並	淡黄	口:5/6	南伊勢系
506	052-02	土師器 皿	SD81		口:10.2 底:3.0	ナデ・オサエ	やや粗	並	淡黄	口:5/6	南伊勢系
507	052-03	土師器 皿	SD81		口:11.2 底:2.5	ナデ・オサエ	粗	並	淡黄	口:1/2	南伊勢系
508	051-05	土師器 皿	SD81		口:7.1 底:1.8	ナデ・オサエ	密	並	淡黄橙	口:1/4	南伊勢系
509	051-06	土師器 皿	SD81		口:7.5 底:2.0	ナデ・オサエ	密	並	淡黄橙	口:1/4	南伊勢系
510	052-05	土師器 皿	SE 108		口:11.2 底:2.9	ナデ・オサエ	やや密	並	灰白	口:1/3	南伊勢系
511	052-04	土師器 皿	SE 108		口:11.4 底:2.5	ナデ・オサエ	やや密	並	淡黄橙	完存	南伊勢系
512	087-02	土師器 皿	SD26		口:12.0	ナデ・オサエ	密	並	灰白	小片	
513	086-03	土師器 皿	SD 126		口:10.0	ナデ・オサエ	密	並	淡黄	口:3/8	
514	091-04	陶器碗	SD26		口:15.3 底:6.0	ロクロナデー・糸切り→高台貼付け	やや粗	良	灰白	口:3/8 底:2/3	山茶碗 尾瀬型
515	090-05	陶器碗	SD26		口:17.0 底:5.1	ロクロナデー→ロクロズリ→施軸	密	良	灰白 淡黄(軸)	口:僅か 底:完存	古瀬戸後期Ⅲ
516	088-01	土師器 羽釜	SD26		口:36.8	ナデ・オサエ→ハケメ	やや粗	並	淡黄	口:1/4	
517	088-02	土師器 羽釜	SD26		口:25.2	ナデ・オサエ→ハケメ	やや粗	並	淡黄	口:1/4	
518	010-01	土師器 鍋	SD68		口:31.0	ナデ・ハケメ→ヨコナデ	やや粗	並	灰褐・灰白	口:1/11	南伊勢系
519	043-05	土師器 皿	e18 D112		口:9.6 底:1.7	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	並	にぶい黄橙	ほぼ完存	
520	043-04	土師器 皿	e18 D112		口:9.7 底:1.7	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	並	にぶい黄橙	完存	
521	171-01	土師器 皿	b27 D111		口:7.6 底:2.2	ナデ・オサエ	密	良	淡黄橙	ほぼ完存	
522	041-01	土師器 皿	d13 D111		口:12.4 底:3.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	並	淡黄橙	口:1/2	
523	089-02	土師器 羽釜	B277 D117		小片	ヨコナデー→ハケメ	やや密	並	淡黄	小片	外面に煤が付着
524	035-01	練物陶 器碗	三郎井	旧用 水路	底:7.0	ロクロナデー→糸切り→高台貼付 →施軸	密	良	緑	底:1/3	
525	035-03	陶器 碗	三郎井	旧用 水路	口:14.5 底:5.9	ロクロナデー→糸切り→高台貼付	やや密	良	灰白	口:1/3 底:完存	山茶碗 底部に墨書有り 「ハ、ヤク」
526	045-03	瓦	三郎井	旧用 水路	径:6.6 高:106.1	ワツプル風格子タタキ、春日裏	やや粗	並	灰 灰白		加工内盤
527	043-02	陶器 罐	三郎井	旧用 水路	口:1/18	ロクロナデー→指オサエ・板ナデ	やや粗	並	灰白	口:1/7	肩部にヘラ記号
528	009-01	陶器 皿	検出		口:8.0 底:1.5	ロクロナデー→糸切り	やや密	良	灰白 灰オリーブ	口:1/2 底:完存	山嵐 然焼有り
529	170-02	陶器 皿	検出		口:7.8 底:1.6	ロクロナデー→糸切り	並	良	灰白	口:3/5	
530	090-03	陶器皿	検出		口:8.3	ロクロナデー→糸切り	やや粗	良	灰白	ほぼ完存	山嵐
531	044-05	陶器 碗	表土 掘削		底:6.2	ロクロナデー→糸切り→高台貼付	やや粗	並	灰白	底:1/3	山茶碗 底部に墨書有り
532	031-01	陶器碗	検出		口:15.1 底:6.8	ロクロナデー→糸切り→高台貼付け	やや粗	良	灰白	口:3/4 底:完存	山茶碗 尾瀬型
533	041-03	陶器 碗	表土 掘削		口:15.6 底:5.0	ロクロナデー→糸切り→高台貼付	やや粗	並	淡黄	口:1/6	山茶碗
534	042-01	陶器 碗	表土 掘削		口:16.0 底:5.2	ロクロナデー→糸切り→高台貼付	やや粗	良	灰白	口:1/4	山茶碗
535	043-03	土師器 鍋	表土 掘削		口:25.2	ナデー→ケズリ 風化が激しく調整不明瞭	やや粗	並	にぶい黄橙	口:1/5	外面に煤が付着
536	009-03	土師器 鍋	検出		口:31.0	ナデー→ヨコナデ	やや粗	並	灰白・灰黄 褐	口:1/5	南伊勢系
537	002-01	土師器 鍋	検出		口:30.2 底:13.7	ナデ・ハケメ→ヨコナデ・ケズリ	密	やや 不良	にぶい褐	ほぼ完在	南伊勢系 外面に煤が付着
538	183-01	一石 五輪塔	三郎井	旧用 水路	幅:15.0 奥:14.7 高:49.0 重:15.2	砂岩を加工して、一石で五輪塔を造り出す。	—	—	淡黄褐	ほぼ完存	井開石

第20表 出土遺物観察表④

No.	実測No.	器種	遺構名	取り上げ時の名称	計測値 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
539	181-01	一石五輪塔	三基井	旧用水路	幅:18.5 奥:14.5 高:49.5 重:20.5	砂岩を加工して、一石で五輪塔を造り出す。538)に比べやや横に広い。	—	—	淡黄褐	ほぼ完存	井関石
540	179-01	一石五輪塔	三基井	旧用水路	幅:14.0 奥:14.5 高:50.0 重:12.7	砂岩を加工して、一石で五輪塔を造り出す。空・火・水輪は、やや横く。地輪は、下半部を欠く。	—	—	淡黄褐	地輪を欠く	井関石
541	201-01	五輪塔 水・風輪	三基井	旧用水路	幅:16.4 奥:14.9 高:32.1 重:13.9	砂岩を加工して水・地輪を造り出す。水輪上部に突起があり、火輪と組み合わせる。	—	—	淡黄褐	ほぼ完存	井関石
542	189-01	一石五輪塔	三基井	旧用水路	幅:19.0 奥:18.3 高:30.2 重:15.3	砂岩を加工して、一石で五輪塔を造り出す。空・風輪を欠損。風化激しい。	—	—	淡黄褐	空・風輪を欠く。	井関石
543	180-01	一石五輪塔	三基井	旧用水路	幅:13.6 奥:13.0 高:28.8 重:8.4	砂岩を加工して、一石で五輪塔を造り出す。空・風輪を欠損。風化激しい。	—	—	褐灰	空・風輪を欠く。	井関石
544	192-01	五輪塔 空・風・火輪	三基井	旧用水路	幅:20.8 奥:21.2 高:33.7 重:12.9	砂岩を加工して、空・風・火輪を一体で形成。別の水・地輪と組み合わせる。	—	—	淡黄褐	一部を欠く	井関石
545	194-01	五輪塔 空・風輪	三基井	旧用水路	径:13.1 高:16.3 重:3.2	砂岩を加工して、空・風輪を一体で形成。	—	—	淡黄褐	一部を欠く	井関石
546	199-02	五輪塔 火輪	三基井	旧用水路	幅:18.1 奥:13.8 高:13.3 重:5.0	砂岩を加工して、火輪を形成。空・風・火輪で一体の可能性有り。	—	—	淡黄褐	一部を欠く	井関石
547	193-01	宝篋印塔(笠)	三基井	旧用水路	幅:23.5 奥:25.5 高:15.8 重:10.7	砂岩を加工して笠部を形成。上部には、差込用の穴を穿つ。	—	—	淡黄褐	一部を欠く	井関石
548	200-01	五輪塔 火輪	三基井	旧用水路	幅:21.5 奥:21.2 高:12.1 重:5.7	砂岩を加工して形成。上部には、差込用の穴を穿つ。	—	—	淡黄褐	一部を欠く	井関石
549	199-01	五輪塔 水輪	三基井	旧用水路	径:22.5 高:18.0 重:10.8	砂岩を加工して形成。最大径の部分に梵字「水」を刻む。	—	—	淡黄褐	ほぼ完存	井関石
550	195-02	五輪塔 水輪	三基井	旧用水路	径:23.0 高:19.6 重:18.1	砂岩を加工して形成。最大径の部分に梵字「水」を刻む。	—	—	淡黄褐	ほぼ完存	井関石
551	195-02	五輪塔 水輪	三基井	旧用水路	径:20.1 高:17.0 重:7.7	砂岩を加工して形成。上部に、接続用の突起部あり。	—	—	淡黄褐	ほぼ完存	井関石
552	194-02	五輪塔 地輪	三基井	旧用水路	幅:16.6 奥:15.5 高:11.1 重:11.5	砂岩を加工して形成。上部は、水輪を載せるため大きく窪める。	—	—	淡黄褐	一部を欠く	井関石
553	195-01	五輪塔 地輪	三基井	旧用水路	幅:20.9 奥:19.7 高:13.6 重:12.5	砂岩を加工して形成。上部は、水輪を載せるための窪みをもつ。	—	—	淡黄褐	一部を欠く	井関石
554	197-01	五輪塔 地輪	三基井	旧用水路	径:27.9 高:24.3	花崗岩を加工する。上下に他の部分と接続するための突起部をもつ。	—	—	灰白	ほぼ完存	花崗岩
555	148-03	小形磨製石斧	SR01	旧成路	幅:2.1 厚:0.9 径:4.2	長方形の石材を磨いて作製。刃部は表裏両面を研磨する。刃部以外の端面は角を落としてある。	—	—	黒灰	一部欠損	
556	148-01	滑石製防輪車	SR01	下層TR	径:4.2 高:1.25 穴:0.7	断面は台形状。中心に径0.7cmの穴を1個穿つ。外面には、装飾なし。使用時の溝が認められる。	—	—	暗緑灰	完存	
557	148-02	石製双孔円盤	SR01	下層TR	径:3.4 厚:0.4	薄く長円形の石製円盤の長軸上に、約1.4cm間隔で小穴を2個穿つ。	—	—	緑灰	完存	
558	148-04	曜文式鉄鏝	He18 pit1		長:8.5 幅:3.5 厚:0.7	両端の先端部を有する。基部は錆跡れが激しいが、僅かに木質を残すか。	—	—	—	錆が多いが、ほぼ完存。	

第21表 出土遺物観察表(7)

4 調査のまとめと課題

今回の調査では、飛鳥時代、平安時代末期～戦国時代および近世の遺構が確認された。また、下層には旧河道があり、遺物は縄文時代晩期～近世まで幅広いものが見られた。

ここでは、今回の調査で確認できたこと、それによって発生した新たな課題等を述べ、調査のまとめとしたい。

(1) 縄文時代

遺構は確認されていないが、深鉢の破片や石器が出土している。土器はいずれも凸帯文系土器で、晩期後半の凸帯文系土器・馬見塚式に並行するものであると考えられる。調査地の南西約1.5kmに所在する蛇亀橋遺跡¹で、同時期の遺物が出土している。今回の調査地は、蛇亀橋遺跡からみれば駒返川の下流であり、同時期の遺物が確認されても位置的におかしくない。これまでに指摘されているように、縄文時代晩期末には生活立地の指向にも変化が見られるようになり、県内の代表的な河川である宮川・櫛田川の流域でも中・下流での遺跡数の増加が指摘されている。今回、縄文時代晩期の土器が出土したことから、おそらく調査地の所在する雲出川・中村川流域も同様の傾向であり、人々の低地部への積極的な進出を裏付ける資料になるものと考えられる。

なお、出土土器の磨滅はそれほど激しくないことから、調査区付近に当該時期の遺構が存在する可能性もある。(木野本和之)

(2) 弥生時代

この時期の遺物は、旧河道から出土した。ほとんどが破片で、鉢・壺・甕・高杯などさまざまな種類のもが含まれていた。それ以外には、小型磨製石斧がある。土器のほとんどが、畿内Ⅳ様式の範疇に含まれるものである。出土した遺物の中には、在地の土器の他に当時の畿内の土器の影響を色濃く受けたものが多く見られる。これは、当地と畿内の交流を考える上で貴重な資料になるものと思う。それ以外に注目されるのは、弥生後期に滋賀県や伊賀地域で普遍的に認められる受口状口縁の甕（以下「近江甕」と呼称）と同じ系統と考えられるものがまともに出土していることである。調査地のすぐ西の比高約25mの丘陵上に、天ヶ寺丘陵内遺跡群小谷赤

坂遺跡がある。この遺跡から出土した煮沸用土器の多くが「近江甕」の系統であり、この地域において「近江甕」が一定レベル以上に主体的であったという指摘がなされている²。今回の調査結果は、それをさらに裏付ける結果となった。後述するS字状口縁台付甕（以下「S字甕」）の成立については、東海地方独自の技術的転換を重視するよりも、近江甕との有機的な関連をうえに成立したと解釈することが合理的であるとの指摘がある³。近年、「S字甕」の発生は雲出川流域ではないかという指摘もあり⁴、その意味で調査地の所在する中村川流域についてもあらためて検討する必要がある。

なお、今回の調査では遺構を確認することは出来なかったものの、遺物の出土状況からみて調査地近辺に弥生中期の集落が存在したことは確実である。前述の小谷赤坂遺跡では、今のところ中期の遺構は確認されておらず、この時期の集落は他の位置に求められそうである。最も可能性が高いのは、調査地東側の現・天ヶ寺集落が立地する自然堤防上である。この部分については、第2次調査が予定されており、調査の進展によって弥生中期の集落が確認されることが期待される。(木野本和之)

(3) 古墳時代

a. 弥生時代末から前期の遺物

SR1下層から、当該時期の土器が多数出土している。土器は、赤塚次郎氏の設定した「廻間式」⁵に並行するものがまともに出土している。その中でも特に目を惹くのは「S字甕」で、赤塚氏のいう古い段階のもの（A類）が比較的多く見られることである。県内で、この土器が一定以上の量で出土している遺跡は少ない⁶。調査区出土の「S字甕」の形態・調整手法・胎土については、肉眼で観察する限りでは、尾張地方で出土するものに極めて近いものであるとの指摘をうけた⁷。近年、胎土の科学的分析が進められ、調査地を含む雲出川流域は「S字甕」の発祥地の有力な候補地として注目を集めるようになった。118のように「S字甕0類」と思われる、古い形態の資料もある⁸。これは、口縁部から台部まで残る良好な資料で、前述の「近江甕」から「S字甕」への移行を考える上で有効な研究材料になるものと考えられる。

また、出土した土器は尾張を中心とする東海地方のものに類似した形態のものが多く見られるが、近畿地方・北陸地方で見られる土器の形態に近いものも見られる。出土量がわずかでくわしくは述べられないが、この地域と東海・近畿等の他地域との交流を考える上で興味深い。

b. 中・後期の遺物

この時期の遺物は、旧河道SR1上層・SR100下層を中心に確認されている。

土器類では、「S字甕」の最終形態である台付甕のほか、長胴甕・丸底甕がまとまって確認された。これらに伴する須恵器は、田辺昭三氏による陶器編年⁷⁾のTK43～TK217型式を中心としており、およそ6世紀末～7世紀初頭頃に位置づけられる。その他にも、円筒埴輪・朝顔型埴輪・形象埴輪の破片が出土しているが、6世紀後半のものと考えられる。おそらく、周辺の後期古墳群から何らかの理由で流出したものと考える。

今回の調査で出土した遺物は、前期・後期にくらべて中期の遺物は少ない。これは、いま一つよくわかっていない雲出川流域の中期の動向と一致する。この時期の周辺の動向を知るためには、さらなる資料の集積が待たれる。

c. 須恵器窯について

覆土埋土から、須恵器窯の窯壁片が出土した。表土・旧河道掘削前時にも、溶着した須恵器片や明らかな焼成不良品の出土が目立った。同じ天花寺丘陵北斜面には瓦窯跡の存在が知られており¹⁰⁾、調査区近辺に須恵器窯が存在した可能性がある。この天花寺丘陵の東斜面は、その有力な候補地に上げられるが、この斜面は天花寺城築城時に大規模な改変を受けていると考えられ、仮に須恵器窯が存在したとしても、その際に破壊された可能性が高い。得られた情報は限られたものであり、推測の域を出るものではない。後述の土器器焼成坑との関連も含め、今後の調査の進展と多方面からの研究の進展を期待する。

d. 集落について

今回の調査では、旧河道以外に古墳時代の遺構は確認されなかった。しかし、旧河道出土の遺物には磨滅がほとんどなく、完形のものも多い。したがって、遺物はそれほど長い距離を流されてきたもので

はなく、調査区のごく近辺に集落が立地していたと考えられる。流路が乱流していたと推測される調査区周辺で、水害を心配すること無く安全に生活するための条件を備えた場所は、隣接する天花寺丘陵上である。しかし、天花寺丘陵上は古墳時代には墓域として機能しており、これまでの調査でも当該時期の集落は確認されておらず、立地を想定するのは難しい。調査区の東には、天花寺集落が立地する。現在は、周辺からわずかに高いという程度の微高地である。しかし、今回の調査では現地表面から約2～3mで旧河道を確認している。このことは、流路が錯綜する不安定な場所とはいえ、当時の微高地が比較的安定した地盤であり、居住に適した場所であったことを物語っている。この一部については、引き続き実施される予定の第2次調査の対象地となっており、当該時期の集落跡の確認が期待される。

e. 水辺の祭祀について

砂を主とする埋土のため、残念ながら木製品の出土はなかったが、SR1からは意図的に穿孔された土器器小型丸底壺・高杯や須恵器杯身などが出土している。また、双孔円板など石製品の出土もある。これらは、時期的な差はあるものの祭祀関連遺物として考えることができる。該当する遺構の確認はできなかったが、SR1において、水辺の祭祀が継続的に行われていた可能性がある。(木野本和之)

(4) 飛鳥・奈良・平安時代

a. 遺物について

この時期の遺物は、旧河道SR1上層・SR100上層を中心に確認されている。

出土遺物のなかには、円面硯片・三足壺の脚と考えられる獣脚などの須恵器のほかに、緑釉陶器の破片・二彩の可能性のある鉢の破片など一般集落跡には見られないような遺物が出土している。調査地の周辺には天花寺庵寺¹¹⁾・一志庵寺¹²⁾・中谷庵寺¹³⁾の3寺院が極めて近距離に立地する。中谷庵寺にはほど近い同一丘陵上には、筒野東若跡とされるL字形の土塁を伴う平坦地があり、郡衙などの施設の可能性も指摘されている¹⁴⁾。天花寺庵寺および中谷庵寺からは、重圓・重廓文軒瓦が出土している。このような事実から、古代一志郡衙想定地として、調査地周辺が注目されるようになってきた。今回の調査区から

の遺物は旧河道からの出土で、それをもとに多くを語ることは出来ないが、すくなくとも調査地周辺に郡衙などの施設が存在したという状況証拠の一端になるものと考えられる。(木野本和之)

b. 土師器焼成坑について

土師器焼成坑はB地区中央付近に集中して8基(可能性があるものを含めると9基)、B地区北端で1基を確認した。今回確認されたものは、総じて強い被熱痕が見られなかった。そのため、平面観察では床面が確認しづらく、土層断面観察によって判断することが多かった。これは、遺構が旧河道の埋土上に構築されたことに関係するものと思われる。これまで県内で確認されている土師器焼成坑は、台地上などの粘質性土壌を主とする地域に多い。逆にそのような地域は、土師器製作に必要な粘土を産出する地域でもある。このような土壌は、熱を受けてかなり強く赤変し硬く焼け締まる。それに対し当遺跡の立地する砂質土壌では、同様の温度で焼成したとしてもそれほど硬く焼け締まらなかったのではないかと考えられる。また、焼成回数が少ないこともその理由であろう。確認された土師器焼成坑群では、前述のとおりS F 96で2回の焼成が確認された以外は、ほぼ1回の焼成のみであると思われる。

規模は、長辺が1~2m、短辺が0.7~1.2mの範囲内に収まり、これまでに確認されている他のものと比較して小型であるといえよう。このことは、1回に焼成する土器数・性格を表しているものと思われる。過去に実施された焼成実験では、最小規模でも35個程の土師器が焼成されたとされる¹⁵。このことから、これらの土師器焼成坑群で焼成された土師器は、大量生産を目的とするものではなく、どちらかといえば自給自足の性格を持ったものであるといえるだろう。後述するが、遺構から出土した土器が杯・甕などの日常的なものであることもその傍証となるのではないかと。また、プランは奥壁側が広く前壁側が窄まる二等辺三角形形状を呈する。このプランは、窯跡研究会が提示している、「遺構特徴から見た土師器焼成坑の分類」のうちA類に相当し¹⁶、熱効率が高い形状であると立証されている¹⁷。

最後に、特殊な構造を持つ焼成坑S F 120について若干の考察を加えたい。この焼成坑は、奥壁にピッ

トを付属する特殊な構造をもつ。平面観察では、奥壁はピットの部分も含めた全体が被熱しており、ピットを焼成坑を切っているように見える。しかし、奥壁部分を前壁側から観察すると、ピットが接する部分だけ被熱痕がなく、不整長円形に炭化物・焼土粒が詰まる明黄褐色色が確認できた。しかし、奥壁の検出面から約2cm下がった範囲全面に被熱痕が存在した。もちろん奥壁は強い熱を受けているが、ピットの付く部分は熱を受けていない。このことから、ピットはS F 120を切っていないといえる。したがって、焼成時この部分は開いていたのである。ピットの性格については、堅穴住居に見られるような煙道もしくは煙管状窯の焼成部が考えられる。煙管状窯は、平安時代の焼成遺構でキセル窯・ダルマ窯と呼ばれる。斜面を半地下下に掘削し龍形の燃焼部(焚口部)と円筒形の焼成部を構築するもので、地上部分に煙出しの天井部がつくられる。焼成する土器は、焼成部に置く¹⁸。煙管状窯の構造をS F 120のピットに当てはめて考えると、長方形の土坑部分で燃料を焼き、ピット部分に焼成する土器を置くこととなるが、この部分は北に向かって傾斜し、しかも焼成する土器を置くスペースも持たない。したがって、煙管状窯の焼成部としての性格は考えられない。では、堅穴住居に見られるような煙道としての性格は考えられないだろうか。煙道は、その名の通り排気のための施設である。しかし、焼成坑に排気が必要であろうか。上村安生氏によると、焼成効果は温度が高くなるよりは、一定の温度と時間が維持されることにより発揮されるという¹⁹。このことから、S F 120に付属するピットは温度を一定に保つため、あるいは調節するための調節孔と考えることはできないだろうか。しかし、他に同様の事例がなく情報量が限定されている状況であり、多くを語ることはできない。この考察は、あくまでも仮説であることを断っておきたい。今後の調査による類例の増加と、多方面からの研究の進展を待ちたい。

わずかに9基ではあるが、当遺跡のような河川堆積土上にも焼成坑が構築されることが判明した。残念ながら当該時期の集落は確認できなかったが、おそらくは周辺に立地した集落の自給自足のため操業された焼成坑群であろう。(川畑由紀子)

(5) 中世の遺構について

今回の調査によって、中世集落の一部を確認することが出来た。確認されたピットの多数は、掘立柱建物の柱穴であることは間違いないが、残念ながら建物としてまとめることはできなかった。しかし、東西・南北方向に直線的に伸びる複数の溝・井戸の存在は、集落が存在したことを物語っている。丘陵に近い部分に遺構が集中し、東寄りでは旧河道S R 55以外に遺構が確認されなかったことから、集落の中心はより丘陵麓に近い部分に求められよう。

ここで考えておかなければならないのは、この中世集落と、すぐ西の丘陵上に所在する中世墓および天花寺城との関係である。平成7年度から、当調査区の西に隣接する天花寺丘陵内遺跡群の調査が実施されている²⁰。これまでの調査で、丘陵東端部に13世紀代～16世紀代に継続して集団墓地が造営されたことが判明している。今回、三郷井から大量に出土した五輪塔類についても、この集団墓地に関連するものであることはほぼ間違いない。

天花寺城に関しては、築城がどの時点まで遡るかは判然としなない。しかし、城と中世墓地とが時期的に重なるように造営されていたということは、調査結果から明らかである²¹。今回確認した集落も、13世紀後半～15世紀中頃に比定できるものであり、その存続は集団墓地と時期的に並行している。また、確認された遺構にはS D81のように堀切状の大規模なものがあり、天花寺城に関連する遺構の可能性もある。したがって、今回確認された集落・集団墓地・天花寺城は、それぞれが有機的な関わりをもっており、その関わりの中で評価すべき性格のものであると考えられる。(木野本和之)

(6) 旧河道について

最後に、下層で確認された旧河道について述べることにする。

調査区周辺は、地形図・土地条件図・航空写真にも河道の存在を示す部分が確認でき、中世以前には中村川・駒返川が乱流していたものと推測される。天花寺集落内にも、微高地を分断する旧河道が確認できる(図版19を参照)。

調査で確認した旧河道は、何度も洪水を繰り返していたと考えられ、土層断面観察でも厚い砂礫の

堆積を確認した。調査当時、駒返川の旧河道を想定していたが、その規模から中村川の旧河道であると考えた方が妥当かもしれない。古墳前期までは主に丘陵寄りを流れていた旧河道は、埋没しながら徐々にその流路を東に移し、中世後期までにはごく小規模なものとなり、近世には三郷井のルートとして利用されたものと推測される。旧河道は、調査区北端部でその向きを大きく東に変えた後、現在の中村川の方向に流れる。圃場整備事業前の地形にも、中村川に向かって緩やかに落ち込む地形が確認される。一部には、天花寺丘陵の麓を北流し堀田遺跡²²の方向に流れる小規模なルートもあったようであるが、東流するルートを本流とする方が妥当であろう。旧河道がこのルートをとれば、天花寺庵寺のすぐ南を流れていたことになる。

ここで考えておきたいのは、天花寺庵寺への瓦供給ルートについてである。天花寺庵寺への瓦の供給元は、丘陵北斜面に所在する天花寺瓦窯跡であると推測されている。この瓦窯跡については、現在のところ調査が行われておらず、規模等の詳細は不明である。しかし、寺院建築には大量の瓦が必要で、他からの補給も考えに入れる必要がある。ここで考えておきたいのは、中村川沿いの辻垣内瓦窯跡群²³の存在である。仮に、天花寺庵寺の瓦が辻垣内瓦窯跡群の物であるとすれば、中村川の水運を利用して寺の近くまで容易に瓦を運ぶことが可能であったと考えられる。今回は旧河道のごく一部を調査したに過ぎず、天花寺瓦窯跡の調査も行われていないため、ここでの記述は、あくまでも仮説であることを断っておく。今後の調査による資料の増加と多方面からの研究の進展を待ちたい。(木野本和之)

(7) おわりに

以上、天花寺北瀬古遺跡の発掘調査によって得られた成果と今後の課題について述べてきた。

調査の結果、調査地には少なくとも縄文晩期以前から中世後期にかけての旧河道が存在し、徐々に埋没していったことが判明した。近世には、この旧河道は三郷井に姿を変え近郷の水田を潤し、圃場整備後の現在もその機能を果たしつづけている。そのため、調査地に本格的な集落が営まれ始めたのは、ようやく基盤の安定した中世以後のことである。

丘陵上の天花寺丘陵内遺跡群小谷赤坂遺跡では、弥生中期後葉から～後期前葉頃に営まれた集落が確認されている。高所に営まれた集落といえは「高地性集落」が思い起こされ、「倭国大乱」と関連づけられることが多々ある。しかし、この場合は低地での自然災害（この場合は、特に水害）を避けるため安全な丘陵上に集落を形成したと考えた方が妥当であろう。また、同地区の堅穴住居跡から体部に構造船を描いたと考えられる土器が出土している¹¹。丘

陵上の遺構から船の絵が見つかるという一見奇妙な状況も、当時の丘陵周辺の環境を考えるとおのずと理解することができる。洪水の度にルートを変える流路が複雑に入り組んだ状況下では、我々が想像する以上に船を利用した交通が盛んだっただろう。したがって、小谷赤坂のムラの人々にとっては、麓の川を行き来する船は意外に身近な存在であったのではないだろうか。（木野本和之）

(註)

- 1 新田洋「蛇亀橋遺跡」（『昭和56年度県営園場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1982）
- 2 伊藤裕偉「天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告」（三重県埋蔵文化財センター 1996）
- 3 伊藤裕偉「第四章 雲出川流域」（伊藤久嗣編著『日本の古代遺跡52三重』保育社 1996）
- 4 S字甕胎土研究会「S字甕の混和材を考える」（『考古学フォーラム』9 考古学フォーラム 1998）
- 5 赤塚次郎「廻間式土器」、「土器・土器群の形成」（『廻間遺跡』朝愛知県埋蔵文化財センター 1990）
- 6 例えば、松阪市粥鍋遺跡など。前川嘉宏『粥鍋遺跡発掘調査報告』（松阪市教育委員会 1987）
- 7 原田幹氏のご教示による。
- 8 「S字甕0類」とは、S字甕と受口系甕の中間的・過渡的状況をしめすものとして、赤塚次郎氏によって設定されたもので、いわゆる「初現的なS字甕」とされる。松阪市阿形遺跡S D103出土遺物にまとまった資料がある（上村安生氏のご教示）。
- 9 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- 10 『嬉野町遺跡地図』（嬉野町教育委員会 1989）
- 11 山田猛「天華寺廃寺」（『昭和55年度県営園場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』（三重県教育委員会 1981）
- 12 註10文献と同じ。
- 13 註10文献。『嬉野町の遺跡』（皇學館大学考古学研究会 1989）など。
- 14 註3文献と同じ。
- 15 西村美幸「IV.焼成実験」、森川常厚「土師器焼成坑の疑問」（『研究紀要』第7号三重県埋蔵文化財センター 1998）
- 16 望月精司「第2節 土師器焼成坑の分類」（窯跡研究会編『古代の土師器生産と焼成遺構』真陽社 1997）
- 17 『研究紀要』第7号（三重県埋蔵文化財センター 1998）
- 18 佐藤浩司「第1節 九州北部～西海道豊前国、北九州市地域を中心として」（註16文献と同じ）
- 19 上村安生「III.三重県内の土師器焼成坑について」（註17文献と同じ）
- 20 註2文献及び、原田恵理子『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告II』（三重県埋蔵文化財センター 1997）。
- 21 註2に同じ。
- 22 中川明『堀田遺跡発掘調査概報』（三重県埋蔵文化財センター 1996）
- 23 竹内英昭『辻垣内瓦窯跡群』（嬉野町教育委員会 1988）
- 24 1997年度三重県埋蔵文化財センター調査。原田恵理子「天花寺丘陵内遺跡群発掘調査概要」（三重県埋蔵文化財センター 1998）など。

図 版



天花寺丘陵上から調査区を望む（北から）

図版 1



調査前風景（北から）



表土除去作業



作業風景①



作業風景②



ニッキー・チェンさん現場研修



B地区調査後全景（北から）



B地区SR1（西から）



S R I 下層遺物出土状況① (南から)



S R I 下層遺物出土状況② (西から)



SR1下層遺物出土状況㊦(南から)



SR1上層遺物出土状況㊦(西から)

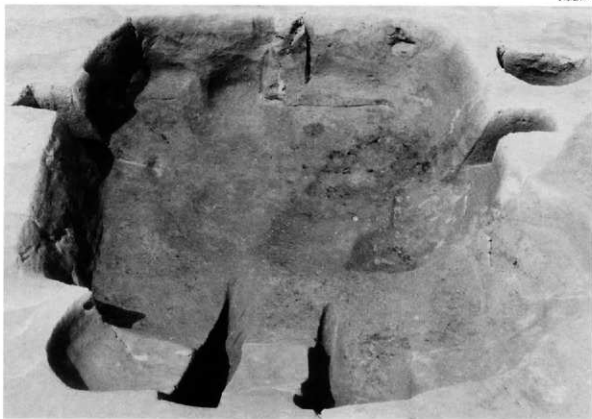
図版 5



S R I 上層遺物出土状況② (西から)



S R I 上層遺物出土状況③ (西から)



S F 96 (南から)



S F 120遺物出土状況 (南から)

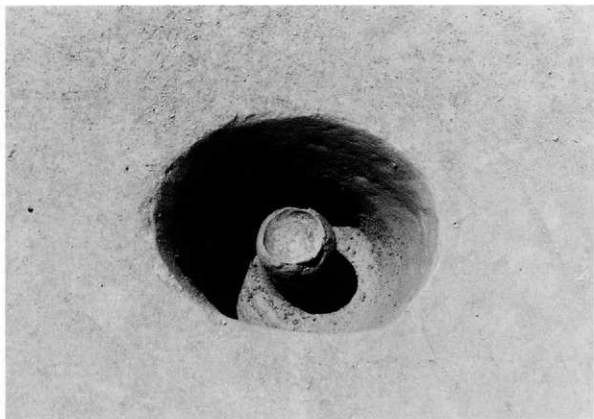


S F 120完掘後 (南から)

図版 7



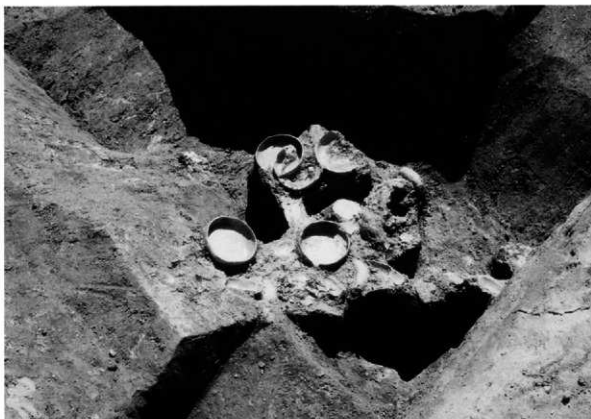
S F 109 (東から)



b 27グリットpit1遺物出土状況 (北から)



S D26 (北から)



S D81遺物出土状況 (北から)

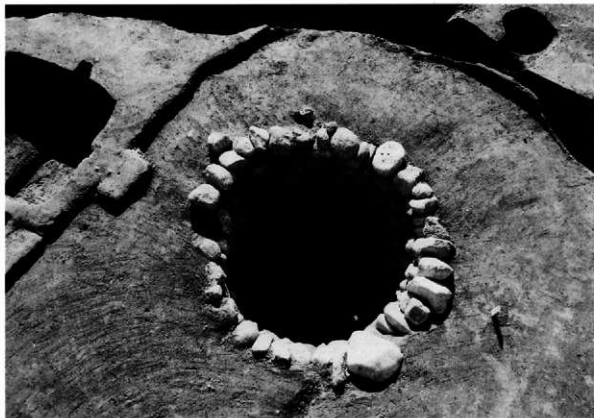
図版 9



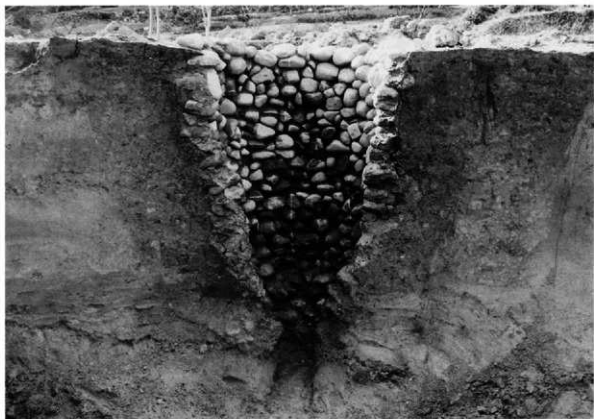
S K 33遺物出土状況（東から）



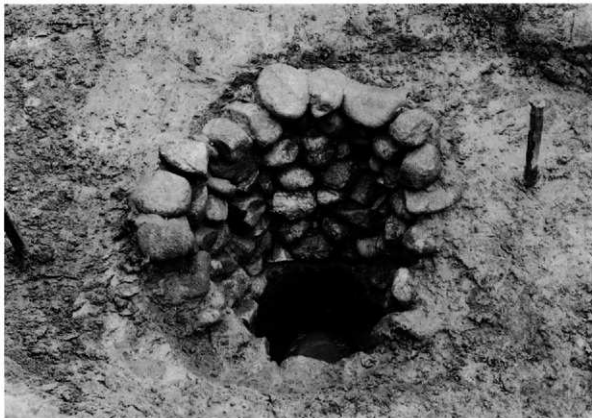
S E 99（南から）



S E 108 (東から)



S E 108 断ち割り後 (東から)



SE 128 (南から)



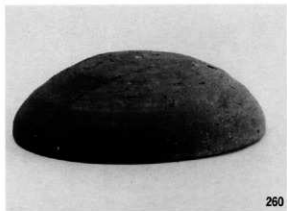
SE 128井筒 (南から)

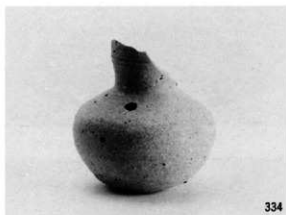


出土遺物①













451



453



454



461



465



476

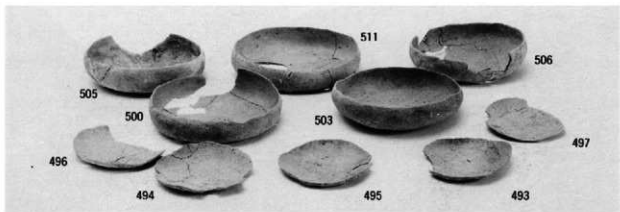


477



519

520



505

500

496

494

511

503

495

506

497

493

出土遺物の



調査地周辺の航空写真(1952年撮影)

IV 薬師寺北裏遺跡

1 遺構

今回の調査区は、遺跡範囲の東端部分に当たる。本遺跡は、中村川左岸の沖積地および標高約15mの低段丘上に立地している。遺跡の中心は低段丘部分と考えられるが、今回の調査区は標高が約14m前後であり、主に沖積地部分に相当すると思われる。調査区の南方には一志橋が架かり、その下を雲出川の支流である中村川が北東方へ向かって流れている。調査区と中村川とは、約100m前後の距離を隔てている。現況の調査区の標高は、中村川の川岸の標高と同程度か、それよりも低くなっている。

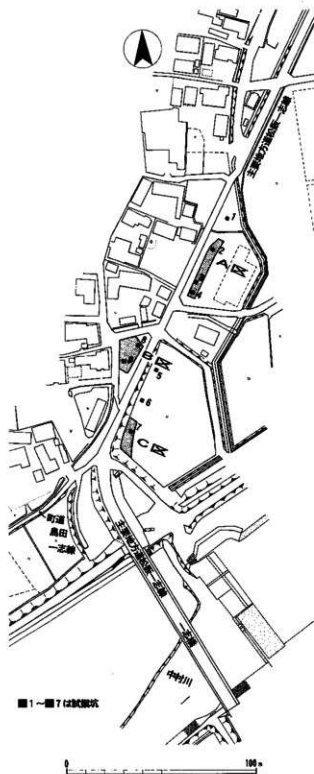
なお、調査区南西の町道島田一志線の部分は、嬉野町教育委員会による発掘調査が行われている¹⁾。

(1) A区

A区の調査前の現況は、ビニールハウス跡地である。中村川からは約100m離れている。南北に長い調査区で、西側から東側にかけてゆるやかな傾斜を成している。遺構検出面は灰褐色砂質土で、表土から約1m下がる。調査区東側の北方隅や東側の南方隅では、灰褐色砂質土層の上に砂層や砂礫層などの堆積が見られる部分もあり、不安定な状況を呈している。

攪乱土坑 調査区南西壁際には、攪乱土坑の一部が認められた。大部分は調査区外へ続いているものと思われるが、検出できた最大長約9.6m、深さ約1mである。埋土下層には、大量の拳大の礫が確認できた。その礫に混じて、須臾器・山茶碗・中世土師器鍋・布目痕や縄目痕の見られる平瓦・近現代瓦のほか近現代磁器などの破片が認められた。これらの石や遺物は、おそらく投棄されたものと思われる。埋土は灰茶色土である。

pit 調査区北西壁近くでpit1とpit2を検出した。ともに根石を持つもので、両ピット間は約2mである。pit1は直径約20cmの平石を、pit2は直径約20cmの川原石を、根石としている。両方とも検出面から根石の上面までの深さが約10cmである。また、両根石とも上面のレベルは標高約12.9mである。調査区外になるが両柱穴の北側および西側に、さらに



第40図 調査区位置図 1 : 2,000

柱穴が規則性を持って続く可能性がある。pit1からは山茶碗底部片1点^①が、pit2からは土師器鍋口縁底部片数点^②が出土した。

(2) B区

B区の調査前の現況は、標高約14mの荒地である。遺構としては小穴数か所を確認したが、出土遺物は少量でいずれも細片であるため、その時期は断定しがたい。なお、B区内の北西方から南東方へ流れる河道3条を確認した。

河道SR1 埋土上層は明灰褐色砂質土で、下層は暗灰褐色砂質土である。幅は約2～3mで、B区の東端での深さは約1mである。下層から複線鋸歯文縁複弁七葉蓮華文軒丸瓦の瓦当部破片^③が、上層からは土師器鍋^④・茶釜^⑤が出土している。

河道SR2 埋土は灰茶色砂質土および暗灰褐色砂質土である。幅は一定せずに約1～4mで、B区の東端での深さは約0.6mである。土層断面の堆積状況からすれば、河道SR1やSR3より新しい流れである。

河道SR3 埋土は暗灰褐色砂質土である。調査区外にも広がるためにその規模は定かでないが、B区の南東端での深さは約0.8mである。

(3) C区

C区の調査前の現況は、標高約13.4mの水田である。遺構は全く検出されなかったが、C区中央部を東流する河道SR4を確認した。なお、C区全般的には耕作土直下に砂および砂質土の堆積が認められる。また、土層断面の堆積状況から、SR4の南側により新しい河道の存在が推定される。C区は河川による堆積作用の影響を直に受けた場所であると思われる。

河道SR4 埋土は淡茶褐色砂質土および灰褐色砂質土である。幅は約3～5mで、C区の東端での深さはおよそ5m強である。検出面の標高は約13.1mで、埋土上層では土師器片が若干認められた。しかし、遺物は細片であるため、河道SR4の時期は断定しがたい。

2 遺物

出土した遺物は整理箱で12.5箱である。うち、A区が4箱、B区が8箱、C区が0.5箱になる。

全体的にみると、細片が多く、弥生時代以前の遺物は見られない。数的に多いのが中世土師器片である。その他、須恵器杯・高杯、灰釉陶器皿、土師器鍋・羽釜・茶釜・皿・甕、山茶碗・山皿、常滑産陶器甕、青磁碗、白磁、加工円盤、土鍾および平瓦、軒丸瓦が出土した。

(1) A区pit2出土遺物

土師器鍋^③は、口縁部推定径31.4cmの中型鍋である。南伊勢系土師器鍋の第4段階に相当するものと考えられ、16世紀頃のものと思われる²。

(2) A区包含層出土遺物

土師器羽釜^⑥は、口縁部が直立気味で立ち上がり口縁端部は内側に向かって折り返されている。折り返し部分の厚さは2mm程度である。鈿部外面にはヨコナデによって面が形成されている。口縁部下方には焼成前穿孔による円孔がみられる。南伊勢系土師器で、16世紀初頭頃のものと思われる²。また、土師器羽釜^①も同時期のものと思われる²。

灰釉陶器皿^⑦は、瀬戸産の端反皿である。口縁部は緩やかに外反し、体部下方はやや丸味を帯びる。底部内面には印花文が押印されている。大塚第1段階頃のものと思われる⁶。

(3) A区試掘坑出土遺物

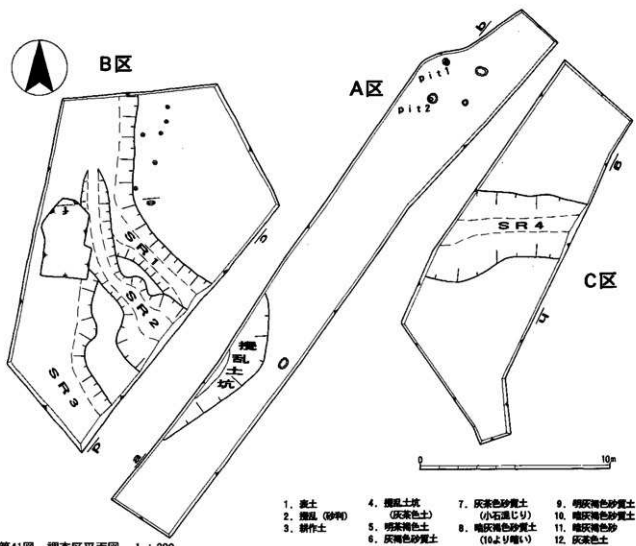
軒丸瓦^⑧は、瓦当部から丸瓦部にかけての破片である。瓦当部と丸瓦部との接合粘土が、丸瓦部でいえば凸面側と凹面側に認められる。瓦当部断面の厚みは最小で6mmと薄い。外区には複線鋸歯文を配す。線鋸歯文を基調とし、各辺左側に平行線を4本加えて施したものである。したがって、右下がりの複線鋸歯文となる。内区は、蓮弁が若干残存しており、複弁になることはあきらかである。間弁もわずかに残存する。中房部分は残存していない。複線鋸歯文縁複弁七葉蓮華文軒丸瓦であると思われる。

(4) B区SR1上層出土遺物

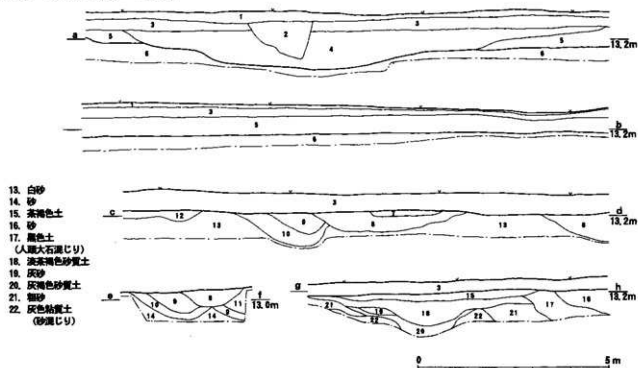
土師器鍋^④は、口縁部形態および調整手法から、南伊勢系土師器鍋の第4段階に相当するものと考えられる⁵。

(5) B区SR1下層出土遺物

軒丸瓦^⑧は、瓦当部の破片である。外区には複線鋸歯文を配す。線鋸歯文を基調とし、各辺左側に平行線を4本加えて施す。したがって、右下がりの複



第41図 調査区平面図 1 : 200



第42図 調査区土層図 1 : 100

線鋸歯文となる。内区は蓮弁が若干残存しており、複弁になることはあきらかである。子葉もわずかに残るが、中房部分は残存していない。また、間弁の痕跡も見られる。複線鋸歯文縁複弁七葉蓮華文軒丸瓦である。

(6) B区SR3出土遺物

土師器⁹は、体部が球型で丸底となる小型のものである。口縁部は外反し端部につまみ上げが認められる。外面は口縁部がヨコナデで、体部底部は細かいハケメで調整している。内面は口縁部が横方向の粗いハケメで、体部底部は縦方向のヘラズリで調整している。7世紀代のものと思われる⁸。

3 調査のまとめ

今回の調査では、まとまった遺構を検出することができなかった。調査区は、雲出川の支流である中村川から約100m前後しか離れていない。土層の堆積状況から見ると、調査区の大半は厚さ30~50cmの表土および耕作土層直下が、砂層および砂質土層になっており、多かれ少なかれ河川の堆積作用の影響を受け続けた場所であると思われる。そのため居住地としては不適切な場所であったと考えられる。むしろ本遺跡の中心は、調査区の西方および北西方のより標高の高い部分に存在するものと推定される。

(註)

1 和氣清章「一志廃寺・天保遺跡」『三重県埋蔵文化財センター年報5』三重県埋蔵文化財センター1994

2 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history vol. 1』三重歴史文化研究会1990

伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」『第4回東海考古学フォーラム 鍋と壺 そのデザイン』

東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会1996

3 註2を参照した。また、伊藤裕偉氏にご教示を得た。

4 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要V』瀬戸市歴史民俗資料館1986

5 註2に同じ。

6 城ヶ谷和広「総論 東海地方の古代煮炊具の様相と諸問題」

『第4回東海考古学フォーラム 鍋と壺 そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会1996

7 山田猛「天花寺廃寺」『昭和55年度県営園場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会1981の

今回確認した4条の河道は北西方および西方を上流としており、その埋土には7世紀代から16世紀代にかけての遺物が少量ながら含まれている。

薬師寺北裏遺跡の性格を考える上で特徴的な遺物として、B区SR1下層から出土した複線鋸歯文縁複弁七葉蓮華文軒丸瓦¹⁰・¹¹がある。この瓦は、旧一志郡内の現嬉野町内5カ所で確認されている。薬師寺北裏遺跡の範囲内で、調査区北西方向に所在する一志廃寺⁷のほか、天花寺廃寺⁸、上野廃寺⁹、嬉野廃寺¹⁰、辻垣内瓦窯跡¹¹から出土している。今回の出土例についても、外区に5本の線を単位とした右下がりの複線鋸歯文を配すといった、嬉野町内で出土している複線鋸歯文縁複弁七葉蓮華文軒丸瓦¹²に共通する特徴と一致する。小破片のため、范の異同は確認できないが、これらの例と同系であろう。この瓦の出土したSR1の上流は、一志廃寺の所在地と推定されることから、¹⁰・¹¹はこの寺と何らかの関わりを持つものと思われる。

今回の調査区は、遺跡の東端部分に相当することもあり、薬師寺北裏遺跡の全体像を的確に把握することはできなかった。しかしながら、出土遺物から見れば、薬師寺北裏遺跡は一志廃寺と関連を持つものと考えられる。(川瀬 聡)

94ページ の46

稲垣晋也「東海道古瓦の系譜(一) - 伊賀・伊勢・志摩 -」創設十周年記念皇學館大學史料編纂所論集 皇學館大學史料編纂所 1989の16ページ の24

鈴木敏雄『三重縣古瓦圖録』樂山文庫1933の第二十七版の73

『一志郡史 下巻』一志郡町村会1955の633ページ

8 山田猛「天花寺廃寺」『昭和55年度県営園場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会1981の86ページ のM22

『三重県の古瓦』三重県の古瓦刊行会1996の61ページ の4

9 和氣清章「上野廃寺発掘調査報告」嬉野町教育委員会1995の92ページ の6、7、11~17 なお、92ページ の11は、外区の複線鋸歯文はおおむね右下がりであるが、不規則的に左下がりとなっている部分がある。

山田猛「天花寺廃寺」『昭和55年度県営園場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会1981の94ページ の47 これも、外区の複線鋸歯文はおおむね右下がりであるが、不規則的に左下がりとなっている部分がある。

『三重県の古瓦』三重県の古瓦刊行会1996の66ページ
の3

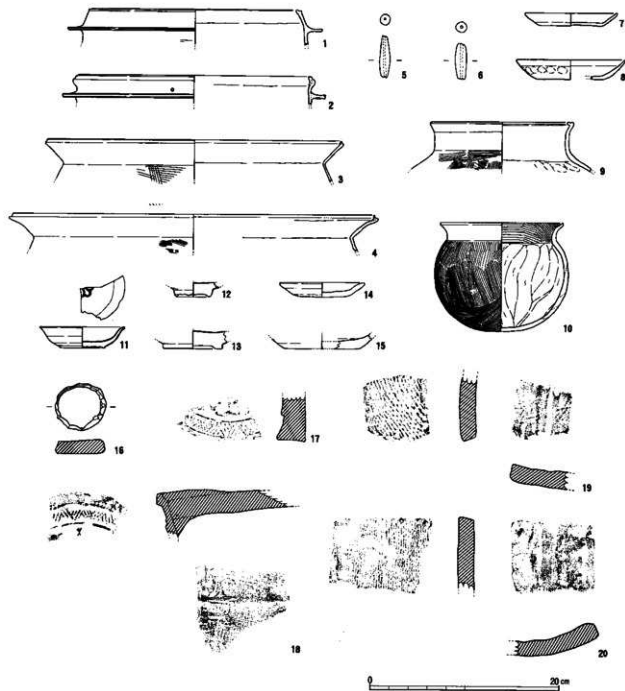
- 10 山田猛「天花寺廃寺」『昭和55年度泉宮園場整備事業
地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会1981
の94ページの48

『三重県の古瓦』三重県の古瓦刊行会1996の69ページの1
これも、外区の複線編歯文はおおむね右下がりであるが、
不規則に左下がりとなっている部分がある。

『越野町史』越野町役場1981の161ページ・221ページ

『一志郡史 下巻』一志郡町村会1955の633ページ

- 11 竹内英昭『辻垣内瓦窯跡群』越野町教育委員会1988の
23ページの4
12 複線編歯文縁複弁七葉蓮華文軒丸瓦については、註7
から11の文献のほか、上田睦・近藤康司「伊勢・伊賀・
志摩における古代瓦の様相」『紀伊半島の文化史的研究—
考古学編—』関西大学文学部考古学研究室1992を参照し
た。



第43図 出土物実測図 1:4

No.	発掘No.	器種	出土位置	口径値 (cm)	調査技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	001 -02	土師器須臈	A区 包含層	口径 2.2, 4 前後	外: ナゲ・オサエのちナゲ・ハケメ 内: ナゲ・オサエのちナゲ	密	良好	浅黄緑 に灰い緑 10YR8/4	口縁部の 1/10残	口縁以下外面 に残存片
2	001 -03	土師器須臈	A区 包含層	口径 2.5, 3 前後	外: ココナゲ 内: ココナゲ	密	良好	浅黄緑 7.5YR7/4	口縁部の 1/10残	焼成前穿孔に よる円孔、胴 部以下外面
3	001 -01	土師器須臈	A区 p i t 2	口径 3.1, 4 前後	外: ココナゲ・ハケメ 内: ココナゲ	密	良好	浅黄緑 10YR8/3	口縁部の 1/12残	口縁部内外面 に残存片
4	001 -04	土師器須臈	B区 S R 1 上層	口径 3.8, 8 前後	外: ハケメのちココナゲ・ココナゲ 内: ケズリ	密	良好	浅黄緑 7.5YR8/3	口縁部の 1/10残	外面に残存片
5	003 -02	土師	B区 S R 2	長さ 幅 1.1, 1 前後	外: ナゲ	密	良好	浅黄緑 10YR7/4	ほぼ完全	管状土師器
6	003 -01	土師	B区 S R 1 上層	長さ 幅 1.2 前後	外: ナゲ	密	良好	浅黄緑 10YR8/3	完全	管状土師器
7	002 -02	土師器須臈	A区 包含層	口径 器高 1.4 9.8 前後	外: ココナゲ 内: ココナゲ	密	良好	黄緑 5YR8/4	3/8残	
8	002 -03	土師器須臈	C区 包含層	口径 器高 2.1 11.4 前後	外: 指オサエ 内: ココナゲ	密	良好	浅黄緑 10YR8/3	3/8残	
9	002 -01	土師器須臈	B区 S R 1 上層	口径 1.5, 2 15.2 前後	外: ナゲ・ハケメ 内: ナゲ・指オサエのちナゲ	密	良好	黄緑 5YR8/3	1/3残	口縁部の 内外面に若干 残存片
10	002 -04	土師器須臈	B区 S R 3	口径 器高 1.1, 5 12.9 前後	外: ココナゲココナゲ 体底部ハケメ 内: 口縁部ハケメ体底部ヘラケズリ	細砂粒含む	良好	灰白 7.5YR8/2	1/2残	小壺型 口縁部につま み上げ
11	003 -05	灰陶器須臈	A区 包含層	口径 器高 2.2 8.9 前後	外: 胎 内: 胎	密	堅硬	灰白 2.5GY6/1	1/4残	輪匝型
12	003 -07	青磁碗	B区 S R 2	高台径 4.0 前後	外: ロクワズリ ロクワズリのち輪 内: 輪	密	堅硬	灰白 7.5Y5/3	高台部のみ 完全	印文字・帯 意匠的な打 ち欠きあり
13	003 -06	青磁碗	A区 包含層	高台径 6.3 前後	外: ロクワズリ ロクワズリのち輪 内: 輪	密	堅硬	灰白 7.5Y5/2	高台部 1/2残	
14	003 -04	陶器須臈 (山 鏡)	A区 包含層	口径 器高 1.7 9.0 前後	外: 底部 ロクワズリのち未切り 体部口縁部 ロクワズリ 内: ロクワズリ	密	良好	灰白 N-8	2/3残	口縁部内外面 に若干自然輪 打磨
15	003 -03	陶器須臈 (山 茶碗)	A区 p i t 1	口径 器高 2.2 8.0 前後	外: 底部 未切りのちナゲ 体部 ロクワズリ 内: ロクワズリ	砂粒含む	良好	灰白 N-8	1/7残	
16	003 -08	陶器 加工片	A区 包含層	直径 厚さ 1.2 1.3 前後	常滑産陶器製の口縁部を内面側から 打ち欠き 裏口唇部の3mm×10mm の面が未2次加工 (製品用縁部)	密 1.0mm の小石含む	堅硬	赤 10R5/6	完全	ほぼ円形
17	005 -01	軒丸瓦	B区 S R 1 下層	瓦当厚さ 2.2-3.0 外区幅 2.3	瓦当部裏面: ナゲ 外区幅 2.3	密 1.0mm の小石含む	良好	青灰 10B6C/1	瓦当部 1/7残	後編編曲文様 複弁七葉蓮華 文
18	005 -02	軒丸瓦	A区 試験坑 N o. 3	厚さ瓦当部 0.6-1.0 瓦当部 2.0 外区幅 2.7	丸瓦部凸面 ヘラケズリ 丸瓦部凹面 布目痕	密 1.0mm の小石含む	良好	灰白 10Y7/1	- (丸瓦 部一丸瓦部 の破片)	後編編曲文様 複弁七葉蓮華 文
19	004 -01	平瓦	A区 埋戻土坑	厚さ 1.6 前後	凸面 刷目・神板圧痕 凹面 刷目・神板圧痕	黄 0.5 -3mmの小 石含む	良好	灰白 7.5YR8/1	-	(破片)
20	004 -02	平瓦	C区 包含層	厚さ 1.6 前後	凸面刷目・神板圧痕のち局部ナゲ 凹面刷目・神板圧痕のち局部ナゲ	黄 0.5 -2mmの小 石含む	良好	浅黄緑 7.5YR8/3	-	

【色調は農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所(監修)『新版標準土色帖』(1997年版)参照】

第22表 出土遺物観察表



調査前風景B区（北から）



調査前風景C区（北から）



A区全景（北から）



B区全景（南から）



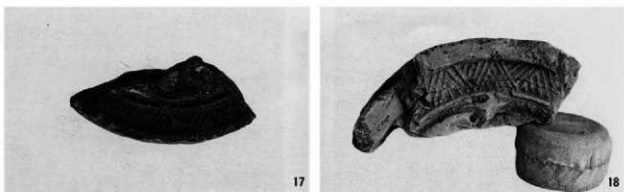
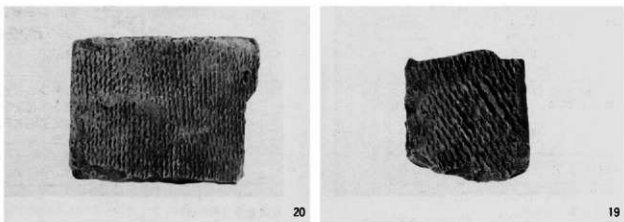
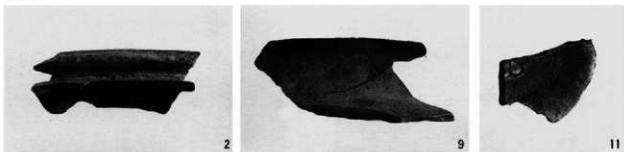
C区全景（南から）



A区攪乱土坑断面（東から）



A区pit1、pit2（北西から）



高師寺北裏遺跡出土遺物（約1：2）

報告書抄録

ふりがな	てんげいじきたせこいせきだいいちじ・やくしじきたうらいせきはつつちょうさほうこく							
書名	天花寺北瀬古遺跡（第1次）・薬師寺北裏遺跡発掘調査報告							
副書名	一志郡越野町天花寺・一志所在遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	180-1							
編著者名	木野本和之、川畑由紀子、川瀬聡							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 ☎ 0596-52-7031							
発行年月日	西暦 1999年7月30日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
てんげいじきたせこいせき遺跡	みえけんいちしぐんうれし三重県一志郡越野町天花寺字北せこにしやま瀬古・西山	24405	93	34° 37' 45"	136° 27' 55"	19970506) 19980306	上層 5,800m ² 下層 700m ²	主要地方道松阪一志線緊急地方道路整備事業
やくしじきたうらいせき遺跡	みえけんいちしぐんうれし三重県一志郡越野町一志字北裏	24405	10	34° 37' 13"	136° 27' 45"	19981006) 19981028	500m ²	主要地方道松阪一志線地方特定道路整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
天花寺北瀬古遺跡	散布地 集落跡	縄文晩期	旧河道	深鉢・石鏃				
		弥生中・後期	旧河道	壺・甕・高杯・石器類				
		古墳	旧河道	土師器・須恵器・石製品				
		飛鳥	旧河道 土師器焼成坑	土師器・須恵器		土師器焼成坑9基		
		奈良・平安	旧河道・溝	土師器・須恵器				
		中世前期	溝・土坑・ピット	土師器・陶器				
		中世後期	溝・土坑・ピット・井戸	土師器・陶器				
近世	溝	土師器・陶磁器・五輪塔						
薬師寺北裏遺跡	散布地	古墳～中世	旧河道・ピット	土師器・須恵器・陶磁器 瓦				

平成 11(1999)年7月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007)年9月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告180-1

天花寺北瀬古遺跡 薬師寺北裏遺跡

発掘調査報告

—志郡越野町天花寺・一志所在遺跡の調査—

1999年7月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 第一プリント社
